

遺構からみた那古野城の残影

● 松田 訓

名古屋城三の丸遺跡の調査では、事例の積み重ねによって近世の遺構のみならず、戦国時代の遺構が複数の地点で確認され、那古野城との関連が指摘されている。ここでは、これまで実体としてほとんどとらえられていなかった戦国時代の那古野城について、発掘調査によって検出された当該期の溝を資料として、分析と復元を試みる。まず、各調査地点の那古野城存立時期溝について、その時期と方位を検出地点によって比較し、その変化を整理することによって那古野城の変遷動向を推察すべく努力した。具体的には、各溝の時期を3期に区分し、方位を2群に大別することによって、どの空間が、どの時期に、どちらの方向を向いた溝を掘削しているのかを整理した。この作業により、方位を合わせて築城された那古野城が、周辺の築城当時正方位ではなく構成された空間を、その規模の拡張に伴って正方位の空間として取り込んでいったと推察する結果を得た。

はじめに

現在、「なごや城」として親しまれている付近は、徳川家康が西日本への押さえとして築城を命じた近世城郭としての「名古屋城」である。戦国時代にこの地に所在した「那古野城」は、本丸と附郭の位置が伝承(名古屋市1959など)されているが、実体が記された史料は皆無である。

名古屋城三の丸地区は、庁舎の新設・建て替えなどに伴って発掘調査が行われるようになり、各地点では近世の遺構を主体としながらも、戦国時代の遺構が溝を中心として確認される。これらの溝は、報告者によって時期、方位、規模、断面形態などが分析され、いくつかの視点が示されている。中でも溝の主軸線が示す方位は、早い時点から着目されており、2群に大別されてその意味するところが推察されてきた(尾野編1995)。この方位2群化案は、かつて自案でも採用してきたもの(松田編1995)であるが、他案では極端に正方位から偏る溝を1群とするならば、正方位から極端な偏りがないものはもう一方の群に組み込むものであった。しかしながら自案では、方位を2群化する上で正方位とする行為を重視し、現在の真北から測定していること、各地点で検出された溝長が短いことから生じる主

軸の誤差を6°未満まで考慮し、この範囲の軸線を示す溝を正方位とし、6°以上軸線が偏る溝は正方位を意識していないものと考えて一括した。

溝の方位を2群化する上で、こうした視点の違いは、解釈の仕方にも及んでいたため、自案の視点においてその後追加された事例も含めて整理・検討作業を行い、遺構からうかがい得る那古野城の残影を探ってみる。

1 那古野城

那古野城は現在の名古屋市中区二の丸、愛知県体育館が建つあたりに中心が所在したようである。先にも述べたように、那古野城についてはその存在を示す程度の史料(奥村1858)しか残っていない。この史料の原図は、近世名古屋城築城当時、名古屋村の庄屋が御普請奉行に提出した図で、那古野城の位置を語る場合、古今を問わずその掘り所となっている。

近世の名古屋城天守閣が、名古屋台地北西端の角地にその落ち際を利用して築かれているのに対し、那古野城も角地ではないまでも台地北西端を防御面等の理由で利用するため、築城場所が選定されたと考えてよいであろう。那古野城の年譜は、資料(名古屋市1959)等によれば以下

のようである。

大永年間(1521 ~ 28)

駿河國の守護で西への領地拡大を目論む今川氏親によって築城。氏豊が城主に。

天文元年(1532)頃

織田信秀が今川氏より城を奪う。信長はこの地で誕生の説有り、この後城主に。

弘治元年(1555)

織田信長は清須城に居を移し、織田信光が城主となり、さらに林通勝に譲られる。

天正十年(1582)頃

廃城。

2 調査例と各解釈

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市教育委員会および愛知県埋蔵文化財センターによって調査され、その地点は10例を超える(図1)。この中で、明確に戦国時代の溝が確認できた調査地点は、名古屋市教育委員会による中部電力地下変電所地点・名古屋市能楽堂地点・名城病院地点と、愛知県埋蔵文化財センターによる愛知県図書館地点・合同庁舎1号館地点・簡易家庭裁判所地点・愛知県警本部地点・愛知県三の丸庁舎地点である。このほかに、愛知県埋蔵文化財センターにより裁判所地点の南隣で平成13年度に調査が行われ、戦国時代の溝が確認されているが、現時点では報告書未刊であるため取り上げを控える。

これらの調査の中で、那古野城存立時期の溝について最初に時期、規模、断面形態の観点から段階設定を行ったのは梅本博志である(梅本編1990)。梅本は一調査地点内で溝の時期を細分化する中で、薬研堀の時期と箱堀の時期を報告し、これをそれぞれ今川氏による築城期と、織田氏による修築期の溝形態とに解釈できる可能性を提示した。

次に那古野城存立時期の溝について、時期と方位の観点から細分したのは金子健一である(金子編1992)。金子は、一調査地点内で戦国時代溝の時期と方位が、連動して変化することを報告した。2種類の方位が意味するところまで踏み込んだ指摘は成されていないが、内容としては方位2群化案に先駆けた提示といえよう。

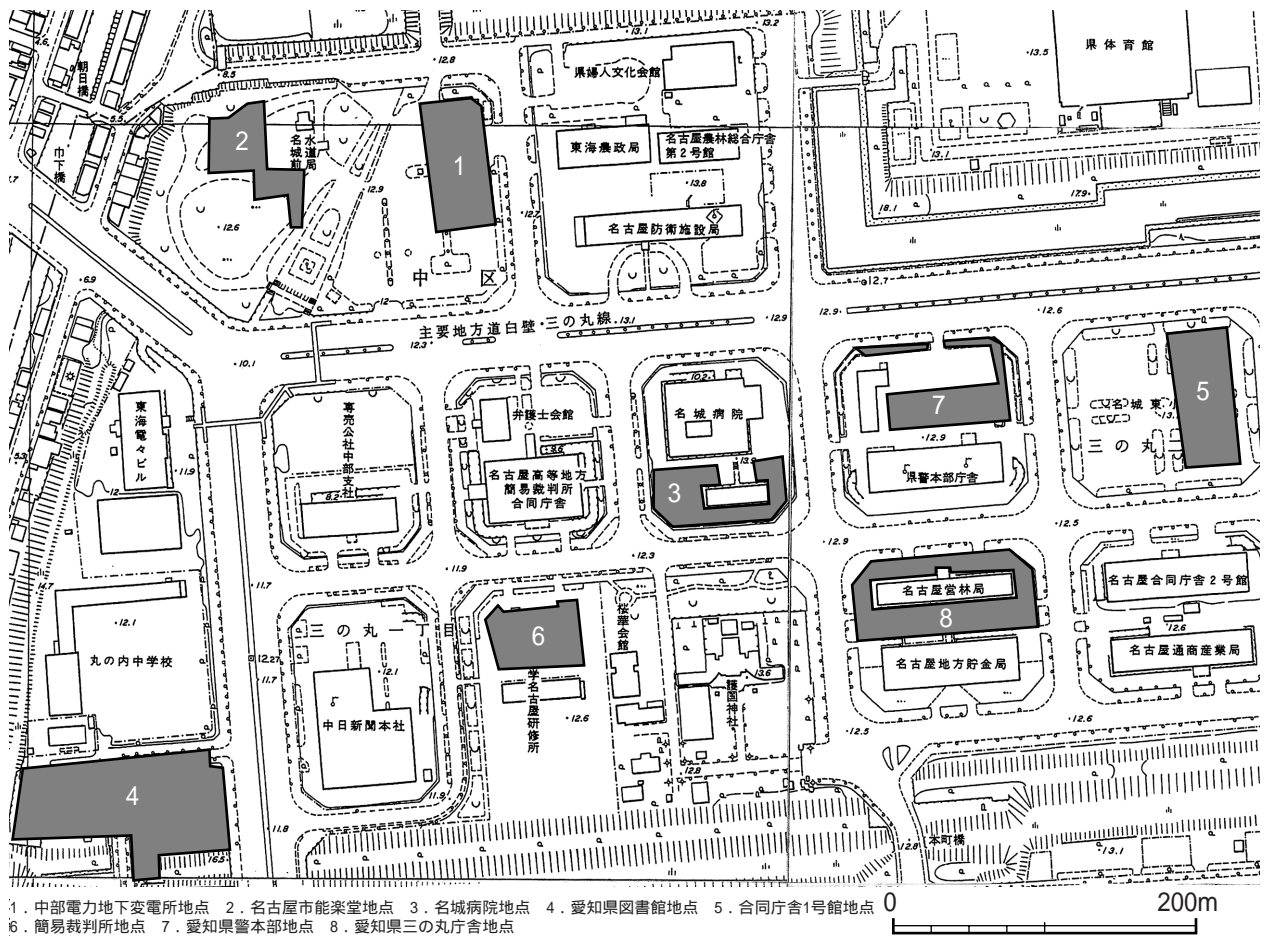
次に那古野城存立時期の溝について、規模、断

面形態、方位の観点から2種類に分割できることを指摘したのは尾野善裕である(尾野1993)。尾野は、その時点までに確認された戦国時代溝の中で、極端に規模の大きいものを抽出して「城主の居住空間を防御する堀」とし、中部電力地下変電所地点において検出された中・小規模の戦国時代溝を「家臣団の屋敷地を区画するもの」と定義し、この区画溝が約20°正方位から偏る理由を、台地のへりと関連づけて「城下町の街区が地形による制約を受けた結果...ズレが生じた可能性が高い」と指摘している。ここにおいてはじめて、方位を2種類に分けてその意味するところまで踏み込んだ指摘が成された。

次に那古野城存立時期の溝について、規模、方位の観点から屋敷(居館)群を想定したのは服部哲也である(服部・水野編1994)。服部は中部電力地下変電所地点において検出された戦国時代溝が、方形区画でブロック化することに着目し、出土遺物の年代観から「那古野城築城以前にすでに築かれた屋敷(居館)群」と推定し、正方位とは大きく偏る溝の方向性を地形または道のどちらかにより決定されたものと指摘した。

次に那古野城存立時期の溝について、時期、方位の観点から段階想定と方位2群化案を提示したのが自案である(松田編1995)。自案では、その時点までに確認された戦国時代溝の方位を2群に分け、同一調査地点内でも時期によって方位が変化することに着目し、戦国時代の溝を3時期に区分した上で、どの地点ではどの時期にどちらの方位を溝が示しているのかを整理し、那古野城が段階的に拡張された可能性を指摘した。

次に那古野城存立時期の溝について、規模、断面形態、方位の観点から2種類に分割できることをさらに発展させたのが尾野善裕である(尾野編1995)。尾野はこの時点までの調査事例をふまえて、戦国時代溝を中部電力地下変電所地点・名古屋市能楽堂地点の約20°偏るものと愛知県図書館地点の一部の溝を合わせて一群化し、その他の正方位から極端な偏りがないものは同一群に組み込んだ2群化案を提示し、両群は「時期的な遺構の変化としてではなく、同時期における遺構の性格の相違」とした考えを示し、後にこの考え方に導かれつつ「那古野城中枢部の膨張・拡大現象としてとらえられるべきもの」と改定し



1. 中部電力地下変電所地点 2. 名古屋市能楽堂地点 3. 名城病院地点 4. 愛知県図書館地点 5. 合同庁舎1号館地点
 6. 簡易裁判所地点 7. 愛知県警本部地点 8. 愛知県三の丸庁舎地点

図1 名古屋城三の丸遺跡調査地点位置図

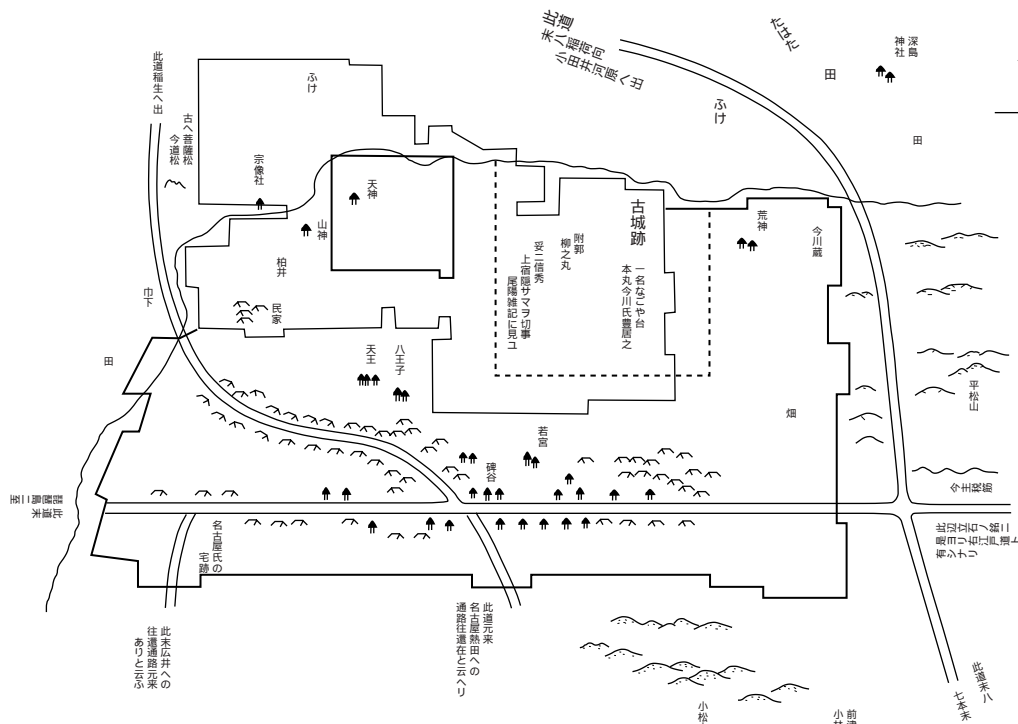


図2 「御城取大体之図」(『名古屋城史』より一部改変)

て総括している(尾野 1998)。

次に那古野城存立時期の溝について、時期と方位の観点から屋敷地の区画溝を想定したのは水野裕之である(水野編 1997)。水野は、調査地点内の戦国時代溝が少なく、これ以外の遺構がはっきりしないため、那古野城築城期前後の屋敷地を想定しながらも、「用途性格については明らかにすることは困難」としている。

次に那古野城存立時期の溝について、規模、方位の観点からその性格を説明したのは梅本博志である(梅本 2000)。梅本の説明は、那古野城主要部推定地に近い溝と、台地の西縁で検出される正方位から約 20° 偏る溝とを分けて、それぞれ城関連と屋敷の区画溝とに性格づけており、基本的には尾野案(1995)の範疇にとどまる。

3 遺構分類

ここでは、これまでの調査事例を整理する意味で、名古屋城三の丸遺跡において検出された那古野城存立時期の溝について、分類基準を提示する。

溝の方位を名称をもって 2 群化する案は、先にも述べたように尾野案(1995・1998)でも提示されている。尾野案では、A・B 群に分けられており、A 群は「ほぼ南北あるいは東西の方向性をもつもの」とされ「城の中枢部、あるいは中枢に近い部分を防御する溝」とも表現されている。B 群は「真北から約 20 度東へ振った方向か、もしくはこれとほぼ直行する方向性をもつもの」と定義されている。ただ、この溝を分類する言葉では、A 群は規模の点で堀クラスの大きさ、方位の点でほぼ正方位と理解される可能性がある。そして、明確な方位に対する分類範囲が提示されていないため、この他の溝は B 群とされる約 20 度偏る方位を示すもののみが存在するように受け取られかねない。各調査地点における那古野城存立期の溝では、後述するように正方位であって規模の小さいもの、または 6 度から 10 度偏る方位をみせるもののがかなりの数確認できる。しかし、これらの溝を尾野案の A・B 群に帰属させるには無理が生じる。したがって、かつて自案(1995)において提示した分類をここでも採用する。

まず、戦国時代の溝を出土瀬戸・美濃産陶器によって 3 時期に区分する。陶器生産の年代観については研究者によって差があるため、概観を表記する。

期

窰製品のみ出土(15 世紀後葉)

期

大窰 ・ 期製品出土(16 世紀前～中葉)

期

大窰 期製品出土(16 世紀中～後葉)

上記の時期区分で 期は、那古野城存立期以前の時期に当たり直接的な関連はないが、調査地点によっては遺構の切り合い関係を考える際に必要が生じるため、あえて設定した。

次に、主軸の示す方位を基準にして、溝を 2 群に大別する。

正方位溝群

主軸が南北・東西方位軸から大きく偏らない(6° 未満)方向を示す溝。

準方位溝群

主軸が南北・東西方位軸から右回転にやや偏る(6° 以上)方向を示す溝。

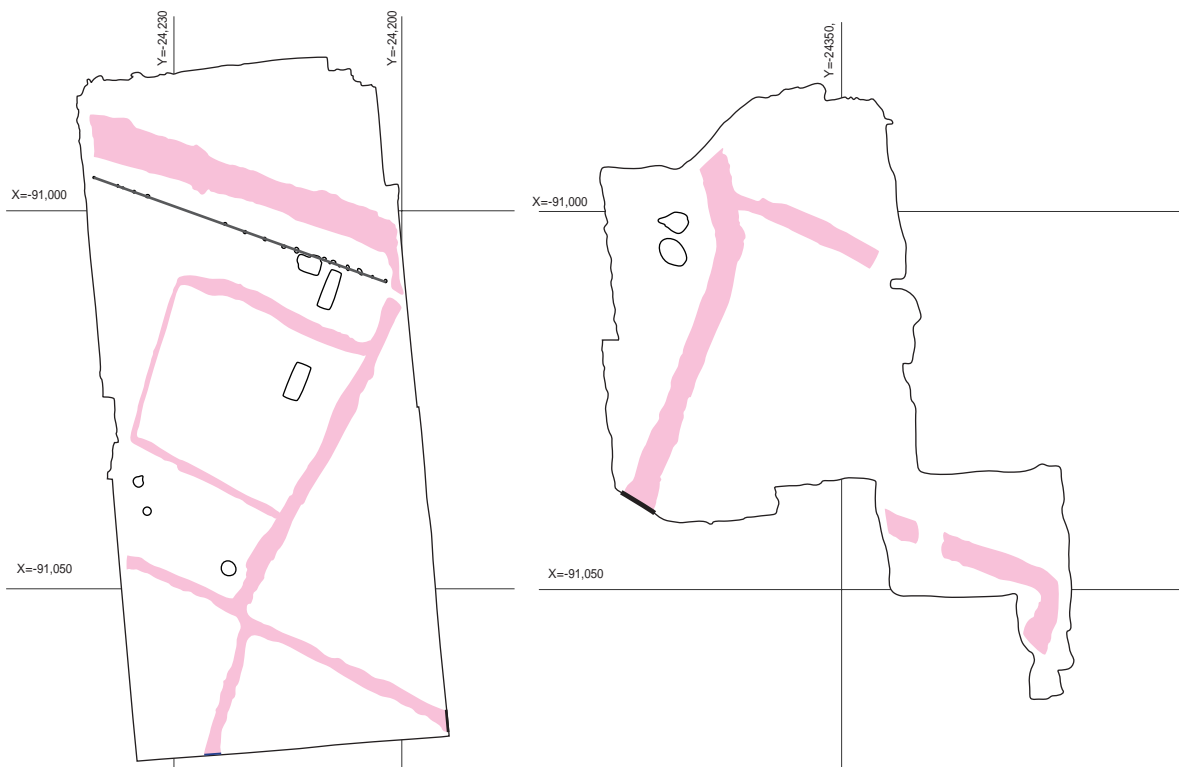
先にも述べたように、溝を掘削する者が正方位にしようとする行為を重視し、様々な要因から生じる誤差の範囲として 6° 未満を正方位溝と判定する境界とした。

4 城存立期溝の整理

那古野城存立期と思われる溝は、調査地点によってその方位に違いがみられる。城存立期の中では、基本的に示す方位に変化がない地点、時期によって方位が変化する地点、正方位に溝を掘削する意識がみられない地点などその様相は異なる。そこで、この溝が確認されている各調査地点ごとに、その時期と方位を確認してみたい。

中部電力地下変電所地点では(図 3)、検出されている那古野城存立期の溝(道路側溝含む)はすべて当分類による準方位溝で、正方位溝はみられない。この地点の当該期溝が示す方位は N - 20° - E またはこれに直交する角度であり、各調査地点の中では偏る角度が大きい。

名古屋市能楽堂地点(図 3)では、検出されている那古野城存立期の溝はほとんど当分類による



中部電力地下変電所地点
(図1-1)

名古屋市能楽堂地点
(図1-2)



名城病院地点
(図1-3)

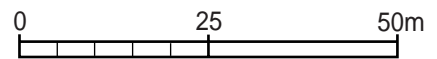
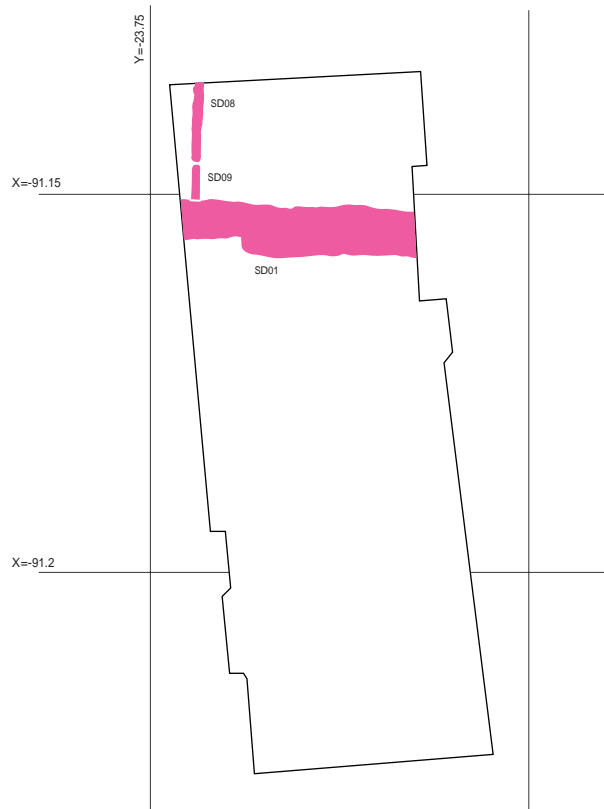
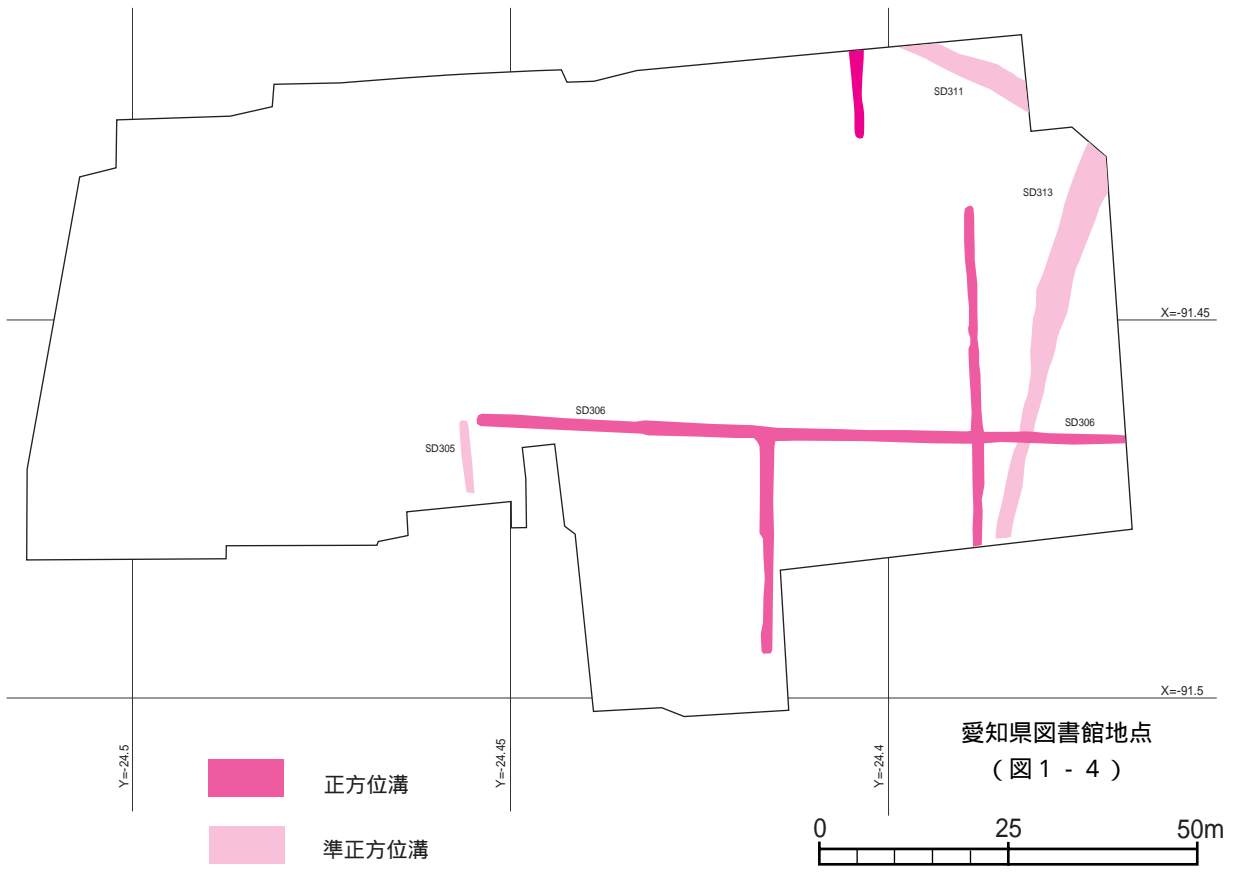


図3 名古屋市教育委員会調査地点遺構図

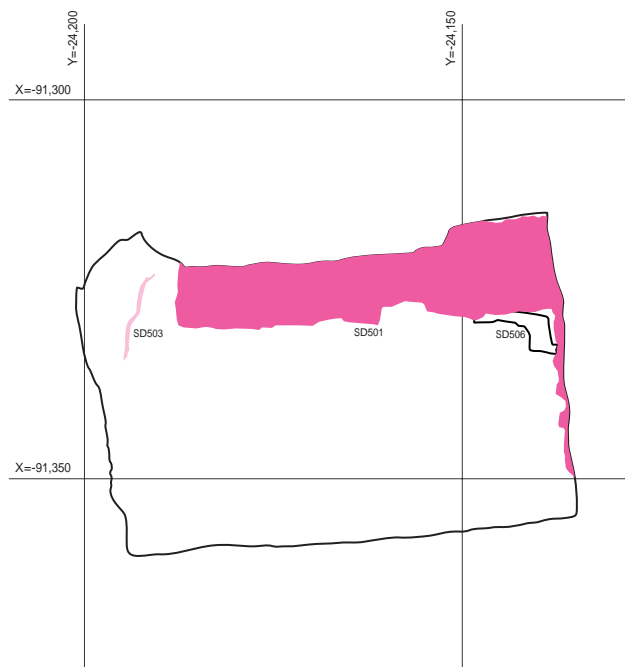


合同庁舎 1号館地点
(図 1 - 5)

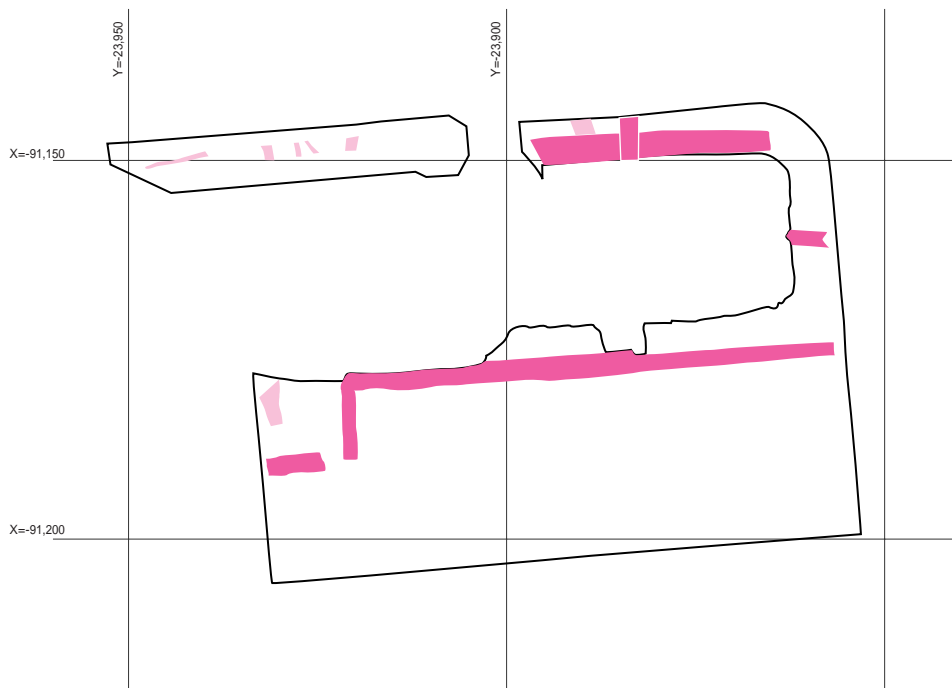


愛知県図書館地点
(図 1 - 4)

図 4 愛知県埋蔵文化財センター調査地点遺構図 (1)



簡易家庭裁判所地点
(図1-6)



愛知県警本部地点
(図1-7)

- 正方位溝
- 準正方位溝

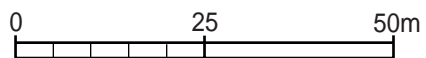


図5 愛知県埋蔵文化財センター調査地点遺構図(2)

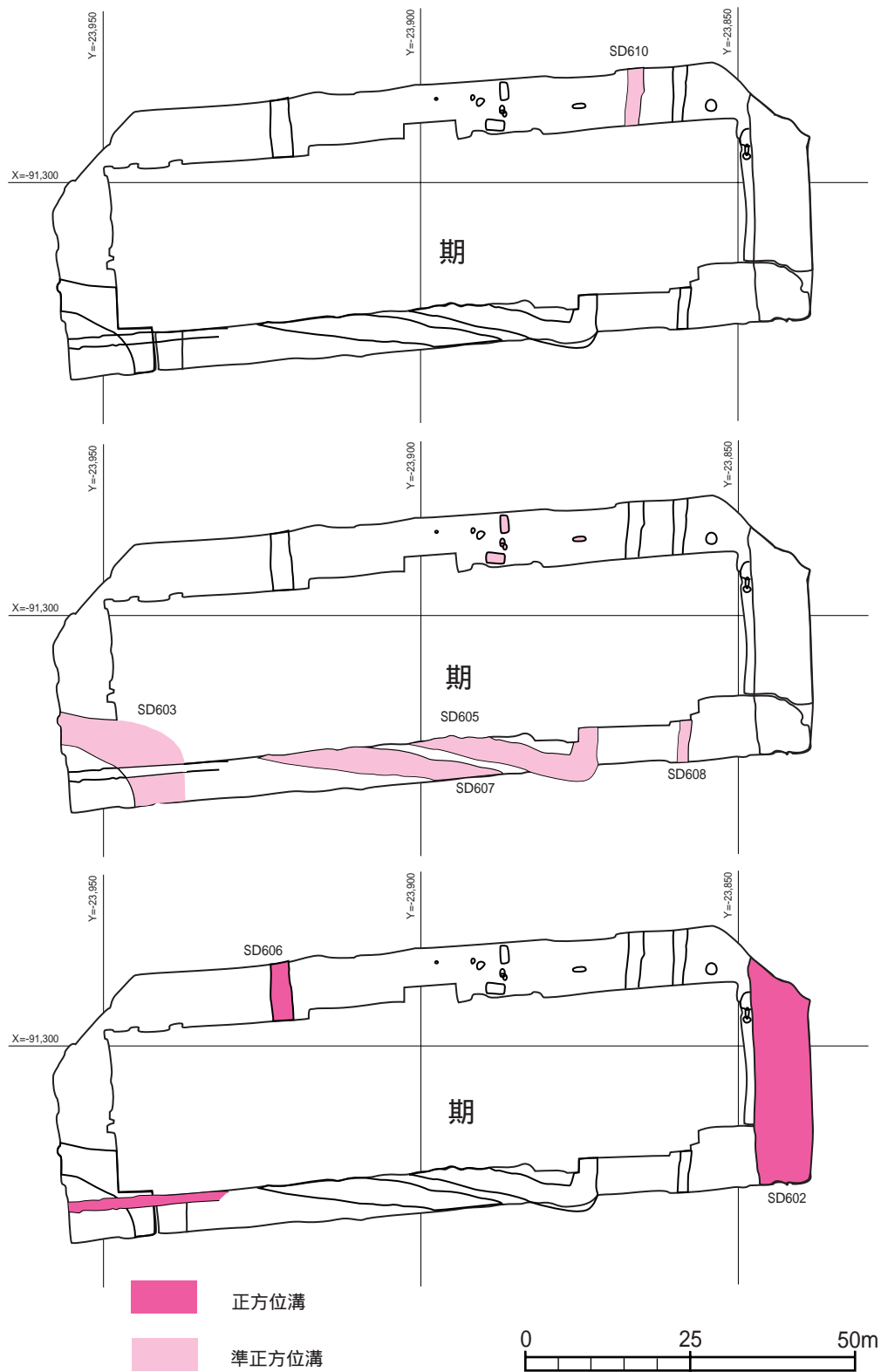


図6 愛知県三の丸庁舎地点遺構変遷図
(図 1 - 8)

準方位溝である。この地点の当該期溝が示す方位はN-15 ~ 33° -Eまたはこれに直交する角度であり、各調査地点の中では偏る角度が最も大きい。

名城病院地点(図3)では、当分類における準方位溝と正方位溝が、16世紀前半の那古野城築城期前後と報告され、混在する。この時期の溝の偏りは0 ~ 8.5°である。

愛知県図書館地点(図4)では、準方位溝は当分類による ~ 期にあたる15世紀後葉 ~ 16世紀中葉のもので、SD313はN-12° -E、SD311はN-66° -Wである。正方位溝は当分類による ~ 期にあたり、16世紀後葉までの時期が報告されていて、SD306はN-86° -W、SD307はN- 0°、SD310はN- 0°、SD312はN- 3° -Wである。準方位溝SD313と正方位溝SD306は明確な切り合い関係を持っており、那古野城存立期の中で新しい時期に準方位から正方位に空間的改変が行われたことが見て取れる。ただし、時期的には当分類による ~ 期にあたる溝の中で、SD305のみがN- 7° -Wと当分類における準方位溝にあたることも明記しておく。

合同庁舎1号館地点(図4)では、準方位に該当するものはみられず、正方位溝は城の堀規模と考えられる東西方向の大溝が、当分類の ~ 期にあたる16世紀前 ~ 中葉の中で薬研堀から箱堀に改修されたと報告されている。この大溝も含めて那古野城存立期の溝は、大溝のSD01がE- 3° -S、縦列するSD08・09はどちらもN- 2° -Eである。

名古屋簡易・家庭裁判所地点(図5)では、準方位溝であるSD506は当分類による ~ 期の時期にあたり、E- 8° -Sを示している。正方位溝は城の堀規模と考えられる東西方向の大溝が、当分類の ~ 期にあたる時期に準方位溝であるSD506を切る形で掘削されている。この大溝はL字形に検出されており、E- 5° -NおよびN- 3° -Wを示す。

愛知県警本部地点(図5)では、那古野城存立期とそれに先行する時期に分類しているが、この2つの時期を比較すると、先行する時期ではほとんどの溝が準方位を示し、大窯 期主体と報告される那古野城存立期にあたる溝では、柵列も含めたほとんどが正方位を示すようになる。

愛知県三の丸庁舎地点(図3)では、準方位溝は当分類による ~ 期にあたる16世紀前 ~ 中葉のもので、南北・東西軸からの方位の偏りは6 ~ 11°である。正方位溝は当分類による ~ 期にあたる16世紀中 ~ 後葉のもので、南北方向のものはN- 1° -E ~ N- 2° -Wを示す。準方位溝SD603(N-82° -W)は正方位溝SD601(N-86° -E)と明確な切り合い関係にあり、城の堀規模と考えられる南北方向の大溝SD602なども正方位であることから、この時期に何らかの理由で空間的改変が行われたことが考えられる。

5 検討

那古野城の城館配置等は、先にも述べたように史料などからは一切判じ得ない。したがって、ここでは現在までに発掘調査が行われた各地点の遺構を分析資料として、城とその周辺の空間的な構成について復元を試みる。

各調査地点における那古野城存立期の溝について整理した結果、戦国時代の古段階において準方位を示した溝が、新段階では正方位に変わる現象がいくつかの調査地点で確認できた。こうした現象が認められたのは、県図書館地点・裁判所地点・県警本部地点・県三の丸庁舎地点である。これらの地点では、準方位溝が埋められた後、正方位の溝が掘削される切り合い関係が確認されている。

合同庁舎1号館地点では、那古野城存立期溝の中で準方位溝がみられず、しかも大窯 期と報告された堀規模の溝が正方位で検出される。

大窯 期は当分類における ~ 期の古段階に相当するが、堀規模でこの時期に正方位を示す溝はこれまで検討してきたその他の地点では見あたらない。したがって、古い時期に正方位を示すこの地点の大溝を那古野城存立期溝の古式様相としてとらえ、その他の地点ではどの時期に正方位溝が出現するか、その変化の有無を整理する。

・合同庁舎1号館地点

期古段階(大窯 期と報告される)で正方位を示す空間。

・名城病院地点

期古段階(16世紀前半と報告される)で正方位と

準方位溝が混在する空間。

- ・愛知県警本部地点
期新段階(大窯 期と報告される)で正方位を示す空間。
- ・愛知県図書館地点
- ・簡易家庭裁判所地点
- ・愛知県三の丸庁舎地点
期(大窯 期と報告される)で正方位を示す空間。
- ・中部電力地下変電所地点
- ・名古屋市能楽堂地点

那古野城存立期を通じて準方位を示し続ける空間。

以上の結果から、合同庁舎1号館地点の大溝を方位と時期の関係において「古式様相」としてとらえると、最初から正方位であった空間が時間を経て、南西方向にある準方位空間を取り込んでゆく様相が見て取れる。この現象を正方位空間が外縁を拡大してゆくととらえれば、この空間の中心的存在は、遺構の規模、方向性、性格、伝承事例などからも、那古野城主要部と比定して間違いはなからう。

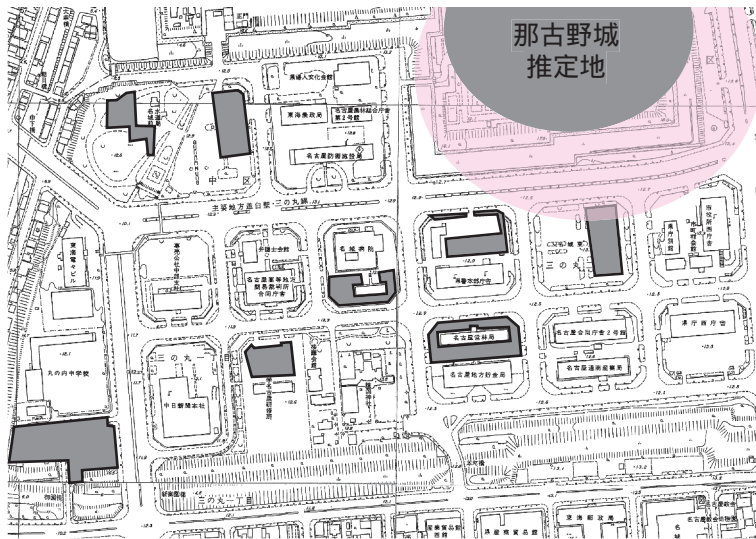
こうした現象面に則して仮説を唱えるならば、正方位で構成された那古野城は、期古段階(16世紀前葉)の築城当時、その南端を合同庁舎1号館地点付近においたが、西から南西方向では旧来の準方位を示す空間が存在しており、期新段階(16世紀中葉)の時期に城館域の拡張をまず南西側の愛知県警本部地点、名城病院地点にとり、

期(16世紀中～後葉)の時期には、さらに南～南西側の愛知県三の丸庁舎地点、簡易家庭裁判所地点、愛知県図書館地点までも拡張範囲に含まれ、西側の中部電力地下変電所地点、名古屋市能楽堂地点では、正方位を意識した拡張範囲に最後まで含まれなかった、とイメージを描くことができる。なお、図2「御城取大体之図」の中で「此道稲生へ出」と記載された道路は、S字状に蛇行しており自然地形に影響された可能性が考えられる。この空間は準方位溝群の中でも最も方位に偏りがみられ、正方位に改変された痕跡が近世名古屋城築城期まで認められないが、こ

の蛇行する稲生へ出る道を基準にして割り付けられたことが一因として考えられるであろう。したがって、準方位溝群として規定したものは、南北・東西軸線から場所によって6～25°と偏りに差がある点においても、正方位を意識していない溝は、既存の道を基準にして割り付けられたためこの差が生じたことを示唆しているものと考えたい。戦国時代の名古屋台地北西端では、地形に影響された道があり、この道を基準にして居住空間などが割り付けられ、その割付方位は道の向きによって地点による差があり、その後正方位を意識した空間が拡大していく過程で、改変される場所とそうでない場所があったと推察できるのではないだろうか。

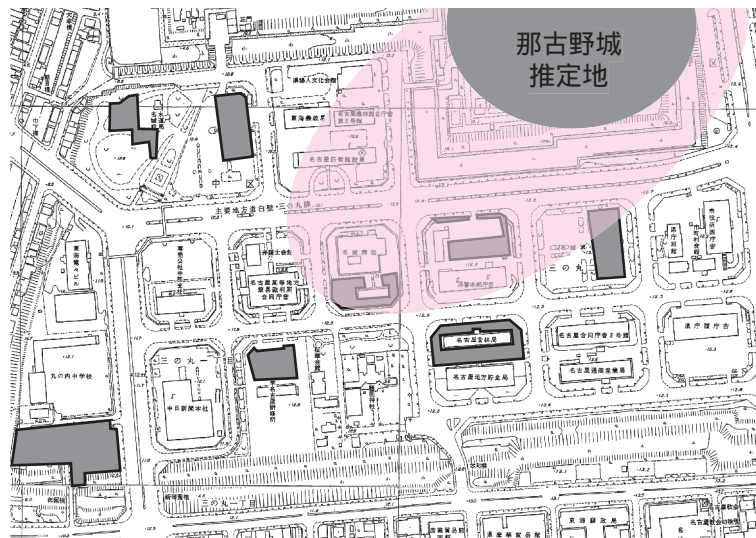
変遷イメージで問題となるのは、図2「御城取大体之図」の中で「此道末 琵琶島二至」と記載された道の成立時期である。この図の原典となるものが鶴舞図書館に所蔵されていて、琵琶島に至る道には「今中小路」と付記されている。中小路は近世の名古屋城三の丸の中では、合同庁舎1号館地点や愛知県警本部地点より南側で、愛知県三の丸庁舎地点や簡易家庭裁判所地点より北側を東西軸から大きく偏らず直行する道路であることは、各地点の近世屋敷割り復元により明らかである。したがって、期(16世紀中～後葉)の時期にすでにこの道が成立していれば、三の丸庁舎地点や裁判所地点で検出された大溝による那古野城館域の内側を貫いていたことになる。琵琶島に至る道が既存のものであれば、この道を越えて城館域を拡張した折に内外で寸断されたのか、いったん廃絶したのか、貫いて機能していたのか、「今中小路」が誤表記なのかを現時点で判断することは困難である。仮に中小路と重なる東西軸の道であっても、西方向に直行した位置に琵琶島は立地せず、近距離の段階で北西方向を目指す必要が生じることを付記しておく。

最後に、那古野城の年譜と正方位空間の拡大関係に触れておく。先に述べた那古野城拡張の時期設定が正しければ、織田信長が清須に移った後にも、大規模な拡張が行われていたことに



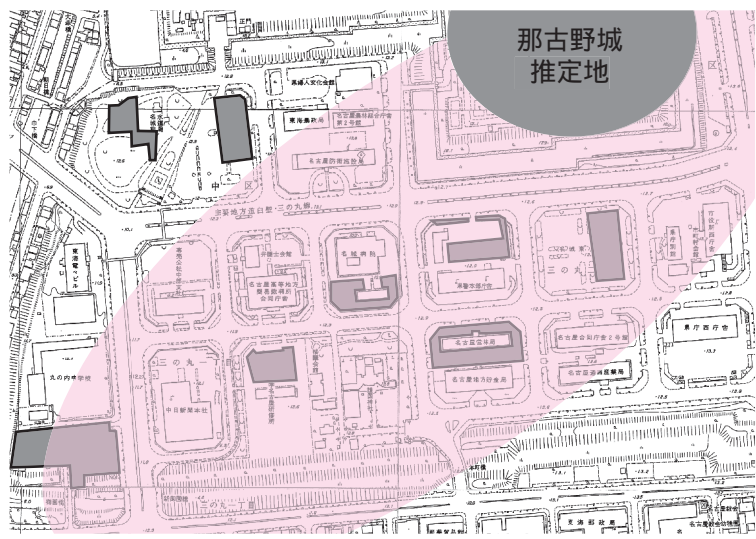
第1段階

築城当時、その南端を合同庁舎
1号館地点付近に



第2段階

城館域の拡張をまず南西側の愛知県
警本部地点、名城病院地点に



第3段階

さらに南～南西側の愛知県三の丸
庁舎地点、簡易家庭裁判所地点、
愛知県図書館地点まで

図7 正方位のひろがり

なる。那古野城は、信長が清須に移った後30年ほどで廃城になっており、この点から信長転出以降急速に重要度が薄れたようにイメージしがちである。しかし視点を変えれば、那古野城は天正十(1582)年に起こる本能寺の変からほどなく廃城となったのであり、この連動をより重視すべきではないだろうか。

信長の清須転出を考えると、発掘調査による当時の城館復元が想起される(鈴木編1995)。清洲城下町遺跡では、現在までの発掘調査による報告の中で、信長が居城した年代における大規模な城構えは確認されていない。清須城が三重の堀で囲まれた総構えの姿を見せるのは、信長の死後に行われた天正大地震に伴う大改修による。信長居城当時の清須が繁栄したことは各史料の語るところであり、信長は経済面を重視していたことも知られている。この当時経済上の拠点として、水上交通環境は不可欠である。堀川の開削前である名古屋台地北西端から五条川河畔に拠点を移したのは、経済政策が一因をなしたことも想像に難くない。しかし、軍事上の拠点として両地を比較するならば、低湿地河畔の清洲よりも台地の角地上に立地する那古野城の方が有利であろう。したがって、信長は行政、経済面の拠点としての清須城に対し、軍事面として直線距離わずか6kmに位置する那古野城を重要視し、存命中は両城をセット関係で意識していたと考えるのは乱暴であろうか。信長はさらに居城を移って行く中で、尾張における軍事上の一拠点として那古野城の利用価値を評価していたとすれば、16世紀後半における拡張も不自然ではなく、本能寺の変と連動するように廃城を迎えることも暗示的に思えるのである。

参考文献

- 名古屋市 1959 『名古屋城史』名古屋市
尾野善裕編 1995 『名古屋城三の丸遺跡 第6・7次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
松田 訓編 1995 『名古屋城三の丸遺跡()』(財)愛知県埋蔵文化財センター
奥村得義 1858 『金城温故録』(名古屋市教育委員会編1984『名古屋叢書続編第13巻』)
梅本博志編 1990 『名古屋城三の丸遺跡()・()』(財)愛知県埋蔵文化財センター
金子健一編 1992 『名古屋城三の丸遺跡()』(財)愛知県埋蔵文化財センター
尾野善裕 1993 『三の丸遺跡の調査から2 那古野城を掘る』『みはらし166号』名古屋市見晴台考古資料館
服部哲也・水野裕之編 1994 『名古屋城三の丸遺跡 第4・5次発掘調査報告書 - 遺構編 - 』名古屋市教育委員会
尾野善裕 1998 『掘り出された戦国時代の那古野城』『新修名古屋市史第二巻』名古屋市
水野裕之編 1997 『名古屋城三の丸遺跡 第8・9次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
梅本博志 2000 『掘り出された那古野城』『遺跡からのメッセージ』中日新聞社
鈴木正貴編 1995 『清洲城下町遺跡()』(財)愛知県埋蔵文化財センター

6 おわりに

那古野城が存立期にどのような空間的变化をみせたのか、当該期の溝を中心として考えてみた。この中で資料として取り上げた個々の溝が、どのような性格に基づくものかというところまで踏み込めなかったが、かつて定義されたように(尾野1993)、極端に規模が大きい溝は城の堀であり、その他の溝は屋敷の区画を目的とするものが多かったと考えられる。これらの溝の時期については、時間的制約・力量不足を越えてさらなる詳細な検討が必要であると痛感している。今回取り上げた各溝の時期は、報告されているものをそのまま採用した。この時期設定については、疑問の余地を完全否定できるわけではない。しかし、仮に出土遺物による細かな掘削時期設定が無効だとしても、遺構の新旧関係までもすべて否定することは無理である。古段階において準方位を示した溝が、新段階において正方位に改変され、この空間が当初から正方位であった主要部推定域から南西方向に向かって広がることは、発掘調査を通して明らかになった考古学的成果であり、まさに那古野城の残影といえよう。

最後に、遺構の方位及び時期については調査報告書に従ったが、表現及び取り扱い方については筆者の責任によるものであることを明示する。

愛知県における鉄器生産を考える (6)

- 鍛冶に伴う礫 -

● 蔭山誠一・堀木真美子・鈴木正貴

鍛冶工房・工人の操業スタイルを考える上で、鉄滓等の鍛冶関連資料と伴出することのある角礫について注目した。すでに当センターにて調査・報告されている稲沢市大縄遺跡・長久手町岩作城跡・佐織町川田遺跡から出土した礫について、礫の出土状況、石材の種類・形状・大きさを分析し、その特徴を明らかにした。また、川田遺跡出土の鉄床石について紹介し、今回分析した角礫と鍛冶関連資料との関連を指摘した。

はじめに

- 研究の視点と方法 -

(1) 2000年度に行った分析とその問題点

昨年度の本誌において「愛知県における鉄器生産を考える(5) - 鉄滓に付着する白い石 -」(蔭山・鈴木・堀木2001)のテーマで鉄滓に付着している白い石について分析を行った。鍛冶に伴って生成される鉄滓から鍛冶の工程を分類する事ができないか、鉄滓の表面観察に加えて新たな視点として鉄滓に付着する白い石について石の種類と形状、石の付着する位置と量を分析し、以前から検討を加えていた鉄滓の形状との比較を行った。その結果、時代により付着する石材が変化する可能性がある事、新しい時代(戦国時代以後)になると石が付着する鉄滓が多くなる事、白い石は鉄滓の上から付着する事等を明らかにすることができた。しかし、白い石がある程度高温作業の際に付着する事は分かったが、その工程を特定するには至らず、白い石が何の目的で入れられたのか不明のまま終わった。

この問題の解決には、鉄滓の表面に付着する石の白化現象の起こる温度、石の溶融する温度を明らかにしていく必要と思われる。また石の

使用方法については現代の鍛冶において石が使われていないため、実験を含めた検討から復元していく必要を感じた。

(2) 今回の分析する目的

これまで鍛冶の工程を復元するためには、鉄滓など鍛冶関連資料の観察とその分析から検討を行ってきた。今回は、私共が「中世集落と鍛冶」(蔭山・鈴木2002)において鉄滓等の鍛冶関連資料の分布から鍛冶工房・工人の操業スタイルを推定したように、別の方法から検討することが必要に思われた。そこで鍛冶工房・工人の操業スタイルを示す痕跡として、以前当センターにおいて調査・報告された稲沢市大縄遺跡において鉄滓と伴出した多くの礫について注目したい。今回は遺跡から出土する礫の特徴を明らかにし、多く出土する礫の性格について鍛冶関連遺物の出土状態から考える。これらの分析から伺われる鍛冶工房・工人の操業スタイルから鍛冶の工程について追求することはできないであろうか。

以上の視点から鍛冶に伴う礫が多く出土したと思われる遺跡として、すでに報告がされている稲沢市大縄遺跡、愛知郡長久手町岩作城跡と海部郡佐織町川田遺跡 について分析する。

礫の出土状況等について武部真木氏より教示を得た。
川田遺跡については木川正夫氏より資料の提供を受けた。

1 鉄資料に伴う礫の出土遺跡

(1) 大縄遺跡(愛知県稲沢市)

濃尾平野のほぼ中央の三宅川左岸自然堤防上に立地する遺跡で、尾張国分寺跡の西南西200mに浅い谷を挟んで隣接する。B区において中世(13世紀～15世紀前半)の区画溝・用水用溝・土坑群が確認されている。鉄資料群は12世紀中葉～13世紀前半の時期が考えられる椀型滓22点、流動滓A1点、流動滓B2点、鉄製品4点、含鉄遺物3点が出土している(図1)。

(2) 岩作城跡(愛知県愛知郡長久手町)

濃尾平野に隣接する東部丘陵上の香流川右岸段丘下位面に立地する遺跡で、国史跡長久手古戦場跡から北約1kmに位置する。遺構は古代(8世紀末～9世紀前半)の竪穴住居、土坑等、中世(13世紀末～14世紀)の道の側溝と思われる溝、土坑など、戦国時代とそれに続く近世(16世紀～17世紀中頃)の岩作城跡の堀、土塁の大きく3時期に分けられる。鉄資料のほとんどが13世紀末～14世紀の時期が考えられる土坑SX10、SK40とその上層に築かれた土塁SX09から出土しており、椀型滓126点、流動滓A19点、鉄製品6点、含鉄遺物12点、鉄塊系遺物2点、ファイゴの羽口3点がある(図2)。

(3) 川田遺跡(愛知県海部郡佐織町)

濃尾平野中南部、旧日光川系の河道左岸にあたる微高地上に立地する遺跡で、遺構は古墳時

代(5世紀末)の円墳の周溝と思われる溝、古代(7世紀前半～8世紀前半)の溝、中世(12世紀～13世紀)の方形土坑と区画溝、戦国時代(15世紀後半)の区画溝の大きく4時期に分けられる。鉄資料は古代の溝から出土するものと中世の方形土坑と区画溝から出土しているものがあり、遺構の重複関係から古代の遺物と考えられる。椀型滓21点、流動滓A3点、流動滓B6点、鉄製品9点、含鉄遺物30点、鉄片1点、ファイゴの羽口2点がある(図3)。

2 礫と鍛冶関連資料(礫の出土状況)

ここでは、遺跡ごとの礫の出土状況と鍛冶によって排出される椀型滓・流動滓A・流動滓B・ファイゴの羽口・鉄床石(以下、まとめていう場合には鍛冶関連資料と呼ぶ)の出土分布を分析する。

(1) 大縄遺跡(図1)

礫はB区の10m四方の中からの大部分が出土しているが、遺構の構築物として検出されたものはない。出土位置は遺物包含層、遺物を含む現在の耕作土中のものが圧倒的に多いが、中世の遺構からも同様な石材が出土している事から遺物包含層出土の礫もこれらの遺構に伴うものと考えられる。

鍛冶関連資料は、ほぼ礫と同じ地点から出土している。

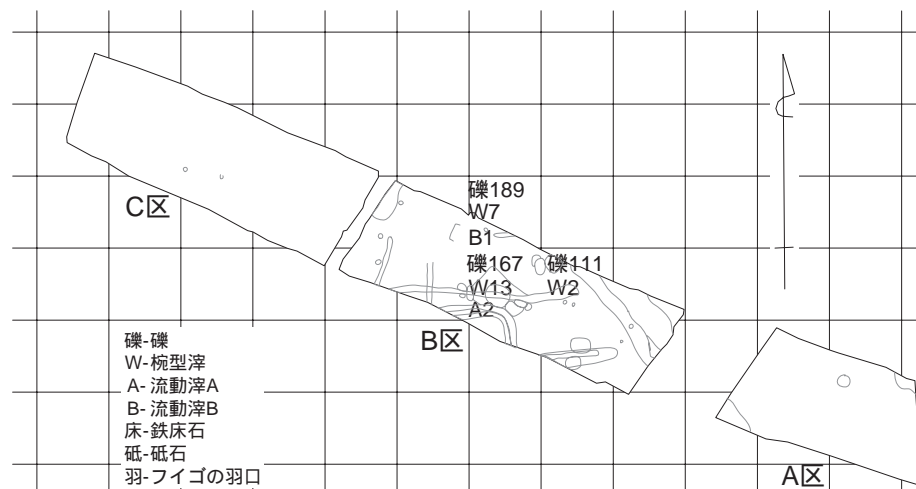


図1 大縄遺跡の礫と鍛冶関連資料の出土分布(1:1000)

(2) 岩作城跡 (図2)

礫は13世紀末～14世紀の時期が考えられる土坑SX10(不整形な溝状の落ち込み)の中から出土しており、砂質土に炭化物を多く含む埋土の中で、南寄りの炭化物の割合が多い部分の下層から角礫が集中して出土している(図2)。礫は調査区外の南から廃棄されたものが流れた状況で出土しており、構築物の一部を構成していた状況は確認できない。

鍛冶関連資料のほとんどが、礫が出土した土坑SX10、これに隣接する土坑SK40、SX10の上部に築かれた岩作城の土塁SX09から出土している。

(3) 川田遺跡 (図3)

礫は調査区南端の中世の区画溝NR01とその付近から出土のものが大部分を占め、その点を除くと、調査区東側99A区の出土が多い。NR01以外で出土した遺構は、鉄資料と同様に古代の溝と中世の方形土坑である。鉄資料と礫が伴出して出土する地点としては、鉄床石1点、椀型滓1点が出土したA地点、フイゴの羽口が2点、椀型

滓1点、流動滓B2点出土したB地点、鉄床石1点、流動滓B1点、椀型滓3点とが出土したC地点、鉄床石1点、椀型滓3点が出土しNR01付近のD地点がある。このようにみると礫の出土状況は鉄床石とフイゴの羽口の出土位置との対応関係が特に強いと考えられる。礫は古代の溝から比較的多く出土することから、当初は古代の溝への廃棄されたものが、その後中世の溝と方形土坑の掘削・埋没に際して再埋没したものが多と思われる。中世のNR01護岸等の構築物の一部を構成していた可能性もあるが、出土状況においては確認されていない。

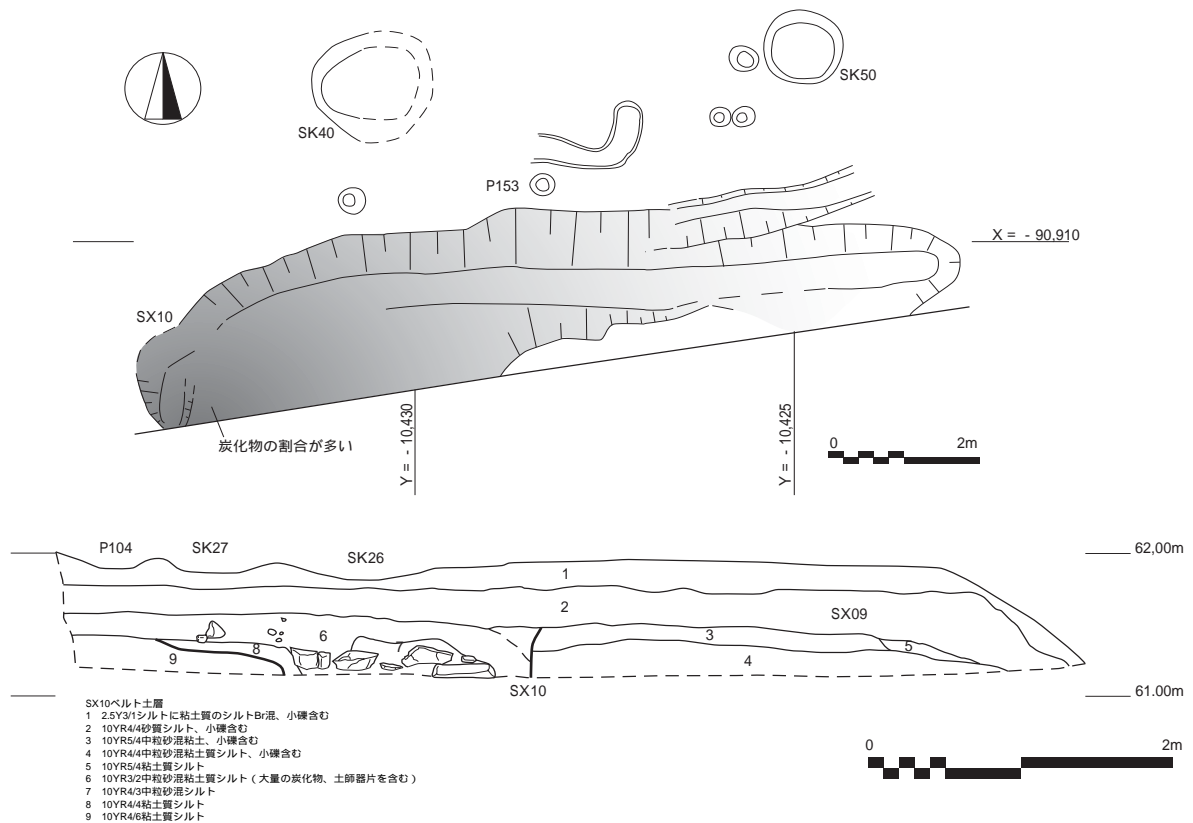


図2 岩作城跡 SX10 平面図 (1 : 80)・断面図 (1 : 50)

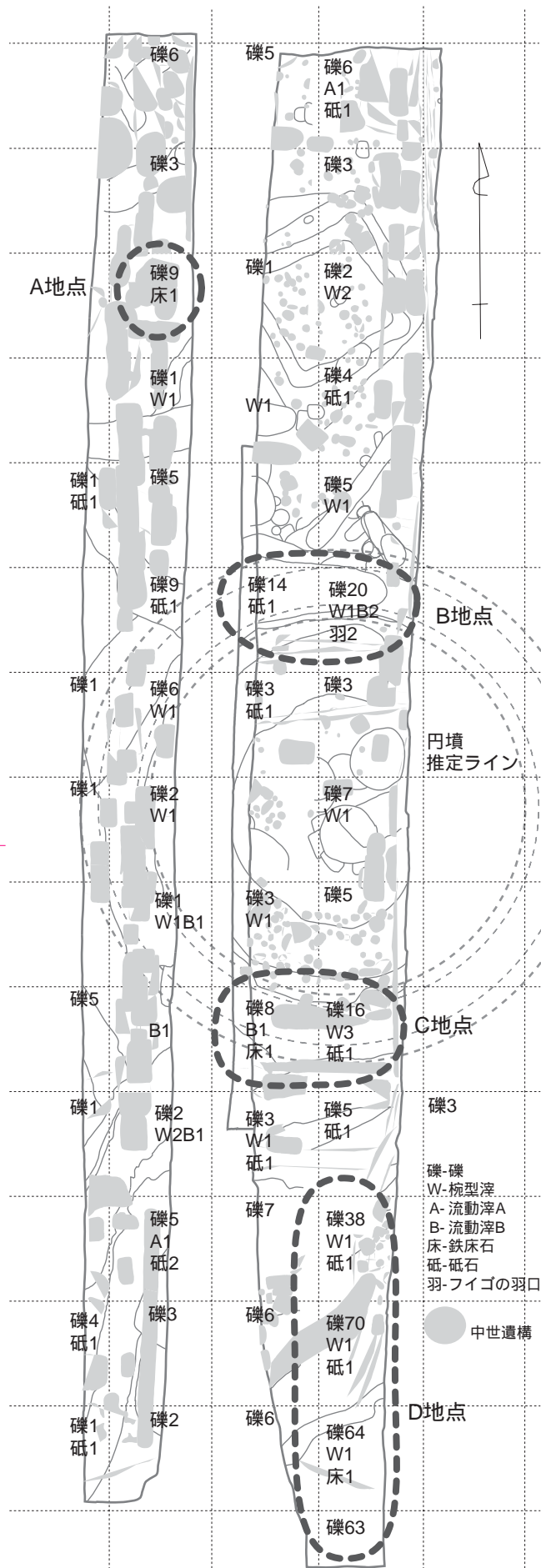


図3 川田遺跡の礫と鍛冶関連資料の出土分布

3 出土した礫の分析と川田遺跡出土の鉄床石

各遺跡から出土した礫について表面観察からの石材の同定、形態と大きさ分類を行い、整理・分析をした。また今回初めて抽出できた川田遺跡出土の鉄床石について紹介する。

(1) 大縄遺跡(表1)

礫は、その形状から次の2類に分けることができた。

角礫：礫が割れた状態にあり、礫の角があるもの。必ずしも人為的な破碎を意味しない。

円礫：礫が河原石の状態にあり、礫の角がないもの。

また、礫の大きさについては以下の通りに分類した。

L型：長径10.1cm以上のもの。

M型：長径7.1cm～10.0cmのもの。

S型：長径4.1cm～7.0cmのもの。

SS型：長径4.0cm以下のもの。

以上の基準で分類・検討した結果、次の6点のことが判明した。

礫の種類には、安山岩、凝灰岩、流紋岩、チャート、花崗岩、片岩、泥岩、シルト岩、石灰岩、頁岩がある。

量的には圧倒的に安山岩が多く、凝灰岩、チャート、流紋岩の順に多く出土している。その他の石材は1点ずつしか出土していない。

礫の大きさは量が多い安山岩、凝灰岩、流紋岩で角礫・円礫ともSS型～L型のものがあるが、安山岩は凝灰岩・流紋岩に比べて、L型の角礫が多い。片岩でL型の礫があるが、花崗岩、片岩、泥岩、シルト岩、石灰岩、頁岩ではほとんどがS型、SS型の小礫である。

礫にみられる岩石類は木曾川や庄内川等濃尾平野の周囲の山中に多く分布していること、また遺跡が平野中央部に位置していることから、遺跡近辺において角礫の入手は難しいと思われる。

礫全体では円礫が少量で、角礫が多い。安山岩、凝灰岩、片岩、泥岩では角礫が多いが、その他の石材では角礫と円礫の量的な比率はほぼ同じである。角礫の中に、人為的な破碎の可能性のある鋭角に割れた礫がみられる。

礫の一部分に被熱による赤変や煤の付着がみられるものが数点ある。礫に残る被熱痕は、あまり明瞭ではなく、被熱したと思われる礫の点数が少ないことから、礫は直接火のかかる状態で使用されたものとは考えられない。

なお、弥生時代中期にさかのぼるとと思われる磨製石斧1点(泥岩)と砥石2点(全て泥岩)が出土している。礫が鉄資料群と同じ時期のものと仮定すると、泥岩製の砥石の素材となる泥岩の礫は3点のみで、大縄遺跡に多い安山岩、凝灰岩、流紋岩、チャートの礫に関連するものはなく、礫の多寡とは関係ないものと考えられる。

(2) 岩作城跡

SX10 出土の角礫について簡潔な記述があり、フォルンフェルス、チャート等の30cm大の角礫が多いこと、一部に被熱の痕跡がみられることが報告されている。遺跡の北東部には標高120m程度の丘陵地があることから、大形の礫は入手しやすいと思われる。ただし遺物包含層中には、数cm程度の小さい礫しか含まれていない。

なお、礫と同じ遺構などから砥石5点(凝灰岩4点、砂質凝灰岩1点)、石鍋1点(滑石)、硯1点(頁岩)が出土している。これらの石製品が、出土した礫の主体とみられるフォルンフェルス、チャート等の石材を含んでいないことから考えると、礫の多寡との関連は伺われない。

(3) 川田遺跡(表2)

礫の形状から以下の通り分類した。

角礫：礫の角があるもの(写真1)。

亜角礫：礫の角がやや円磨されたもの(写真2)。

亜円礫：礫の角が円磨されているもの(写真3)。

円礫：礫の角がなく、全体的に円磨されて、球状に近いもの(写真4)。

また、礫の大きさについては以下の通りに分類した。

L型：長径10.1cm以上のもの。

M型：長径7.1cm～10.0cmのもの。

S型：長径4.1cm～7.0cmのもの。

SS型：長径4.0cm以下のもの。

以上の基準で分類・検討した結果、次の6点のことが判明した。

礫の種類には、砂岩、凝灰質砂岩、砂質凝灰岩、凝灰岩、泥岩、チャート、濃飛流紋岩、珪化木、凝灰質泥岩、泥質凝灰岩、安山岩、結晶片岩、礫

岩、フォルンフェルス、アプライト、頁岩がある。

量的には圧倒的に砂岩が多く、凝灰質砂岩、泥岩、チャート、濃飛流紋岩の順に多く出土している。その他の石材は1点ずつの出土である。

礫の大きさは砂岩、凝灰質砂岩、泥岩、チャート、濃飛流紋岩においてSS型～L型があるが、礫の出土量が多い砂岩、凝灰質砂岩では比較的L型の礫を多く含む。砂質凝灰岩、凝灰岩、珪化木、凝灰質泥岩、泥質凝灰岩、安山岩、結晶片岩、礫岩、フォルンフェルス、アプライト、頁岩ではやや大きいものを含むが、L型の石材はなくS型、SS型の小礫が多い。

礫にみられる岩石類は木曾川や庄内川等濃尾平野の周囲の山中に多く分布しており、遺跡は濃尾平野中央部に位置していることから、遺跡周辺ではS型より大きい礫(角礫)は入手しにくいものと思われる。

円礫・亜円礫・亜角礫が少量あるが、礫の大部分は角礫の状態にあり、人為的破砕の可能性のある角が鋭角に割れた礫もみられる。石材の種類による違いはみられない。

礫の一部に被熱による赤変や煤の付着がみられるものがある。被熱痕が部分的で不明瞭であること、被熱を受けたと思われる礫が数点のみであることから、礫が直接火のかかる状態で使用されたものとは思われない。

なお、礫が出土した同じ遺構などから出土した砥石16点(砂岩7点、砂質凝灰岩1点、泥質凝灰岩2点、凝灰岩4点、凝灰質泥岩1点、チャート1点)、不明石製品1点(砂岩)、鉄床石3点(砂岩)が出土している。出土した石製品には砂岩2点(図4-1・3)と凝灰質砂岩(図4-2)が多い点は礫の石材構成を反映しているといえる。

(4) 川田遺跡から出土した鉄床石(図4)

川田遺跡からは砂岩2点が用いられた鉄床石が3点確認できた。

この3点を鉄床石とした理由は、角礫から亜角礫に分類できる砂岩礫の比較的平坦な面に打撃による擦痕が顕著に認められたこと、その擦痕が顕著な箇所を中心に煤が付着したような被熱痕が認められたことによる(写真5)。

1はほぼ完形のもので、不整な三角錐状の形態をしている。擦痕が残る面以外は自然面が残り、特別な加工はされていない。大きさは長さ

表1 大縄遺跡出土の礫の形態と大きさ

調査区	遺構・出土位置	安山岩	凝灰岩	流紋岩	チャート	花崗岩	片岩	泥岩	シルト岩	石灰岩	頁岩
B	S K 39	M1	L1								
B	S K 44	S2	L2, M1, S1		S S1						
B	S K 46	L2, M6, S1	L2								
B	S D 04	S1, S S1	S S1								
B	S D 06	L1 S1, L1	S2								
A	東・西トレンチ	S1									
B	検 (A 5 s)	L4, M9, S18, S33, S5, S54	L1, M2, S3, S5, S2	M1, S4, S5, L1, S52	S3, S5, S2, S4, S59	S2	M1, S1	M2, S1	S S3		
B	攪乱 A4s	L15, M27, S36, S519, M3, S2, S52	M12, S6, S54, S3	L1, S54, L3, M1, S54	M2, S2, S515, M1, S59	S3, S52, S2	S4, S S3		S S2		SS1, S1
B	攪乱 (B6a)	L5, M11, S512, L1, S55	M4, S7, S53, L1	L1, S51, S1, S57	L1, S12, S12	S1, S523, S1, S12	S1, S51, S1	L1, S S1	S S2	SS4, SS1	S1, S51
C	水田耕作土	L13, M15, S14, S510, L1, M2, S2, S51	L1, M11, S14, M1	L2, M1, S1, S51, M1	M1, S4, S54		L1				

角礫 : 円礫 L : 長径10.1cm ~ M : 長径7.1cm ~ S : 長径4.1cm ~ 7.0cm S S : 長径 ~ 4.0cm 10.0cm

41.8cm、幅 18.3cm、厚さ 16.6cm を計る。擦痕が残る面は長さ 32.0cm、幅 13.0cm の不整な長楕円形で、擦痕は平坦な面の中央部付近とその面の両端部に近い部分の3箇所に認められる。被熱痕は中央の部分に認められる。石材は断面が不整形形状で擦痕が残る面を上にして自立できないが、埋設痕は認められない。

2・3は一部分であるが、1の形態を参考にする
と2は端部際の部分、3は側面の部分に当たるもの
のと思われ、擦痕が残る面以外に自然面を残す
面がある。

2は比較的きれいな直方体をしており、残存部の
大きさは長さ 14.3cm、幅 13.3cm、厚み 7.2cm
を計る。平坦な面全体に擦痕があり、残存部の中央
部付近の擦痕が顕著であり、その部分に被熱痕
も重なる。石材の下面も比較的平坦であるが、擦
痕が残る面を水平にするためにはその石材を地
面などに埋設しなければならないであろう。

3は残存部が長さ 9.0cm、幅 5.7cm、厚み 5.8cm
と一部分であり、全体の形状は不明である。残存
している部分では、擦痕は平坦な面全体にはな
いようであり、擦痕が比較的顕著な部分(図 4-3)
に被熱痕も偏っている。

4 まとめ - 礫と鉄床石 -

前節までに、出土した礫の種類、礫の種類
ごとの出土量、礫の種類と大きさごとの出土
量とその構成、礫の岩石分布と遺跡周辺にお
ける礫の入手条件、礫の形態からみた出土構
成、礫にみられる被熱痕の主に6点について各

遺跡出土の礫についてその特徴を明らかにした。

遺跡によって出土した礫の種類やその構成に
違いはあるが、遺跡にある地理的条件の違いや
遺跡の時期の違いなどが反映している可能性が
ある。しかし、これらの違いがあるにもかかわらず、
角礫が主体を占めること、出土した礫の大き
さごとの出土構成、礫にみられた被熱痕のあり
方について共通する点がある。

以上の共通する点と礫と鍛冶関連資料の出土
状況における共伴性、川田遺跡にみられた鉄床
石が角礫の主体となる砂岩であり3点の内2点が
破砕された状態で出土していること、また大縄
遺跡・川田遺跡は平野部に位置していることか
ら円礫は入手できても角礫は入手しにくいこ
となどから、これらの角礫は遺構は見つかって
いないものの鍛冶作業にかかわる石材として運
ばれ、その一部は鉄床石の破片として廃棄され
たものであったと考えたい。

最後に、このようにみていくと、鉄床石など鍛
冶関連遺物の一部をなすものが、遺跡から出土
した礫の中に遺物として認識されてこなかった
可能性がある。遺跡の地理的環境も考慮に入れ
ると、これらの礫も今後の研究対象として認識
していかなければならないと考えられる。



写真1 川田遺跡出土の角礫

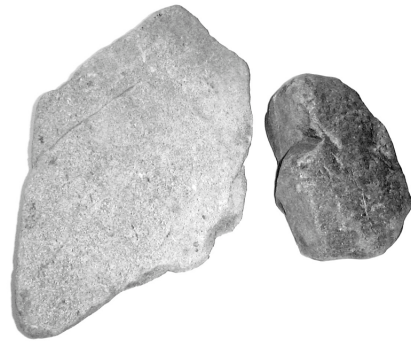


写真2 川田遺跡出土の歪角礫



写真3 川田遺跡出土の歪円礫



写真4 川田遺跡出土の円礫

参考文献

- 蔭山誠一・鈴木正貴・堀木真美子 2001「愛知県における鉄器生産を考える(5)」『研究紀要第2号』愛知県埋蔵文化財センター
蔭山誠一・鈴木正貴 2002「中世集落と鍛冶―尾張地域を中心にして―」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム
蔭山誠一編 1997『大縄遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第74集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター
武部真木編 2000『岩作城跡 能見城跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第89集)愛知県埋蔵文化財センター
木川正夫 2001「川田遺跡」『年報平成11年度』愛知県埋蔵文化財センター

表2 川田遺跡出土の礫の形態と大きさ(1)

調査区	遺構・出土位置	グリッド	砂岩	凝灰質砂岩	泥岩	チャート	濃飛流紋岩	その他
99A	検	H18t	S1		SS2			SS1アブライト
99A	検	H4s	M1	M1	SS2		SS1	
99A	検	H4t		M1			SS1	
99A	検	H5t	M1					
99A	NR01下層	H5t	SS1,S2,M5,L5・ M2,L1	L1・ M1,L1	SS1,S2	S1		S1礫岩・ S1凝灰質泥岩・ S1珪化木
99A	NR01上層	H4t	SS1,S10,M1,L2・ S1	S2,M1	S2・ SS1・ SS1	SS1,S2	S1	S1砂質凝灰岩・ S1珪化木
99A	NR01中層	H5t	S6,M4,L1	S2,M2,L1・ M1	S1	SS2,M2		SS2砂質凝灰岩
99A	P013			M1				
99A	P027	H2t		S1,M1,L1・ M1	S1		S1	
99A	P032	H2t	L1					
99A	P035	H20t		L1				
99A	P132	H16s			S1			
99A	P160	H11t						L1結晶片岩
99A	P175	I11a			SS1			
99A	SD01	H1t					S1,M1	
99A	SD01	H2t	S2,M2,L2・ S1,M1	SS1		SS1,S1		M1砂質凝灰岩
99A	SD01	H3t	L1					
99A	SD01下層	H3t	SS1,S7,M2,L4・ M4,L5	SS2,S5,M6,L2・ M2,L4		SS2		M1安山岩
99A	SD02	H2t			SS1	SS2		
99A	SD03	H3t	M1		S1			
99A	SD08	H17t	S1					
99A	SD08	H18t	S1					
99A	SD08	H20t	L1	SS1				
99A	SD09	H20t	S2・ L1					
99A	SD18	I11s				SS5		
99A	SD25	H15t	M1			S1		
99A	SD25	H16s	S1,M2,L1		SS1			L1ホルンフェルス・ SS1凝灰岩
99A	SD25	H16t	S1,M1・ M1,L1	M1	SS1	SS1		M1砂質凝灰岩
99A	SD27	H20t	S1					
99A	SD27	H1s		S1			S1	
99A	SD28	H20t	S1・ M1					
99A	SD29	H19t					S1	
99A	SD30	H17s			M1			
99A	SD33	H2t			M1		S1	
99A	SD34	H4t	S5,M4・ SS1,L2	S3,M3・ M1	SS1・ S1	SS2,S1,M1		
99A	SK08		M1					
99A	SK11		S1	S1				
99A	SK12	H14t				SS2・ SS1		
99A	SK13				M1			
99A	SK34	H16s	L1					
99A	SK34	H16t	L1・ M1	S2				
99A	SK56	H11t		M1				M1珪化木
99A	SK58	H11t	SS1					
99A	SK60	H11t	S1					
99A	SK67	H12t			SS1			
99A	SK77	H12t		S1				
99A	SK78	H12t		S1				
99A	SK81	H13t						M1凝灰岩
99A	SK82	H20s	L1					
99A	SX01	H2s	SS1,S2,L1・ L1					M1凝灰岩
99A	SX02	H20s	M1		SS1・ SS1			SS2凝灰岩
99A	SX02	H20t		S1				
99A	北壁トレンチ	H11t	S1					
99A	北壁トレンチ	I11a			S1	S1		
99A	検	H13s			SS1			
99A	検	H13t		S1				
99A	検	H16s	S2	M1	M1			
99A	検	H16t	SS1,S1,L1	L1	SS1			
99A	検	H17s			SS1	SS1		
99A	検	H17t		S1	S1			
99A	検	H19s	S1	SS1		SS1		
99A	検	H19t	SS1	S1		SS2		
99A	検	H20s		SS1				
99A	検	H20t	M1,L1	SS1,S1	SS1			
99A	検	H1s		L1				
99A	検	H2s		SS1				

表3 川田遺跡出土の礫の形態と大きさ(2)

調査区	遺構・出土位置	グリッド	砂岩	凝灰質砂岩	泥岩	チャート	濃飛流紋岩	その他
99A	検	H2t	S1,L2・ S1,L1	S2・ M1,L1	SS1,S2		SS1	S1珪化木
99A	検	H3s				SS1		
99A	検	H3t			S2			
99A	西拡張トレンチ	H16s			L1			
99A	西拡張トレンチ	H20s					M1	
99A	西壁トレンチ	H3s		SS1	SS1,S2,M1			
99A	西壁トレンチ	H4s	S1,M1		S1	L1		
99A	西壁トレンチ	H5t	S1,M2	SS1,S1	SS1	SS1		SS1軽石・ M1結晶片岩
99A	東壁トレンチ	H16t	S2	S1				
99A	東壁トレンチ	H18t	L1・ SS1					
99A	東壁トレンチ	H2t	M1	S1				
99A	東壁トレンチ	H3t	S1・ SS1	S4・ L1	SS5,S4	SS1		S1砂質凝灰岩
99A	東壁トレンチ	H4t	S1,M1,L1・ L1	SS1,S1,M1		L1		M1凝灰岩
99B	SD03	H2r	M1,L1・ M1					
99B	SD05	H1q	L1・ L1					
99B	SD05中層	H1q	L1					
99B	SD06	H16r	M1					
99B	SD06下層	H17r			S1		L1	
99B	SD06下層	H18r	L1					
99B	SD06下層	H19r	L1					
99B	SD06上層	H17r	L1					
99B	SD06上層	H16r	L1・ L1					
99B	SD06第3層	H17q	M1					
99B	SD07	H15q	S1					
99B	SD07	H15r		S1				
99B	SD07	H16r	S1					
99B	SD08	H3q						SS1砂質凝灰岩
99B	SD08	H3r	S1・ L1					
99B	SD08	H4q	L1					
99B	SD08下層	H3q	L1・ L2					
99B	SD12	H12r	L1					
99B	SD18	H3r		SS1				
99B	SK12	H11r		S1				
99B	SK13	H11r						SS1凝灰岩
99B	SK15	H11r				SS1・ SS1		
99B	SK26	H13r	S1			SS2・ SS1	SS1	
99B	SK33	H15r	S1・ SS1					
99B	SK37	H15r						S1凝灰岩
99B	SK42	H17r				SS1		
99B	SK71	H17r	SS1	SS1				
99B	SK73	H18r		S1				
99B	SK75	H18q		S1				
99B	SK78	H14r					SS1	
99B	SK83	H12r				SS1		S1ホルンフェルス
99B	SK86	H16r	M1					
99B	攪乱	H16r		SS2		SS1・ SS1		
99B	攪乱	H4r			SS1		SS1	
99B	検	H11r				SS2		
99B	検	H13r	SS1		SS2	SS1		S1珪化木
99B	検	H20q	SS1		SS1			
99B	検	H2r						M1ホルンフェルス
99B	西トレンチ	H20q		SS1			S1	

:角礫、 :歪角礫、 :歪円礫、 :円礫 L:長径10.1cm~ M:長径7.1cm~10.0cm S:長径4.1cm~7.0cm SS:長径~4.0cm

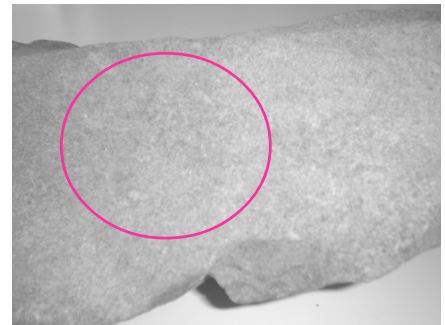
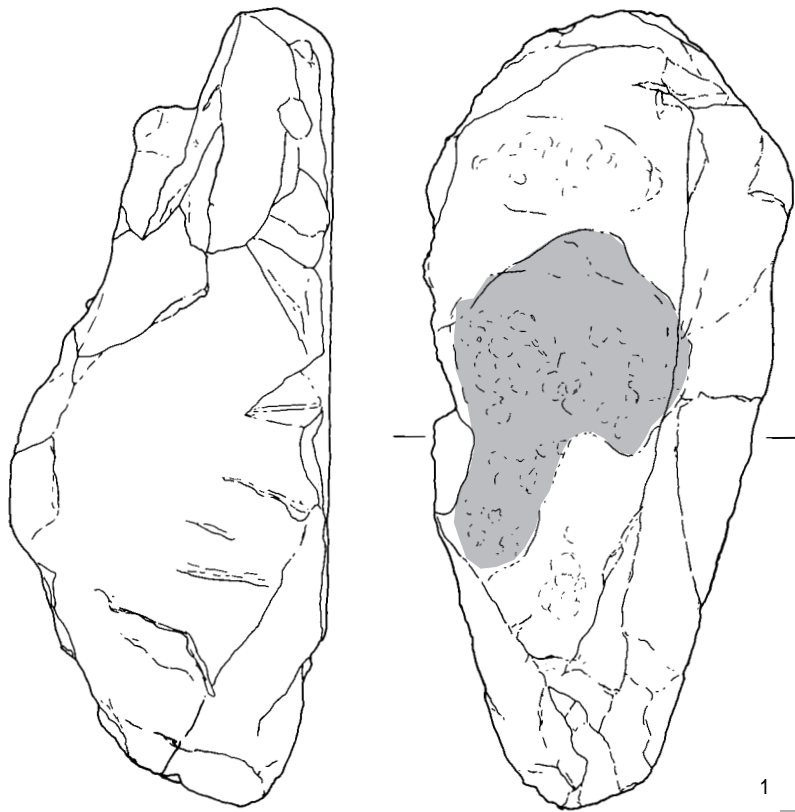


写真5 鉄床石1の擦痕と被熱痕

被熱痕

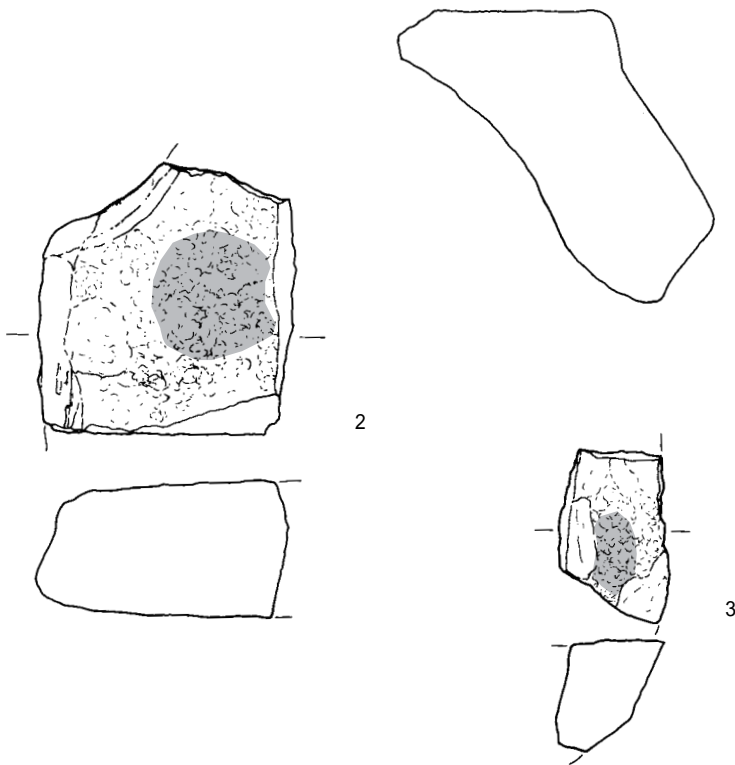


図4 川田遺跡出土の鉄床石(1:4)

下懸遺跡出土の木簡

池本正明・福岡猛志

下懸遺跡は、愛知県安城市桜井町に所在する弥生時代終末期から古墳時代前期を中心とする集落遺跡である。調査では、弥生時代終末期から古墳時代前期の居住域と、その外縁部に展開する谷地形が確認されている。本稿で資料紹介する木簡は、谷地形の上層から1点単独で出土したものである。釈文は一面が「春春秋秋尚尚書書律」、その裏面が「令令文文 是(カ)是人」となる。四書五経の題目などを墨書したいわゆる習書木簡である。習書木簡ではあるが、記載された内容が律令官人と関わりが窺える興味深い資料といえる。本稿では、木簡の資料紹介を主題とする。周辺の状況、伴出資料の検討から、木簡の帰属時期を推定し、記載内容についての検討を加える。

1 下懸遺跡の概要

下懸遺跡は、愛知県安城市桜井町に所在している。地形的には、矢作川によって形成された沖積低地の微高地上に該当する。

発掘調査は、県建設部河川課による鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、平成12年12月から13年3月まで実施した。調査面積は3,700㎡である。調査区は、これを横断する道路及び排水路により、5分割して設定され、南側からA区～E区と命名されている。

今回の調査で検出できた遺構には、弥生時代中期、弥生時代終末期～古墳時代前期と奈良時代～鎌倉時代にまとまりを確認することができる。このうち中心となるのは、弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構群である。具体的には、C区～E区にかけては竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、土器集積遺構などが検出され、居住域としての性格を考えることができる。

また、A・B区では、谷地形(NR01)が確認でき、ここからは弥生時代終末～古墳時代初頭の木製品が出土している。これらには未製品も多数含まれており、調査区が木製品の製作地と近接した場所にあった可能性が強い。

本稿で資料紹介する木簡は、この谷地形の上部、A区から出土している。

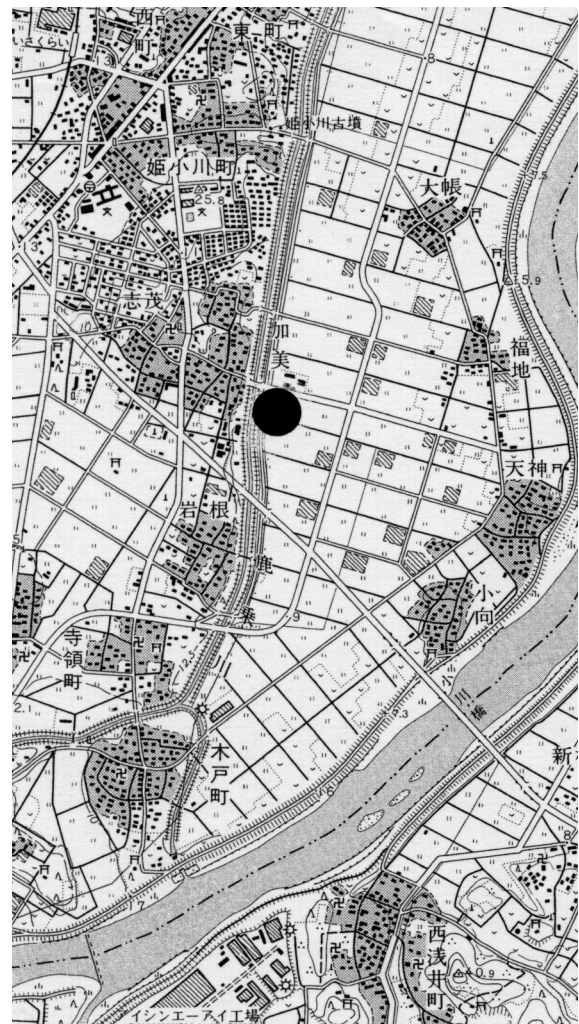


図1 下懸遺跡の位置(1/2.5万「西尾」)

日本福祉大学副学長(愛知県埋蔵文化財センター専門員)

次に、下懸遺跡に近隣する遺跡を古代に眺めると、まず南南西に0.9km地点には、寺領廃寺と呼ばれる古代寺院が知られている。推定されている寺域は、東西が240m、南北が180mである。創建時期は不明確だが、奈良時代初期には存在していたことが推定されている。昭和32年に石田茂作の手により発掘調査が実施され、金堂、講堂、東塔などの堂宇が確認されている。遺跡は洪積台地の縁辺部に所在し、特に東塔は低地へ向けて傾斜する緩斜面上に位置している。古代寺院としては特異的な立地と言える。

次に南西0.4kmには、加美遺跡が知られている。昭和63年に本センターの手により発掘調査が実施され、中世集落と重複する形で、古墳時代～平安時代の集落遺跡が検出されている。調査面積は2,500㎡。調査区の中央～西部を中心として、竪穴住居が15棟検出されている。竪穴住居は時期が下ると小型化し、プランがやや崩れる傾向にある。なお、同時期の掘立柱建物は報告されていない。出土遺物は乏しく、調査地点のみを眺めると小規模な集落遺跡であったと考えられる。なお、粗製ではあるが、畿内系土師器の杯Aが1点出土している。

2 木簡の出土状況

本稿で資料紹介する木簡は、A区の北東隅付近から出土している。出土場所は、上記した谷地形の上層に該当する。

谷地形の埋土は、10数層のシルト層群で構成されている。調査時期が湧水期であったにも関わらず湧水が激しく、これを基底部まで完掘することはできなかった。なお、確認できた最下部では、埋土が粗粒～極粗粒砂の堆積層群となっていた。

NR01は、調査時に四段階に分けて掘削した。具体的には、図4に示すように上部から順に検出～と呼称した。検出～がシルト層群、検出～が粗粒～極粗粒砂層に該当している。

検出～までの埋土の堆積状況を観察した結果、部分的には薄い細砂層が断続的に確認でき、ゆるやかな水流が想定されるも、全体としては大きな水流はなかったと思われ、非常に緩やかに埋没したものと考えられる。

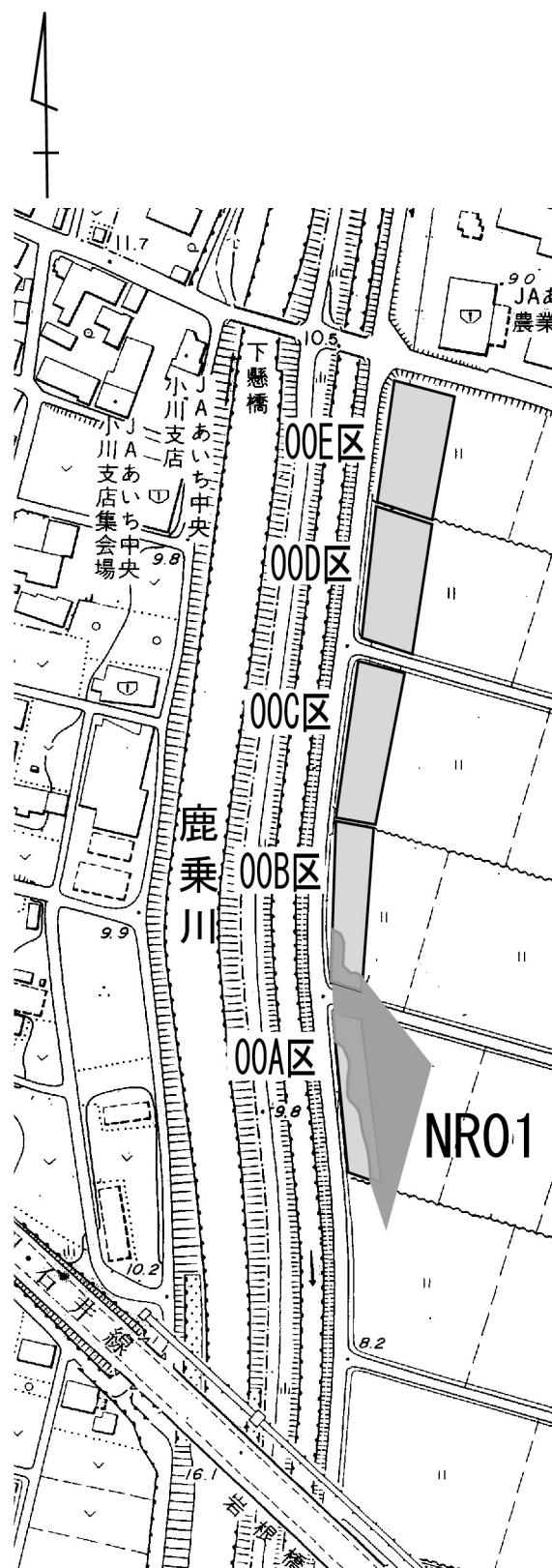


図2 調査区位置図

木簡が出土したのは、検出 として掘削したシルト層群の上部に該当している。木簡は二つの破片に分かれ、ほぼ接して出土している。廃棄地点と出土位置があまり変わらないことを示すのであろう。なお、NR01で検出 として掘削した部分は、遺物をほとんど含まず、堆積の時期が判然としていない。次に、検出 ~ は、弥生時代終末期～古墳時代初頭の堆積層となる。なお、前述した木製品の大半はここから得られたものとなる。また、多量の土器類も同時に出土している。検出 は、掘削が可能であった最深部に該当する。粗粒～極粗粒砂層で、弥生時代中期に属する土器が若干得られている。

3 木簡の観察

木簡の墨書は、両面に確認でき、釈文は一面が「春春春秋尚尚書書律」、その裏面が「令令文文是(カ)是人」となる。四書五経の題目などを墨書したいわゆる習書木簡である。幅は2.4cm、厚さは0.5cmで、全長26.1cmが残存する。下端は欠損するが、表面の「律」と裏面の「人」の下に、同じ文字がそれぞれもう1つあったものと考えられる。

次に、形状を観察する。

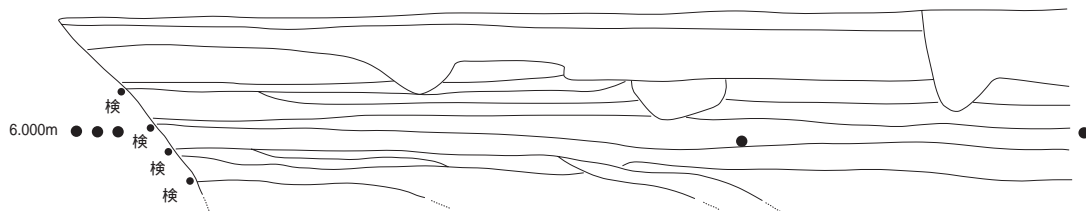
まず、上部側面に切り込みが確認されることから、この木簡は、荷札木簡を転用したものであったと考えられる。ただし、上部の切り込みが浅く長い点が特徴的で、やや特殊な形状となる。

切り込みは、側面部が両側供に折れて失われているが、より残存する左側では、幅28mm、上部では2mmの切り込みが確認できる。

なお、この資料は「尚」と「書」との間で折れた状態で出土している。この部分の断面には刃物の痕跡が観察でき、キリオリによる切断であったと考えられる。木簡の裏面左側には剥離が観察できるが、これはキリオリにより生じた



図3 A区全景



ドットは木簡出土位置を東壁上看通したもの

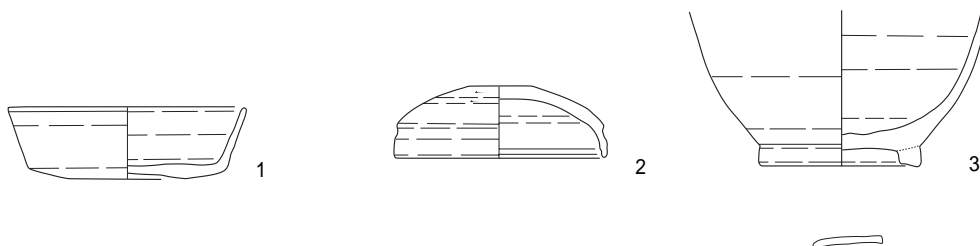


図4 木簡出土層(1:40)と関連遺物(1:4)

本文のうち、3で述べる木簡の所見は、多くが、奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室 渡辺晃宏氏、馬場基氏、市 大樹氏・同文化遺産研究部歴史研究室 市川 聡氏らにご教示をいただいたものである。



图5 木簡（赤外線写真） 撮影 奈良文化財研究所

ものであるか。

次に材を観察すると、板目取りで樹種はヒノキである。なお、樹種同定には、材の横断面と接線断面、放射断面の薄い切片を用いた組織標本作製し、これを光学顕微鏡で観察する方法を用いている。

また、今回は加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施している。測定結果は、calA.D.255 - 300(54.6%)という数値を得た。想定される年代が実年代と大きく異なることから、下懸遺跡木簡については、古材を再利用されて制作されたものであったことが考えられる。

4 帰属時期

次に、木簡の帰属時期を考える。

これについては、前述したように、伴出する資料が存在せず、直接的な情報はない。このことは、下懸遺跡の各調査区に視野を広げても同様で、古代の遺構、遺物が散見できるにすぎない。このため、木簡の時期決定には断片的な情報に依拠せざるを得ない状況にある。

まず、木簡の出土状況であるが、図4にNR01のA区東壁の北側部分の断面図を示した。木簡の出土位置は、A区の北東壁際である。ドットは、木簡出土位置を見通しで断面図中に表現し

たものである。作業工程では、検出で掘削した部分の下方に該当する。

次に、同時に出土した土器類であるが、検出の採集遺物のうち、図示できる資料は3点にすぎない。全てA区の出土である。(図4)

1は、須恵器杯H蓋。口径11.0cm、器高3.8cmをはかる。小型で、肩部の稜は鈍く、低い段となっている。天井部外面の回転ヘラ削りや、口縁部内面直下の浅い沈線が観察できるが、杯Hとしては、ほぼ最終末の形状に近い。

2は杯A。口径12.4cm、底径6.1cm、器高3.7cmをはかる。器壁は薄く、腰部で稜を持って立ち上がる。口縁部は直立する。稜より下位には、回転ヘラ削りを施すが、底面の中央部には回転系切り痕を残す。器面には明瞭な使用痕は留めないが、腰部の稜直下の外面には墨痕が確認できる。判読はできない。

3は灰釉陶器長頸瓶。底部片で、底径8.4cm、残存高8.3cmをはかる。高台は直立し、体部下方はやや丸味を帯びる。体部外面の下方は回転ヘラ削りを施す。器面に明瞭な使用痕は留められず、高台端部には焼成時に焼台として使用したチャート礫の一部が釉着したまま、未調整で残存する。なお、外底部には墨書『一』が確認できる。

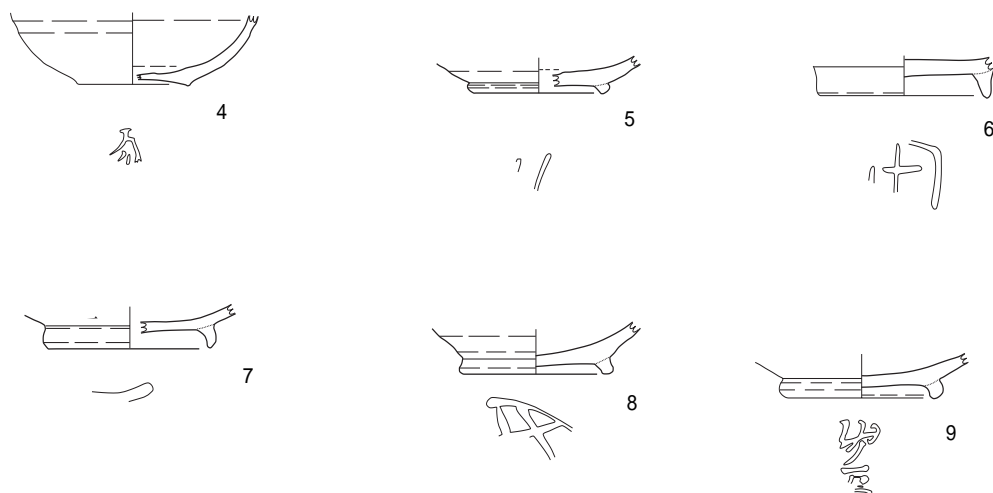


図6 墨書土器実測図(1:4)

樹種同定と、放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボの手による。

次に、これらの資料から木簡の帰属時期を考えると、まず土器のうち、出土位置の情報がある資料は杯A(2)のみである。出土位置は木簡が出土したシルト層の上層で、木簡から20m程度南側に離れた場所から出土している。

乏しい情報であるが、木簡の時期は、2の時期より古く考え、2が折戸10号窯式に帰属することから、そのすぐ下層から出土した木簡は、2に近い時期、つまり8～9世紀に帰属する可能性を考えることができる。なお、消極的ながら2・3が墨書土器であることも傍証とできるのかもしれない。

5 その他の墨書土器

ここでは、木簡に関連して、調査区各地点から出土している墨書土器を集成しておく。今回提示する資料は6点である。9を除き、全てE区から得られたものである。時期は、10世紀にまとまりが指摘できる。(図6)

4は須恵器椀。底径5.3cm、残存高3.2cmをはかる。底部片で口縁部直下までが残存するが、端部をおそらく数mm程度欠く。腰部に丸味を持つ形状だが、器高も低く、全体的に退化傾向は否めない。外底部には回転系切り痕を残す。内面は使用痕が明瞭。墨書は外底部で、判読はできない。なお、外底部は全て残存せず、墨書は数文字であった可能性がある。

5～9は灰釉陶器椀もしくは皿。いずれも底部片で、内面には使用痕が明瞭となる。墨書はその一部が残存するにすぎず、判読もできてはいない。高台の断面は、全点いわゆる三日月高台がやや崩れた形状となる。外底部は6・7に回転ヘラ削りが確認できるが、5・8・9には無調整で回転系切り痕を留める。

なお、これらの灰釉陶器・須恵器のあり方と、A・B区で確認できた状況とは、若干の差異が指摘できる。まず、当該期の下懸遺跡資料のほとんどが、D・E区に集中することに注意したい。一方、A～C区では、灰釉陶器・須恵器類が小片も含めてほとんど得られていない。

次に、D・E区出土資料には内面底部と高台端部などに使用痕が確認できる。このことは、墨書土器以外の資料も同様である。一方、資料数に問

題はあるが、A～C区では基本的にはこれが確認できない。

こうした様子を過大に考えると、非常に消極的ではあるが、木簡の出土したA区が、E区周辺の状況とは異なったものであったと予測することができるのかもしれない。E区周辺のあり方は、通常の集落遺跡の状況とよく類似しており、出土遺物の多くは、日常生活に使用された土器類が、破損などの理由で廃棄されたものと考えられる。こうした点から考えると、調査で確認できている遺構が希薄ではあるが、E区周辺は居住域の近隣と理解することもできる。一方、A区では、当該期の土器片がほとんど出土せず、むしろ居住域の外側であったことを考えさせる。

そして、こうした状況は、A区の周辺が、E区を中心とする平安時代の居住域とは性格を異にしたものであったことを予測させ、A区周辺を、E区と切り離して理解することもできるのかもしれない。

これは、下懸遺跡の木簡が、前述の杯Aの時期に依拠して、8～9世紀と理解できることを間接的に示しているのかもしれない。(池本正明)



図7 E区全景

6 木簡の記載内容の検討

この木簡の釈文は、次の通りである。

- ・ 春春春秋秋尚尚書書律 ×
- ・ 令令文 是人 ×
(是_カ)

表裏は断定できないが、「春」のみが三つ重ねられていることと、以下に述べるような内容上の検討が可能であることによって、一応「春春春」の方を表面と仮定してよからう。

下部が折れ損じていて、何字分かの欠落があるものと思われる。その欠損文字を何字と考えるかによって、文意に多少の変化があるが、まず、一字欠損の場合の検討を行う。

冒頭に「春」が三字並ぶが、後は二字ずつ同文字を重ねているものと思われるから、「春春春秋尚尚書書律律」「令令文 是是人人」という表裏の文字が復元できる。習書と見て間違いない。これを一字で並べれば、「春秋尚書律令文 是人」という文章になり、問題を考察する手がかりが得られる。

考察の出発点は、「尚書」の語である。これは別名を『書経』と呼ぶ儒教経典の五経のひとつである『尚書』と見られる。とすれば、「春秋」もまた五経のうちに数えられる『春秋』と見てよいだろう。そこに「律令」が加わるのであるから、官人としての教養にかかわる単語が並んでいることになる。

「文」が『文選』ならば、その点がいっそう明らかとなるのだが、木簡表面の剥離のため釈読不可能だし、残存墨付きから「しんにょう」を持つ文字を推定することは無理がありそうである。表のありかたから見て、裏もひと続きの文章ではなく、単語が並んでいるものと見るほうが自然であろうが、「是人」とともに今後の課題としておきたい。

次に、欠損部分の文字数が複数である場合について考える。原則として二字が重出するから、「律」「人」が想定されよう。そうすると、裏面には「令文」「是」「人」という単語が並ぶことになる。欠損部分の文字数がさらに多ければ、「令」「文」も考えられる。いずれの場合にせよ、表面の単語の性格に変化はないし、裏

面についても、どこで切るかの違いだけである。

文字については、以上の通りだが、この習書木簡の書き手ということについて、やや踏み込んだ検討をしておきたい。

「学令」に規定される、大学・国学の履修科目に『尚書』『春秋左氏伝』があることに注目しよう。中央における大学には、五位以上の子孫や東西史部の子が学生として入学する定めであったが、実際には、五位以上の子孫は「蔭位」の制度を利用したほうが有利なので、あまり大学には入学しなかったと言われている。その一方で、「学令」は、八位以上の子について、「情願者聴」と規定しているから、下級の官人の方が、『尚書』や『春秋左氏伝』とのかかわりは深いかもしれない。

木簡を扱っていることとあわせて、大学を経由して出身した官人という経歴を持つ国司の史生あたりの存在が浮かび上がる。

しかし、下懸遺跡は国衙からは遠く離れているし、それ自体や周辺の遺跡に官衙の色彩を帯びたものは見出せないことから、こうした想定は落ち着きが悪い。

そこで、「学令」に関して、地方の問題を考えてみよう。「学令」によれば、各国に置かれた国学においても、学ぶべき教科目は中央の大学と同じで、『尚書』『春秋左氏伝』が含まれている。国学生には郡司の子弟を採用する規定であったが、『令集解』所引の「古記」(「大宝令」の注釈書で、天平年間の成立とされる)に「問。郡司子弟不得満数。若為処分。答。兼取庶人子耳。」とある。つまり、国学は定員に余裕がある場合には、庶民の子に対しても開放されていたのである。

国学生の定員は、『職員令』に国の等級別にしたがって規定されているが、参河国は『延喜式』で上国とされているから、40名ということになる。国学の置かれた場所は、参河国に限らず判明していない。

なお、大学・国学ともに13～16才で入学する。『賦役令』によれば、在学中は徭役免除。国学において定められた基準に達すれば、大学への入学や、中央官人としての出身の道も開かれるが、成績が悪かったり留年を重ねれば、退学の規定もある。

このように見てくると、中央の官人のみならず、郡司の子弟さらには庶民出身の国学生、その卒業生あるいは中退者など、この木簡を書き得た人物の範囲は、かなり広がることになる。

以上の点を確認した上で、木簡それ自体の属性という面からも検討してみよう。形状は、いわゆる39形式、上端に切込みを入れた付け札状のものである。使用済み木簡の表面の文字を削り取った二次整形の形跡は認められない。貢進物などの付け札用に準備されていたものを習書に流用した可能性があるが、すでに述べたように、この付近に官衙の存在を想定することは考古学的調査の現段階では困難である。

また、木簡作成の時代は、伴出土器との関係が必ずしも確定的ではなく、書体からも決定しにくいのであるが、一応8世紀初頭におかれるとして、別掲の通り、その時点から見てもかなりの古材を用いており、むしろ廃材を利用しているとも考えられるのである。

さらに、二箇所(残存部の中央と下端)に、小刀で切り目を入れてそこで折っている。使用済み木簡の廃棄の際にしばしば用いられる手法であるが、習書の廃棄方法としては念を入れたものと言わねばなるまい。

これらの所見をまとめてみよう。

習書木簡であることは、間違いない。

記載には、大学・国学の教科目に相当する文字がある。

また、「律令」「令文」などの文字が書かれている可能性がある。

大学出身の下級官人や国学関係者とのかわりが想定できる。

相当な古材(あるいは廃材)を用いている。

付け札の形態である。

木簡の廃棄の通例に従っている。

文字を削り取って、再利用した形跡は確認できない。

遺跡および周辺に、官衙的色彩は見出せない。

ここからさらに推測を重ねるとすれば、庶民出身の国学生か、国学生を経て地方官衙において木簡の作成ないし扱いに携わったことのある者(刀筆を携帯している)が、本貫に帰省し、た

またまそこにあった廃材を利用して、付け札風に整形した木簡を作り、習書を行った後、刀子を用いてそれを折って廃棄したという状況が浮かび上がる。

もとより、これはあくまでもひとつの推測であり、このような報告書において記すべき事柄ではないという批判もありえようが、三河地方における初出木簡として、この地域の古代史像を豊かにする可能性を秘めたものであることについての理解を深めるため、敢えて記す次第である。(福岡猛志)

尾張西部における中世末から近世 の非ロクロ成形土師皿の諸様相

● 佐藤公保

尾張では古代までは「皿」は主に須恵器・灰釉陶器であった。中世になると土師器の「皿」が出現し、中世後期になり、その量は激増する。そうした土師皿のなかには非ロクロ成形とロクロ成形のものがあり、前者は「ハレ」・「ケ」の場で主に使用されたと考えられる。中世に出現した非ロクロ成形土師皿は近世になると、大きく姿を変えていくことになる。

はじめに ~ 研究略史 ~

尾張における中世から近世の土師皿の研究は、1984年から開始された名古屋環状2号線に伴う清須城下町の発掘調査の成果の検討から始まる。筆者はそのなかで、朝日西遺跡の中世から近世初めの土師皿の変化を提示した。その後、1986年に始まる五条川河川改修や県道関連の発掘調査が進むなかで、それまでの清洲城下町遺跡の調査成果を集大成する調査報告書として『清洲城下町遺跡・』(以下、『清洲・』と略。他の愛知県埋蔵文化財センター調査の報告書も同じ。)が刊行された。そのなかで鈴木正貴は膨大な量の陶磁器類や土器類の分類及び時代変遷の考察を行っている。

清須城下町での発掘調査が進むなか、その周辺地域で清須城下町と同時期または相前後する時期の城館の発掘調査が実施された。主なものを上げると、岩倉城・小牧城・那古野城などの関連遺跡がある。さらに1990年からは東海北陸自動車道の建設に伴い、尾張西北域の中世から近世の遺跡の発掘調査も数多く実施された。これらの成果をもとに武部真木が尾張の低地部全域を見据えて、土師皿のセット関係を重点においてまとめている(武部 2001)。

ここでは土師皿、そのなかでも非ロクロ成形土師皿を取り上げ、近世城下町としての名古屋が形成されるきっかけとなった「清須越」前後の

時期(慶長15~18(1610~1613)年)を中心に、名古屋台地以西の清須城下町内とその周辺域での様相をみていきたい。

1 非ロクロ成形土師皿の性格

中世末から近世にかけて尾張西部では、非ロクロ成形土師皿とロクロ成形土師皿が共存する。

前者の法量が、口径4~8cm、器高0.8~2cmと小型のものがほとんどに対し、後者は口径6~18cm、器高1~3cmに2から3法量のものがある。

使用された痕跡の比較については、『清洲』のSD01において詳細な分析が行われている。溝からは古瀬戸後期から大窯1~2期を主体とする瀬戸・美濃窯製品が下層で出土し、同一層で土師皿の一括投棄がみられた。そこで出土したロクロ成形土師皿の12%に灯明具として使用された痕跡が残り、0.02%に穿孔された痕跡が、1%に墨書された跡がみられる。それに対し非ロクロ成形土師皿は同遺構内において、2%に灯明具として使用された痕跡が残り、0.03%に穿孔された痕跡がみられる。墨書される例は皆無である。これらは両者の使用法が一致する一面を持ちながらも、本質的には使用法が相違していることを示唆している。

そもそも12世紀後半から全国各地でみられる非ロクロ成形土師皿である京都系土師器は、京文化の影響を受け、製品そのもの・工人・製作技

『清洲』中で蟹江吉弘は、総破片数と口縁部残存率で出土量を出しているが、ここでは口縁部残存率の数値を元に割合を算出している。

法が直接的、または間接的に搬入・移動・導入された結果、鎌倉・平泉などを代表とする地域の拠点的な遺跡を中心として広がった。室町時代には公家文化の影響を受け、式三献などの儀礼が武家社会に定着するなかで、全国に京都系土師皿が伝播していった。そうしたいわば「ハレ」の場で使用と共に、当然、「ケ」の場での使用も同時に広がっていく。

この傾向は尾張地方でも同様であるが、尾張では15世紀後半に入ると、京都系土師皿をはじめとする非ロクロ成形土師皿が存続すると同時に、ロクロ成形土師皿が出現するという尾張地方独自の状況が生じる。ロクロ成形土師皿の出現の意義、非ロクロ成形土師皿との関わりについては今後の課題としておきたいが、おそらく、ロクロ成形土師皿は再出現当初、非ロクロ成形土師皿同様、「ハレ」「ケ」の場での使用も担わされたと考えられる。

2 非ロクロ成形土師皿の分類と各タイプの分布

中世末から近世にかけての尾張西部で出土する非ロクロ成形土師皿は、以下にあげる形態・成形・調整がみられる。

先に触れたように非ロクロ成形土師皿は全て小型の皿であり、形態的特徴は乏しい。形態で分類すると以下の5つの形態に分かれる。(図1)

- ・ 体部と底部の境界が明確で、体部の立ち上がりが1～1.5cmあるもの。器高1.0～1.5cm、口径6～7cmを測る。
- ・ 体部と底部の境界が明確で、体部の立ち上がりが極めて短く0.5～0.8cmであるもの。器高0.8～1cm、口径6～5cmを測る。
- ・ 体部と底部の境界が不明確で、体部と底部が一体化し湾曲するもの。器高1～2cm、口径4～5cmを測る。
- ・ 体部と底部の境界が不明確で、体部と底部が一体化し湾曲し、底部中央が凹むもの。器高1～1.2cm、口径5.5～6cmを測る。

・ 体部の立ち上がりを有せず、平たいもの。器高0.8～1.2cm、口径5～6cmを測る。

次に内面の成形・調整痕により分類を試みると、以下の5つに分類できる。(図2)

- A・ 体部内外面は外周なで、内面のなでは内底面まで及ぶ。
- B・ 外縁に外周なで。
- C・ 内底面に横なで。
- D・ 内面に指頭圧痕が残るもの。
- E・ 内面に布目痕が残るもの。

さらに底部に残る成形・調整痕により以下の5つに分類できる。(図3)

- a・ 底部には成形・調整痕はみられないもの。
- b・ 掌または指の腹の痕跡をなで消すもの。
- c・ 掌または指の腹の痕跡が残るもの。
- d・ 指頭圧痕が残るもの。
- e・ 布目痕が残るもの。

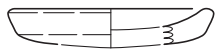
3 非ロクロ成形土師皿の出土した主な遺跡と遺構

以上、分類した非ロクロ成形土師皿の分布の状況をまず、「清須越」前後の清須城下町内(図5)の2地点の事例をみている。

朝日西遺跡 SD177(図6)

朝日西遺跡は清須城下町の北東にあたり、五条川と清須城の外堀に挟まれた地区に位置する。武家地・町屋・寺社地が展開すると考えられ、外堀に近接し併走するSD177は寺社を区画する幅7m、深さ0.8mの大溝である。溝からは瀬戸・美濃窯の大窯4期末から連房第1小期の陶器の他、卒塔婆・位牌などの木製品や人骨・獣骨が出土している。土師皿はロクロ成形のものが寺社の敷地内から溝肩に一括投棄された状況で出土し、非ロクロ成形土師皿は陶器・木製品などと共に溝中の埋土から出土している。確認された非ロクロ成形土師皿は -A-a・ -C-b・ -C-c・ -D-b・ -D-c・ -E-c・ -E-e(図13-1～7同順)と7タイプに及ぶ。このうち、-C-b、-C-c、-D-b、-E-cが主体をなす。この溝は上限が出土遺物から「清須越」直後であると思われる。

本稿で提示した実測図は原則として報告書記載のものを使用しているが、一部、未掲載分や表現が不明確なものについては図を取り直している。



類



類



類



類



類

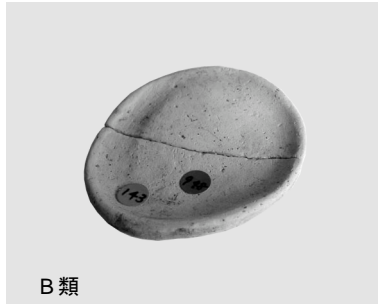


類

図1 土師皿 形態



A類



B類



C類



D類



E類

図2 土師皿 内面成形・調整



a類



b類



c類



d類



e類

図3 土師皿 底部成形・調整

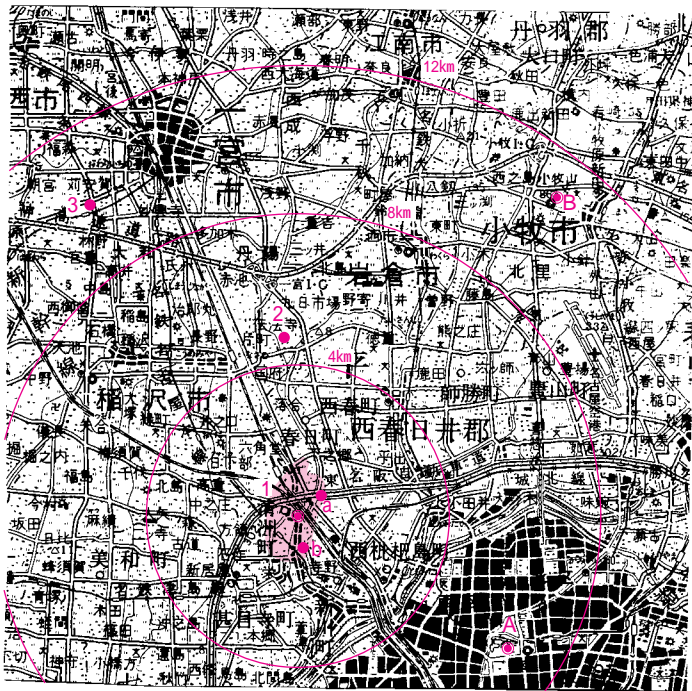


図4 遺跡位置図

- 1 : 清州城下町
 - a : 朝日西遺跡
 - b : 清州城下町遺跡 (『清州 』収録)
- 2 : 元屋敷遺跡
- 3 : 苅安賀遺跡

A : 那古野城
 B : 小牧城
 (1:20,000 地勢図「名古屋」国土地理院)

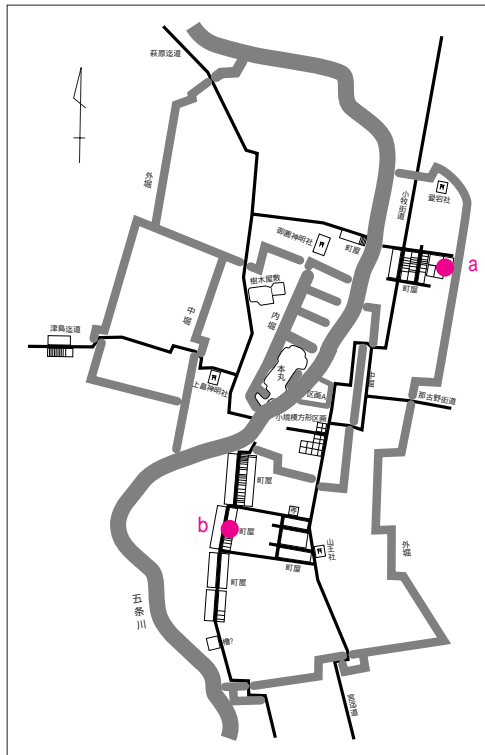


図5 清州城下町

- a:朝日西遺跡
- b:清州城下町遺跡 (『清州 』収録)

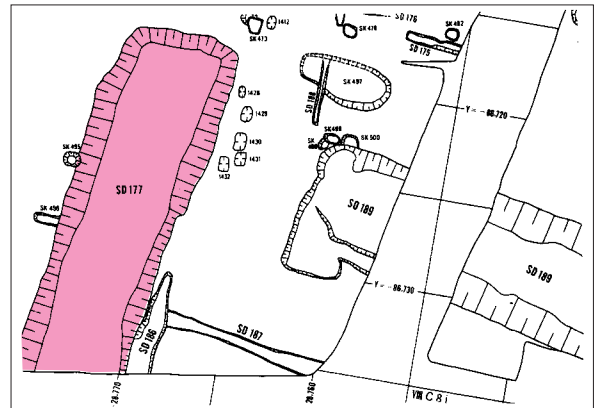


図6 朝日西遺跡 SD177

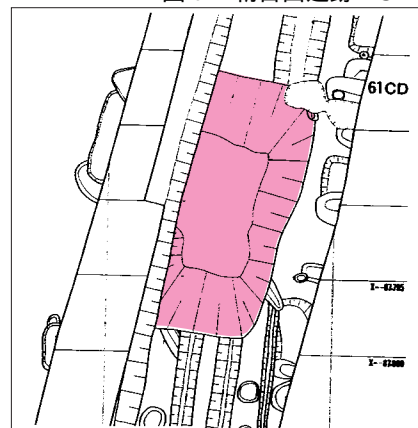


図7 清州城下町遺跡 (『清州 』収録)
 SK7029

清洲城下町遺跡 SK7029 (図7)

清須城下町の中央よりやや南に位置し、現行の五条川の東に近接する。SK7029は東西7m以上、南北17mの方形の大型土坑であり、瀬戸・美濃窯の陶器の大窯4末から連房第5小期の製品や肥前系陶器などが出土している。清須城下町内の町屋に伴う廃棄土坑であり、出土遺物から「清須越」以降も、開口した状態であったとみられる。土師皿は陶器類に共に遺構内から均一的に出土している。非ロク口成形土師皿は -A-a・ -C-b・ -C-c・ -E-c (図13-8~11同順) がみられ、 -C-c が主体をなす。

-A-a と -C-b は破片で数点確認したのみである。

上記、清須城下町内の2地点では、浅く湾曲した内底面に横なでを施し、外面に掌または指の腹の跡を残す -C-c と、形態と底部外面の成形法は前記したものと同じで、内底面に布目痕を残す -E-c とが共にみられる。この2タイプの非ロク口成形土師皿が16世紀末から17世紀初めの清須城下町内の一般的にみられるものであり、特に -C-c は2地点で主体を占めるタイプであることから、この時期の清須城下町内での典型的な非ロク口成形土師皿のタイプといえよう。

一方、2地点の相違もみられる。その一つはSD177では7つのタイプの非ロク口成形土師皿が確認されたのに対し、SK7029では4つのタイプしか確認されていない点である。この違いは、前記したように非ロク口成形土師皿が「ハレ」「ケ」の場での使用頻度が高い点と、前者が寺社地の区画溝であり、後者が町屋に伴う廃棄土坑である点を合わせ考えると、タイプによる使い分けが存在し、儀礼行為の相違が具現化した結果かもしれない。また、この2つの遺構の埋没する時間的差を考えると、「清須越」を相前後する間において、 -C-c 及び -E-c の二つのタイプだけが残ったとも考え得る。

次に同時期の清須城下町周辺の遺跡の状況を見てみる。以下にあげる2遺跡は現在の一宮市内に所在し、清須城下町から北に6~10kmほど離れている。

元屋敷遺跡 D-S163 D-S328・332 (図9)

当遺跡は清須城下町から北へ約6kmほど離

れ、南に五条川と西に青木川に挟まれた微高地上に位置する。溝によって区画された一辺12~25mの方形区画が五つ以上存在し、さらに一辺12mの区画二つは52m前後の大区画内に配せられる可能性がある。一辺12mの区画の一つである「方形区画」に近接してD-S163、D-S328・332は存在する。前者は調査区の東に位置する廃棄土坑で、瀬戸・美濃窯の大窯4期末の陶器が出土する。非ロク口成形土師皿は -C-c・ -D-c・ -D-c・ -B-a・ -D-c (図13-12~16同順) があり、 -D-c・ -B-a が主体である。後者は調査区の東にある井戸で瀬戸・美濃窯の大窯4期末からの連房第2小期までの陶器が伴う。 -A-a・ -C-b・ -C-c・ -E-c・ -D-c (図14-17~21同順) がみられ、 -D-c が主体である。これらの遺構から出土している土師皿は、一定の箇所集中するなどの特出する出土状況は呈しない。共に「方形区画」より後出する遺構であり、屋敷地に伴う遺構と考えられる。なお「方形区画」内には柱穴群が集中して整然とみられ、報告書中では「何らかの聖域」または「宗教的施設」としての性格を類推している。

苅安賀遺跡 96G・NR01 (図11・12)

清須城下町から北へ約10km離れた当遺跡は日光川の東岸の微高地上に立地し、周辺には16世紀後半から17世紀初めに苅安賀城とその城下町が存在したとされ、その南の一角に相当する。自然流路NR01は調査区の南側にあり、ほぼ東西方向に走る。土師皿や卒塔婆が出土していることからNR01がある遺跡の南辺を「祭の場」としている。この流路は近世になると水田が展開し、18世紀には用水路が開削される。出土遺物は、大窯4期末の瀬戸・美濃窯の陶器が主であり、非ロク口成形土師皿は流路の埋土である砂層からまともに出土している。 -D-c・ -E-b・ -D-c・ -D-d (図13-26~29同順) がみられ、 -D-c が主体である。

上記の2遺跡の非ロク口成形土師皿をみると、清須城下町内と同一タイプで両遺跡で見られるものと清須城下町ではみられなく両遺跡で見られるものがある(表1)。前者は体部と底部の境が不明確で内面に指頭圧痕がみられ、底面に掌または指の腹の痕跡が残る -D-c と、体部と底部の境が不明確で内面に布目痕がみられる -



図8 苅安賀遺跡 96G・NR01 土師皿出土状況

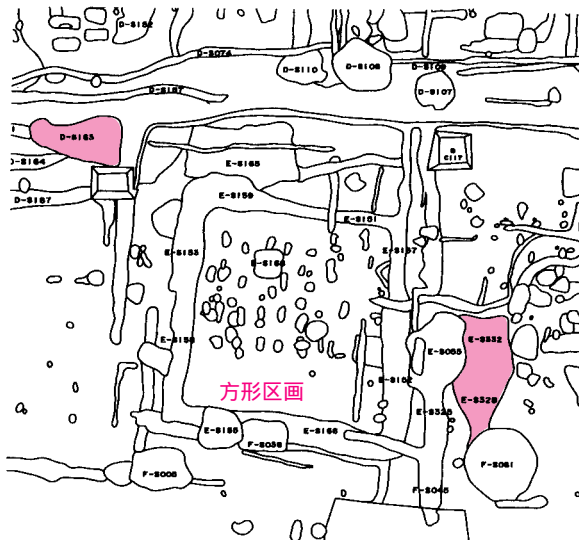


図9 元屋敷遺跡 D-S163・E-S328・332
(一部加筆)

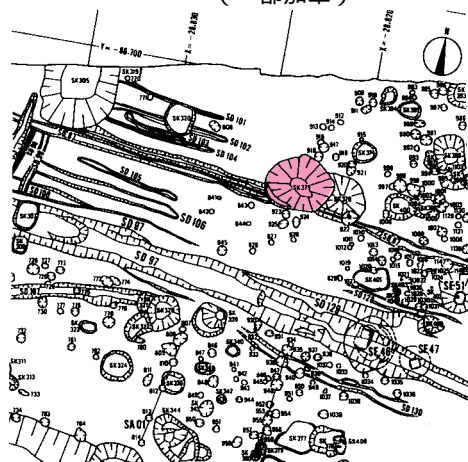


図10 朝日西遺跡 SK375

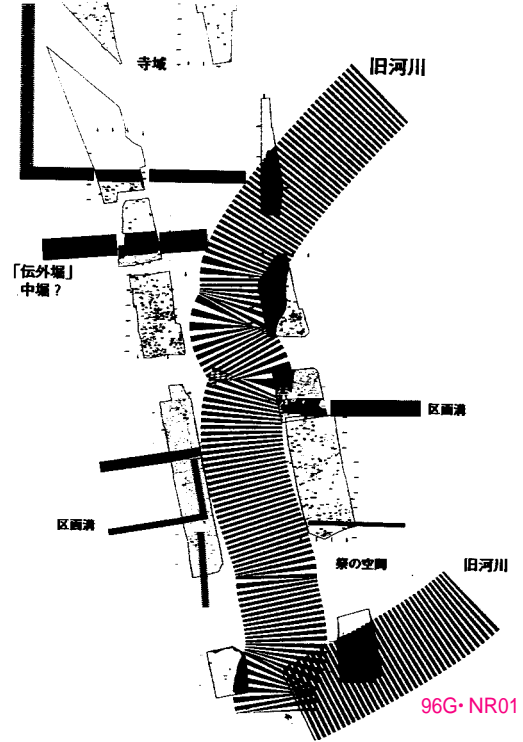


図11 苅安賀遺跡 96G・NR01

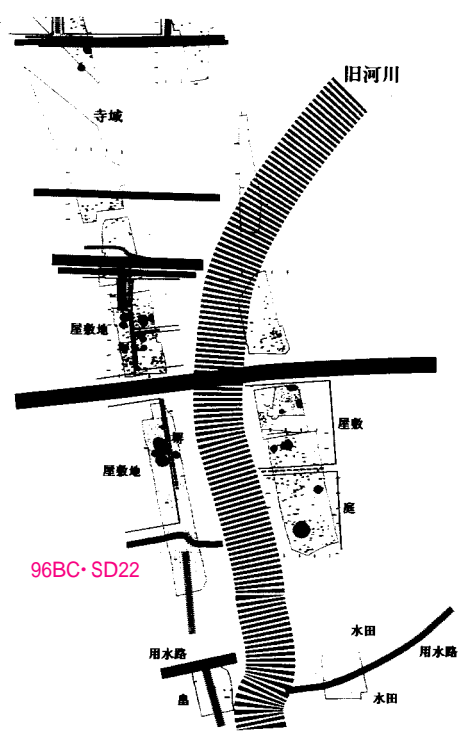


図12 苅安賀遺跡 96BC・SD22

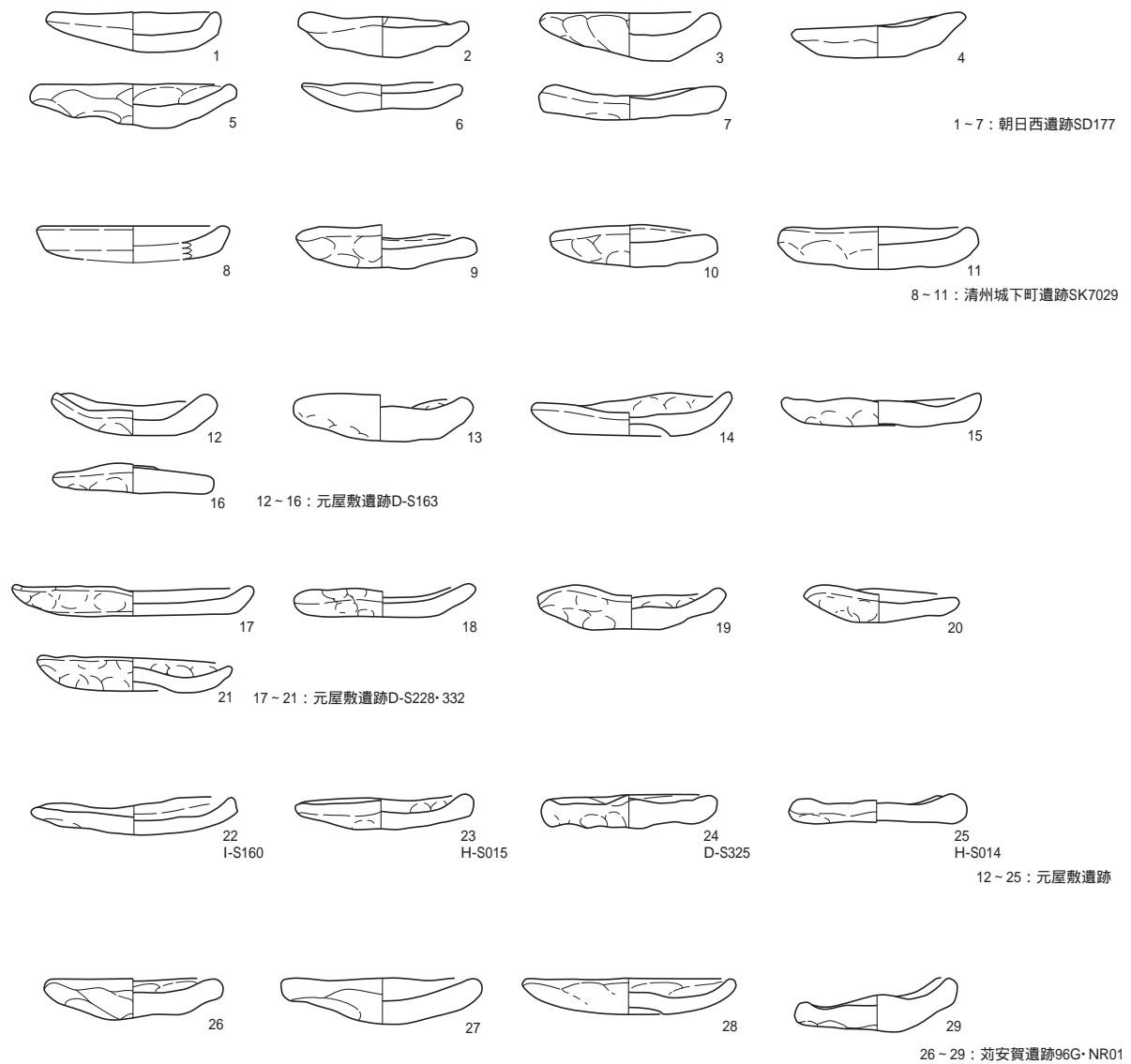


図13 近世初の非口口土師皿



図14 近世の非口口土師皿



E-bである。なお、-E-b(図13-23)は事例としてあげた元屋敷遺跡の遺構中にはみられないが、当遺跡の同時期の別遺構(H-S015)から出土しており、当遺跡の該当期に存在したとしても差し支えない。後者は体部と底部の境が不明確で底部が浅く凹み、内面に指頭圧痕がみられ底面には掌または指の腹の痕跡が残る-D-cであり、両遺跡の非ロク口成形土師皿の主たるタイプである。これは尾張北西部に分布する典型的な非ロク口成形土師皿と言えよう。また、-A-a・-A-a・-C-b・-C-c・-E-b・-E-c・-E-eは清須城下町と元屋敷遺跡とでみられるタイプであり、清須城下町と元屋敷遺跡では比較的、共通した分布様相を呈する。

両遺跡で共通してみられる-A-a(図13-22)と-E-e(図13-25)は元屋敷遺跡の事例遺構からはみられなかったが、該当期の別遺構から出土している(前者は図13-22。後者は図13-25。)

なお、元屋敷遺跡のD-S328・332及び清洲城下町遺跡のSK7029で確認された-A-aは、中世初めに初現する京都系土師皿の系譜上にあるものである。形態や成形・調整法から清須城下町では-A-aへと、元屋敷遺跡では-A-aへ、さらに-B-bへと形態が変わっていくと考えられる。大窯4期末から連房第2小期の間に形態の変化が生じると想定されるが、現時点では各々のタイプの変化する時期は不明である。

4 非ロク口成形土師皿の終焉

前項まで、17世紀前半までの非ロク口成形土師皿の様相について記してきた。それでは17世紀後半以降、非ロク口成形土師皿はどのような変遷をたどるのだろうか？

17世紀後半以降、非ロク口成形土師皿を出土している遺跡・遺構はそう多くない。その中で以下に記したものは比較的、まとまった出土例である。

朝日西遺跡 SK375(図10)

清須城下町は「清須越し」以降、名古屋城下近在の美濃街道沿いの宿場町または村に変貌する。

その中で朝日西遺跡は「朝日村」にあたり、SK375は廃棄土坑である。出土遺物は連房第1小期から連房第10小期の瀬戸・美濃窯産の陶器や肥前系磁器などがみられるが、連房第5・6小期のものが中心である。ここで出土した非ロク口成形土師皿は体部の立ち上がりを持たず、二つ折りになる形態(以下、「類」とする。図1)が新たに出現し、-E-c・-D-c・-D-d(図14-30~32同順)がみられる。各タイプの法量は-E-cが口径が3cm、器高1.2cm、-D-cは口径が3cm、器高が0.8cm、-D-dは口径が2.7cm、器高が0.8cmを測り、17世紀初めのものと比べると、全体的に小振りになる。荻安賀遺跡 96BC区SD22(図12)

荻安賀遺跡は近世には巡見街道沿いの市場町に変貌する。調査区は町の外れの溝であり、18世紀後半の瀬戸・美濃窯産の陶器や肥前系磁器などが出土している。また、焼成後底部穿孔のロク口成形土師皿が共伴している。非ロク口成形土師皿は-E-c・-D-c・-D-dが出土している(図14-33~35同順)。各々の法量は-E-cは口径2.8~3cm、器高1~1.3cm、-D-cは口径3.2cm、器高0.9cm、-D-dは口径2.3~2.5cm、器高0.8~1cmである。主体は-E-cである。

17世紀前半に多くのタイプがあった非ロク口成形土師皿は、この時期に-E-c・-D-c・-D-dの3タイプに減少し、また尾張西部一円で同一タイプが分布する。各タイプの変化をみると、-E-cは17世紀前半までのものに比べ法量が減少する。また、18世紀後半のものは出土例全て赤味を帯びた胎土であり、同一集団が製作していた可能性が高いと考えられる。内外面の成形・調整法から、-D-cは-D-cからの、-D-dは-E-eからの系譜がたどれると考えられる。

非ロク口成形土師皿の下限の時期については、朝日西遺跡の例をみると19世紀まで下がる可能性もあり得る。ただ荻安賀遺跡の例では共伴遺物の年代が18世紀後半までに収まること、また、名古屋城下の豎三蔵通遺跡でも18世紀後半の廃棄土坑から小法量の-E-cが出土していること、他の近世の遺跡で19世紀代の遺構から出土した

名古屋市教育局の豎三蔵通遺跡第7次発掘調査で出土している。遺物は見晴台考古資料館で実見させていただいた。

例が現時点では皆無であることを併せて考慮すると、18世紀後半までに収まると考えられる。

まとめにかえて

尾張西部において、近世初めの非ロク口成形土師皿をみると、清須とその北部周辺域では、前者が -C-c、後者が -D-c と、各々が異なるタイプが主体を占める。また、両地域で見られるものや、偏った分布を示すものがみられ、非ロク口成形土師皿各タイプの分布域が相違していることが明らかになった。背景には各地域に根づく製作集団の存在し、各々が固有の流通域を有していることが想定できる。今後、さらに清須城内と周辺遺跡の事例検証を行い、その実体を検討していく必要がある。

非ロク口成形土師皿は18世紀後半代には消滅することが判った。その課程において、少なくとも18世紀前半には近世初めまでは多数のタイプがものが、確認されたもので3タイプに減少する。また、前記したように、17世紀前半までは

尾張西部において各タイプがそれぞれ流通域を有しているのに対し、遅くとも18世紀後半には3タイプが尾張西部一円で分布していることが予想される。この点については、尾張全域での様相を展望しながら、いつからそうした傾向がみられるのか、その背景になにがあるのかは慎重に検討していく必要がある。今後の課題としたい。

遅筆のため、尾張全域を見据えた検討ができなかった。特に「清須越」以降、尾張の中心地である名古屋城下とその周辺地区の動向は検証が必要である。概要のみ記すと、清須城下町と名古屋城下の様相は類似するが、名古屋城下と尾張南部とでは様相が異なるようである。このことについての検討は別稿で行いたい。

本稿をまとめるにあたって、本センター職員の小澤一弘・鈴木正貴・武部真木の諸氏には過去の調査などについて様々な助言を頂き、土本典生・永井伸明・立松彰・水野裕之・山田鉦一の諸氏には資料の実見・活用に御快諾・御協力を得た。文末であるが、記して感謝したい。

参考文献

- 石黒立人編 2001 『苅安賀遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
小澤一弘編 1992 『朝日西遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
蟹江吉弘編 1996 『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
金原 宏 1986 「清洲城下町の堀の復元」『年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 1986 「中世土師器研究ノート(1)」『年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 1987 「中世土師器研究ノート(2)」『年報 昭和61年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
鋤柄俊夫 1999 「平安京出土土器の諸問題」『中世村落と地域性の考古的研究』大巧社
鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 1995 『清洲城下町遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
土本典生編 2000 『元屋敷遺跡発掘調査報告書』一宮市教育委員会
武部真木 2001 「中世土師器皿の様相 - 12～16世紀の尾張平野 - 」『考古学フォーラム13』愛知考古学談話会
中井淳史 2000 「武家儀礼と土師器」『史林』第83巻第3号史学研究会

那古野城の非ロク口成形土師皿は、-A-a・-A-a・-C-cが主体であり、尾張南部の清水寺遺跡(名古屋市)・弥勒寺遺跡(東海市)では、口径10cm、器高2cmほどの外面に指頭圧痕、内面に横なでが残る非ロク口成形土師皿が出土している。

表1 非ロクロ成形土師皿 タイプ別出土状況

:少量 :多量

遺跡 タイプ 遺構	朝日西遺跡		清洲城下町遺跡	元屋敷遺跡		苅安賀遺跡	
	S D177	S K357	S K7029	D - S163	D - S328・332	NR01	S D22
I - A - a							
II - A - a					*		
III - C - b							
- C - c							
- D - b							
- D - c							
- E - b					*		
- E - c							
IV - D - c							
V - B - a							
- D - c							
- D - d							
- E - c					*		
- E - e					*		
VI - D - c							
- D - d							

(*は、上記遺構内で、確認できなかったが、遺跡内の他の同時期の遺構で確認できたもの)

三本松遺跡出土の 土器埋設遺構について

● 川添和暁

平成13年度に刊行された『牛牧遺跡』のなかで、縄文晩期土器棺墓の検討に対して、遺構としての検討を行う視点での報告を行った。今後、縄文時代後期の「埋設土器」をはじめとする土器埋設遺構に関して、比較検討をする必要性が生じてくる。そのための基礎データを蓄積するための一視点を提示したい。なお、この小論では、すでに報告がなされている遺跡に対して、どこまで埋納形態・過程を検証することができるのか、という一事例でもある。

はじめに

土器が埋設されている遺構には、「埋甕」・「埋設土器」・「甕棺」・「土器棺」・「壺棺」など、その他さまざまな名称がつけられている。これらの遺構は、属する時期・地域・状況などにより、それぞれ別の歴史的意義づけをもって説明され、また互いの関係を対象とした検討も行われている。

これらの遺構に関して、比較・検討する際に必要な項目として、

- (1)検出状態
- (2)埋設方法(組み合わせり方も含む)
- (3)土壌の掘りかた
- (4)関係する個体数
- (5)土器自体の器種・文様・種類
- (6)土器自身の残存率

などがまずは考えられる(以下、これらを項目(1)~(6)とする)。以上の中で、項目(1)・(2)・(3)は調査段階時にしか得られることのできない情報であり、所見からの追認検証となる。

平成13年度に刊行された『牛牧遺跡』のなかで、縄文晩期土器棺墓の検討に対して、遺構としての検討を行う視点から、特に項目(1)・(2)・(3)を重視した(川添編2001)。同時期の土器棺墓に対しての比較研究は目下継続中であるものの、この小論では、縄文時代後期の「埋設土器」をはじめ

とする土器埋設遺構に関して、比較検討をするための一試論である。なお、この小論では、すでに報告がなされている遺跡に対して、どこまで追うことができるのか、という点でのケーススタディでもある。

ここでは、三本松遺跡で検出された「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」についての検討をしていく。三本松遺跡は縄文後期後葉から晩期末まで営まれている遺跡で、上記の名称で報告されている遺構が4基検出されている。それぞれの遺構について見る前に、まずは周辺の遺跡を含めて、三本松遺跡全体の概要を見ていく。

41

1 三本松遺跡について

まずは、三本松遺跡の所在する矢作川中流域を中心に遺跡を外観し、三本松遺跡について詳細を見ていきたい。

矢作川中流域を中心に、縄文時代後期・晩期の主要遺跡を示したのが、図1である。山地から碧海台地に平坦地が広がり、そこには堀内貝塚を最奥とする貝塚群が展開する。三本松遺跡は、豊田市の山間部に位置しているものの、堀内貝塚からは直線距離にして約20kmほどの地点に所在し、海岸部から少し山側に入った場所であるといえる。

当遺跡は、1991年11月から1992年3月にかけて県埋蔵文化財センターによって調査が行われ、

「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」の名称は報告者による。ここでは、報告の名称を用い、言い換えはしない。

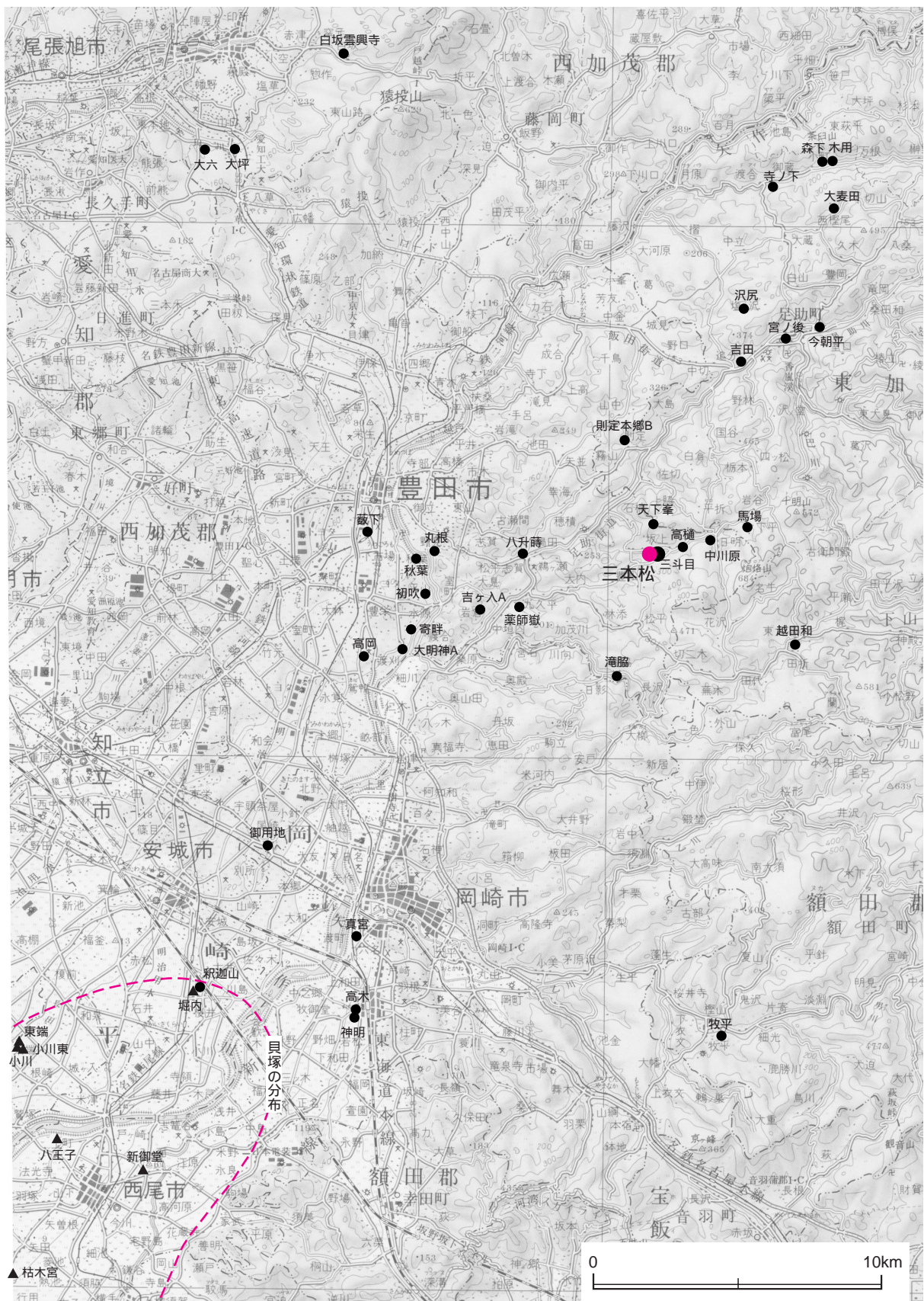


図1 三本松遺跡と縄文後・晩期主要遺跡分布図(国土地理院発行2000万分の1地図「豊橋」より)

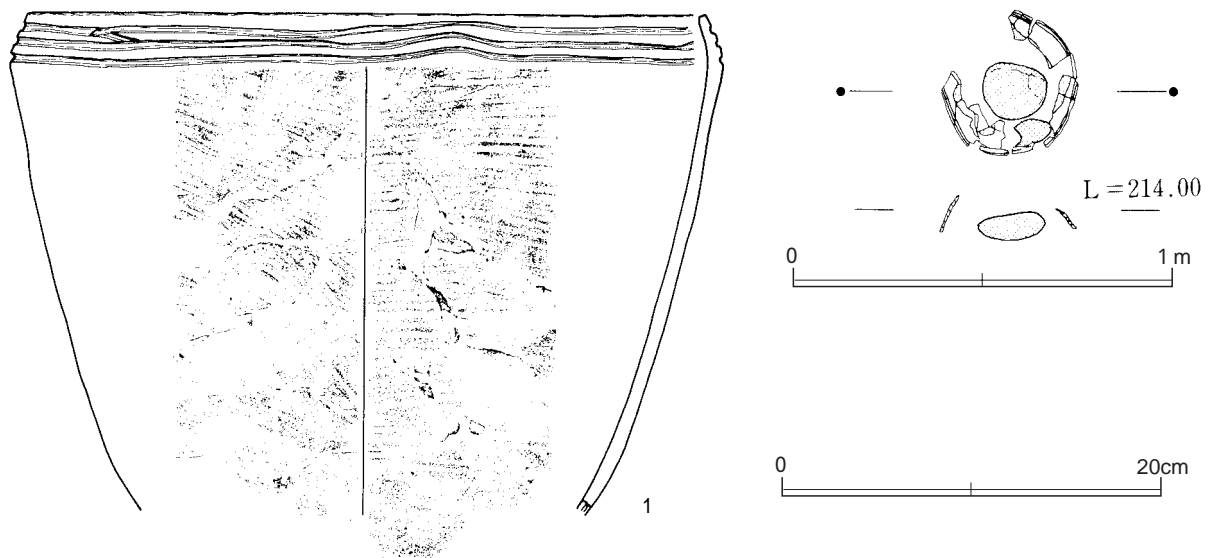


図2 SB01内伏甕状遺構および土器実測図 土器 1 : 4 遺構 1 : 20 遺構図は 余合 1993 より転載
スケール・出典、以下同じ

すでに報告も出ている(余合編1993)。報告書より遺跡の立地・検出遺構などを追認していく。

三本松遺跡は、愛知県豊田市坂上町、六所山麓北西に所在する。矢作川の支流仁王川の左岸に立地し、標高約220m前後、仁王川との比高差は5m前後と、河川に近い緩斜面上に立地する。三斗目遺跡とは比高差20mほどの丘陵を挟んで約500m離れた位置に所在している。遺跡の継続期間が後期末から晩期前半までと考えられ、住居跡1、伏甕状遺構1、集石遺構と思われる遺構3、埋甕状遺構3、その他土坑やピット群が検出されている。報告書内では、遺構の時期的変遷についての言及はないが、住居跡の床面25cm下に凹線文土器の伏甕状遺構があり、その伏甕状遺構と住居跡との直接的な関係は考えにくいとされていることから、住居跡はそれ以降となるのであろうか。

2 「伏甕状遺構」・「埋甕状遺構」の個別遺構・遺物の検討

ここでは、各遺構に対して個別に検討を加えていく。検討は、前に挙げた項目(1)~(6)について焦点を当てる。なお、遺構の時期は、検出された土器から後期後葉から末に属するものと考えられる。

(1) SB01内「伏甕状遺構」(図2)

この遺構は、SB01床面レベルの25cm下から検

出された遺構である。報告者はSB01との直接関係は考えにくい、としている。検出状況が以上のことから、遺構自体は後世の攪乱を受けず、比較的良好な状態で残存していたものと考えられる。この遺構に関係する土器個体数は深鉢形土器1である(図2-1)。土器の埋設は、逆位である。土器の中心部には直径15cmほどの平たい丸石が検出され、この遺構を構成する一部であると考えられている。報告内では、「石を覆うように土器が置かれたのか、土器をつぶすように石が置かれたのかははっきりしない」とされている。土器・丸石を埋める土壌の掘りかたは不明であるようだ。

1は復元口径38.5cm、復元最大径37.5cm、残存高26.2cmを測る。口縁部から2.5cmで屈曲し、そこからは底部に向かって逆八の字形につながる器形である。口縁部外面には3本の巻貝凹線の見られ、口縁端部上端から施文されているようである。胴部の調整は、外面が横および斜方向、内面が横方向の巻貝条痕である。口縁端部は面取りされており、土器整形時に端部上面に浅い押圧痕が連続して見られる。この土器は、胴部下半部を欠失させたと考えられ、口縁部を中心に残存している。全周に対する残存率は4分の3程度で、その残存部分でも欠落している部分が見られる。

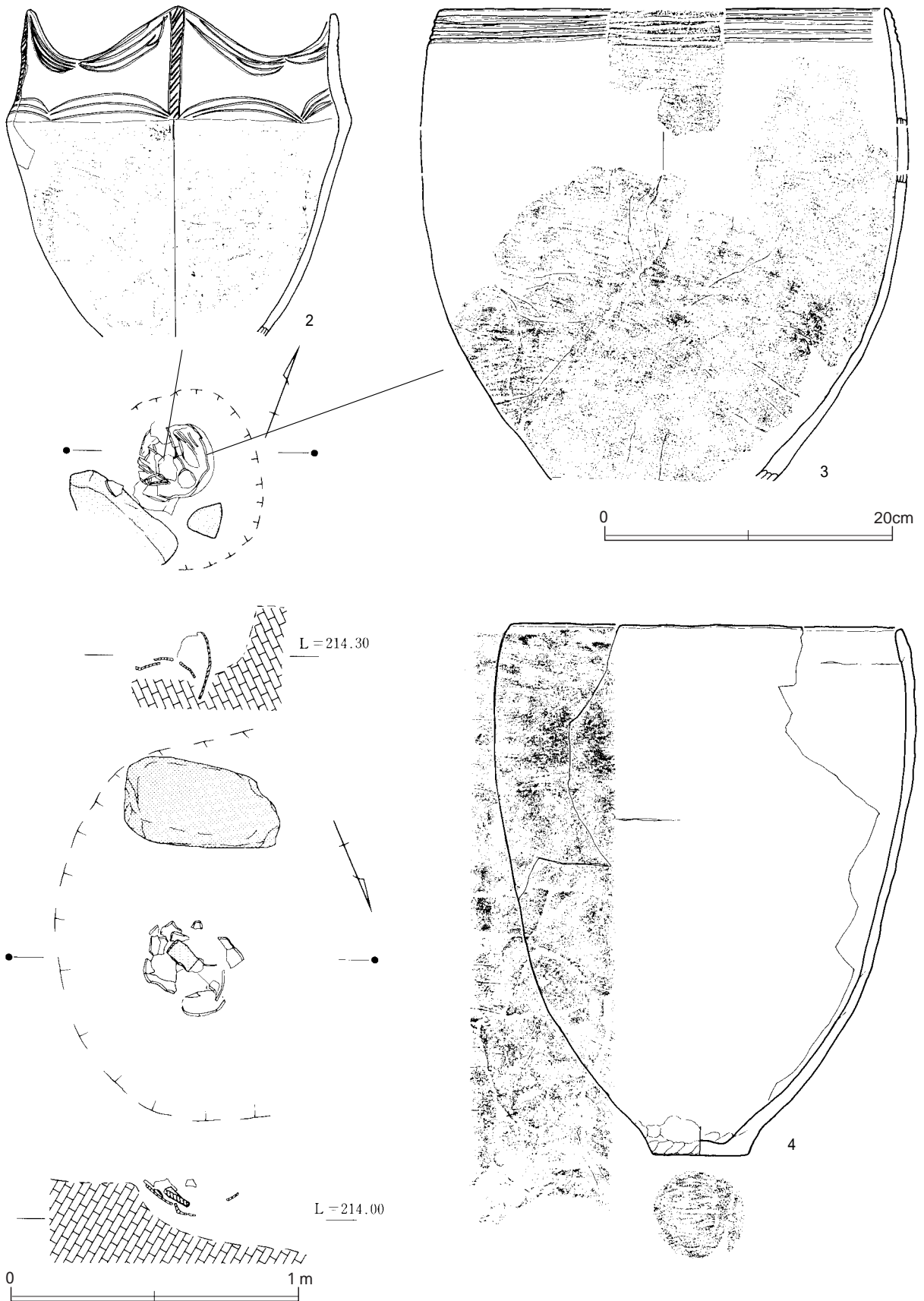


図3 SK15・SK08 出土状態図および出土土器

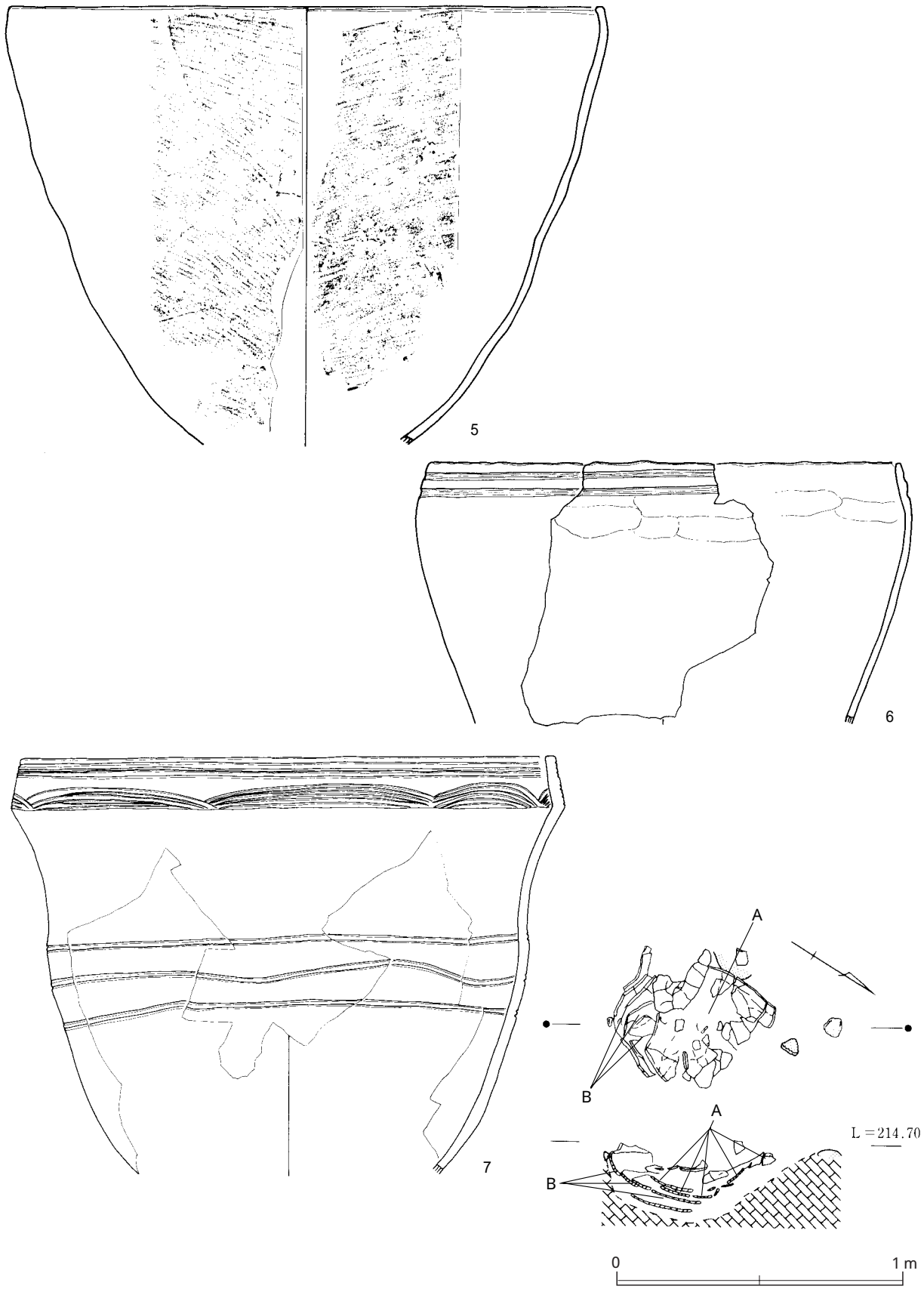


図4 SX03 出土状態図および出土土器

(2) SK15「埋甕状遺構」(図3上)

この遺構も高さのあるレベルまでは、攪乱を受けていない状態であった、と考えられる。それは、一部土器片が錯綜している部分に関して、攪乱ではなく土圧により潰れたかの状況であった、とのことからである。土器個体数は深鉢形土器2個体である(図3-2・3)。土器の埋設は、2が不明、3が正位である。土坑の掘りかたは検出されており、長径65cmほどの楕円形プランで、深さ25cmを測る。2は、復元口径21.5cm・最大径24.0cm・残存高22.2cmで、4単位の波状口縁を持ち、波頂部から7cmで屈曲し底部かけて逆八の字形につながる器形である。口縁部には、極めて細い工具により波頂部から垂下する幅1cmほどの平行沈線のなかに右上がり斜方向の沈線を充填している。さらに上放は4条、下放は3条の背反する弧状沈線を施文している。口縁部の調整はナデもしくはミガキで、胴部の調整は外面が横および斜方向、内面が横方向の巻貝条痕である。この土器は、底部を欠損させたと考えられ、胴部下半までは残存している。土器全周に対する残存率は、部分的に欠失しているところもあるが、ほぼ1分の1である。

3は、復元口径30.5cm・最大径33.0cm・残存高29.5cm、口縁部方向に若干内湾もしくは直立する砲弾形を呈する器形である。外面には4本の巻貝凹線が見られ、口縁端部下から上端側へと施文されているようである。胴部の調整は、外面が横および斜方向の巻貝条痕、内面がナデである。この土器は、胴部下半部の残存が主となり、口縁部は若干のみでかつ胴部とは接合しない。また底部も欠失している。全周に対する残存率は2分の1程度である。

(3) SK08「埋甕状遺構」(図3下)

この遺構自体は、上部が後世の削平を受けている、ということである。関連する土器個体数は深鉢形土器1個体である(図3-4)。土器の埋設は、正位であった模様である。土器内には長方形の石版[?]が検出されている。長径1m50cmを測る楕円形状の平面プランの土坑の掘り方が明示されているものの、土器埋設時の掘り方であるかどうかは微妙であろう。

4は、復元口径27.0cm・最大径28.8cm・器高37.0cm、底部から口縁部に向かって、高さ3分の

1ずつで緩やかに屈曲し、口縁部では内湾を呈する器形で、底部から13cmほどの高さの屈曲は、若干S字状にくびれているのかもしれない。文様のみられない無文土器で、外面調整が口縁部付近では細密な浅い条痕、胴部は斜方向にケズリがみられ、底部裏も細密な浅い条痕による調整がなされている。口縁端部は面取りがなされ、外面には粘土の接合痕が若干残り、底部外面は整形のための指によるオサエが連続して見られる。残存状況は、口縁部側から底部側にかけて良くなり、口縁部では1/8・胴部上半で1/2・底部で完存である。

(4) SX03「埋甕状遺構」(図4)

この遺構の直上は表土に近く、後世の削平を受けたものと、考えられている。若干土器片が錯綜した状態になっているのは、土圧によるものではないのか、とのことである。関連する土器個体数は深鉢形土器3個体である(図4-5~7)。土器の埋設状態は、横位の状態で土器片が重なっている模様であるが、どの個体がどの位置に埋設されていたのか、また、同一個体土器片による重なりがあったのか、などは不明である。土坑の掘り形は検出できなかったようである。

5は、復元口径40.8cm・最大径41.1cm・残存高29.4cm、胴部中央でS字状にくびれ、口縁部付近で屈曲する器形である。無文土器で、器面内外面には横および斜方向に巻貝条痕が施され、面取りが見られる口縁端部上面にも条痕が施されている。粘土の接合部分と思われる部分で凹凸が見られる。残存状況は全体の1/2程度で、底部は欠失している。胴部下半の外面には炭化物の付着痕が見られる。

6は、復元口径32.8cm・最大径34.5cm・残存高18.0cm、口縁部から胴部上半までの残存であるため、全体の器形の復元はできないが、口縁部で「くの字」に屈曲し、胴部下半でS字状にくびれるのかもしれない。口縁部には2本の平行する凹線が見られる。土器内外面とも表面の劣化が甚だしい。口縁端部上面には面取りがみられ、整形時に浅い押圧が連続して見られる。残存部分は、口縁部から胴部上半までで、全周に対して約1/6程度である。

7は、復元口径37.2cm・最大径38.3cm・残存高28.9cm、胴部で膨らみ、口縁部で内側に「く

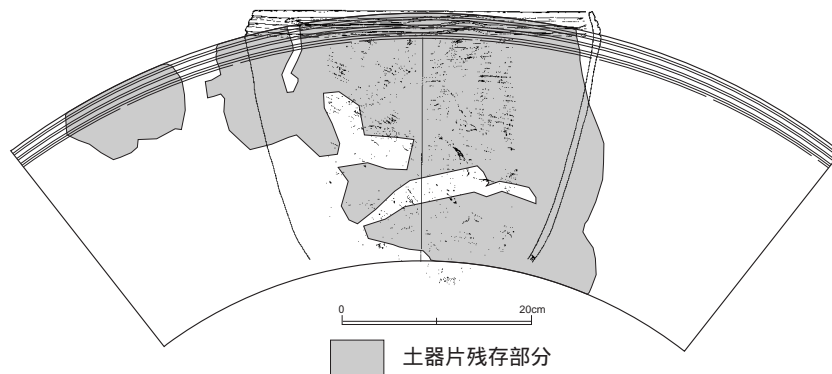


図5 SB01 伏甕状遺構検出土器(1)破片残存状況図

の字」屈曲の見られる器形である。文様は口縁部と胴部に見られ、工具はすべて半截竹管である。口縁部は上部に2条の平行沈線、下部には3条の下放弧文を口縁部側から頸部側に施しており、さらにそれを時計周りに全周させている。胴部には3条の平行沈線が施されている。調整は全面ナデと考えられる。残存状況は全体の1/2程度であるものの、口縁部の残存がよりよく、胴部には欠失部が多く見られる。底部は欠失している。

3 土器埋設遺構について

「伏甕状遺構」、「埋甕状遺構」と報告されているこれらの土器埋設遺構について、もう少し詳細に検討を加えていく。上の4基の遺構について整理すると、以下の表ようになる。この中でいくつかの問題を検討していく。

縄文後期の土器埋設遺構に関しても、土坑の

表1 各遺構の分類

項目 遺構	土坑の 掘り方	土器以外の 構成物	埋設状況	関連土器 個体数	遺物 番号	底部	土器自体 の残存率
SB01内 伏甕状遺構	検出できず	石	逆位	1	1	欠失	3/4
SK15 埋甕状遺構	検出	なし	正位	2	2	欠失	1/1
					3	欠失	1/2
SK08 埋甕状遺構	検出	なし	正位	1	4	あり	口縁 1/8 胴部 1/2
SX03	検出できず	なし	横位	3	5	欠失	1/2
					6	欠失	1/6
					7	欠失	1/2

掘りかたがよく分からない例があることが分かる。この特徴も注目されるべきであろう。

複数個体の組み合わせた遺構が二つ見られる。SK15は3のなかに2が入れ子状態になっている可能性も考えられる。しかし問題となるのは、2の埋設状態である。検出時には潰れたような状態になっている。しかし、結果として潰れたような状態になった要因としては、土圧を受けて容易に潰れやすい状態での埋設であった可能性はまったくないであろうか。

埋設状態は立位(正位・逆位)が多い。横位としたSX03は、それ以外の3遺構とは遺構の構成上、大きく性格が異なる可能性がある。ここで検討しなくてはならないことは、構成してる3個体の土器(片)がどのように重なり合っているのか、ということである。出土状態図・写真および現在観察可能な遺物の残存状況から、図4の土器片Aにあたるのは7の一部、土器片Bにあたるのは5の一部であると考えられる。5は出土した3個体の中で残存部分が最も多くみられるもので、この土器が遺構の構成上、主体になっていたと考えられる。残存土器片Aは口縁部が西方向に向いていることが伺える。この土器片Aが土器片B同様に、土器片器壁内面を上側に向けていることが、この遺構の性格を考えるのに注目される点であろう。

また土器自体の残存率を提示した。底部の欠失は、多くの個体に見られ土器の欠失部分がみられる要因として、後世の攪乱であることがまずは容易に想定できる。これに関して問題点が

ここでいう「どのように重なり合っているのか」ということは、どの個体の土器の、どの部分が、どの順番で重なっていたのか、ということを示している。この遺構は表土に近く、上面が後世の削平を受けたものと考えられるが、このことの分析ができれば欠失している上半分へのつながりがより具体的に想定できたものと考えられる。

二つある。一つは、全周するものが少ないことに関してである。胴部などどこかの部分でも全周するものは、SK15の2のみである。特に「SB01伏壘状遺構」は住居跡床面下にあつて後世の攪乱の影響が及んでいないと考えられる状態の遺構である。それでも全周は残存はしてない(図5)。また、土器自体の残存率を提示しても、その残存している部分内で欠落している部分がある、ということもしばしば見られることである。これは、検出時および取上げ時に取りこぼしが見られたことも考慮にいれなくてはならないが、それで全てが説明できるかは、実際には不明である。

4 遺物自体の検討

埋設土器の土器自体の選択についての検討としては、その器形なり文様を有する土器がその遺跡内でどの程度の割合にのぼるのかが、まずは考慮されなくてはならないであろう。報告の関係上、無文土器の実数が不明であるため、その土器全体での割合を提示することはできない。有文土器の中のものに関していえば、1・3・6は包含層出土土器にも多く見られ、有文土器の中では一般的な土器であったと思われる。2・7に関しては、文様意匠として類似のものは見られるが、同様の文様のものとしては報告されている土器片には見られない。このことから、特に2に関しては、選択して入れられた可能性も考えられるであろう。また、ほぼ全ての土器の内外面胴部下半に煮炊きの痕跡や炭化物付着の痕が見られる。

5 今後の方向性

今回は、特に考察結果を提示するものではなく、今後行う縄文後期の土器埋設遺構の検討方法を提示し、批判を乞うものである。どの土器が、どの場所に、どのような組み合わせをして、どのような埋設状態をしていたかという検証は、この類いの遺構に対する埋設過程を明らかにできると考えられ、是非とも必要な情報である。遺物として保管されている土器の残存状況から、ある程度の検証が可能であることが分かった。ただし、埋設方向など、検証の追えない事項も浮かび上がり、そこが今後の問題点になろう。特に、検出時に土器の形状が伺えることができない場合、土器の組み合わせり方が不明瞭になってしまう。その後、調査後の復元作業の結果、予想以上の復元個体数の土器が関係していた、という場合がしばしばみられる。そのような事例こそ、抽出できる情報が多く、どの土器片がどの位置に存在していたのかを検証できなくてはならないであろう。

また、埋設土器の土器自体の選択についての問題を考える上で、無文土器を入れての、その土器の出土土器全体に対する割合の検討がどうしても必要となるであろう。

参考文献

- 川添和暁編 2001 『牛牧遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第95集)愛知県埋蔵文化財センター
立岡和人 2000 『近畿地方における縄文晩期土器棺の成立と展開』『第2回 関西縄文文化研究会発表要旨集』関西縄文文化研究会
余合昭彦編 1993 『三斗目遺跡・三本松遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
森川幸雄編 1995 『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター

銅鐸に伴う「舌」について

● 服部信博

弥生時代を代表する遺物は何といても銅鐸であろう。銅鐸はその形状からみて青銅製のベルであり、金属音を発する祭器としての性格を持つ。しかし銅鐸本体のみでは音を発することはできず、当然内面突帯と触れ合う舌が必要になる。銅鐸と舌はセット関係にあった。しかし、現在までに、銅鐸本体は全国で500例近くの出土が報告されているのに対し、舌に関しては、出土例が極めて少なく、その実体はほとんど不明であった。今回、全国から出土した舌及び舌状石製品を集成し検討してみた。現状で確認できる舌には、青銅製のものと石製のものが存在し、青銅製舌に関しては、初期の銅鐸に伴い、銅鐸鑄造時に併せて舌も鑄造されていた可能性を、石製舌については使用痕の有無によって弥生中期と後期で大きく変化することを指摘することができた。また、舌の出土状況についても若干の検討を加えてみた。

はじめに

銅鐸は、その内面にある突帯と舌(棒)が触れあうことによって金属音を発する弥生時代を代表する遺物であり、かつ多くの謎に包まれた神秘的な遺物である。その独特な形状も相まって、我々に古代へのロマンを掻き立ててくれる。

銅鐸に関する人々の興味・関心は、遠く古代にまでさかのぼるが、本格的な研究が進められるのは、我が国に考古学が伝えられた明治時代以降のことであり、使用年代、製作地、用途、銅剣・銅矛との関係等々様々な問題が、考古学会を代表する著名な研究者達によって議論が繰り広げられてきた。昭和8(1933)年、鳥取県東泊郡小浜より、舌を伴う銅鐸が出土した。さらに、内面に環状突起のある銅鐸が発見され、銅鐸はその内部に舌を吊し、内面突帯と舌とが触れ合うことによって金属音を発する道具であることが明らかにされた。

戦後、佐原真の一連の研究成果によって、銅鐸に関する研究は、単に形態の変化のみならず、文様、銅鐸絵画、埋納といった点にまで研究は深化した。そして現在、銅鐸は金属音を発する弥生時代の祭器としての性格が与えられ、その背後に

潜む弥生社会の構造を明らかにする有力な手掛かりとして、さらなる調査・研究が進められている。

しかし、銅鐸とセット関係にあるはずの舌については、今まで特に触れられることはなかった。それは、銅鐸が500点にも及ぶ出土例があるのに対し、舌の出土例は極めて少なかった点にその要因があるだろう。

近年、開発に伴う発掘調査の増加によって、舌及び舌状石製品(棒状石製品)と報告されるものも数多くみられるようになってきた。ここでは全国で確認された舌及び舌状石製品を集成し、それらから考えられる若干の問題について考えてみたい。

1 各地より出土した舌

各地より出土した舌及び舌状石製品 について、概観しておきたい。

(1)舌の出土範囲

現在までに、各地より出土した舌及び舌状石製品として報告されている資料は、表1に示したように27遺跡37点を数える。その内訳は、青銅製10点、石製24点、銅鏃転用舌3点である。これらの出土範囲は、図4・5に示したように、

倉光清六 1933「銅鐸に於ける新事実」『考古学』第4巻第4号
石製品に関する舌と舌状石製品は使用痕の有無で区別する。詳細は2において述べる。

西は佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、東は静岡県浜松市角江遺跡(舌状石製品)または袋井市愛野向山遺跡(銅鏃転用舌)であり、当然ではあるが、銅鏃及び小銅鏃の分布範囲と概ね重なった分布を示している。

(2)舌の材質と形状

舌に使用された材質には、現状では青銅製のものと石製のものがみられる。しかし、時期は異なるが愛媛県東宮山古墳出土の馬鏃には有機物(骨)が舌として使用されており、他に木製のものもあったとすると、舌の材質には複数のものが使用されていたと考えられる。

次に、現在までに確認されている舌についてその形状・大きさ等を確認しておきたい。

a. 青銅製 青銅製舌はすべて頭部に紐を通すための円環状の穿孔を持つ、いわゆる環頭銅舌である。図2のグラフに明らかなように、泊銅鏃や慶野中ノ御堂銅鏃のように銅鏃本体に伴って確認された舌に関しては、概ね10cm以上の長さを示し、浦志遺跡、板付遺跡出土例のような小銅鏃に伴う資料に関しては、5cm前後の辺りに集中する。朝鮮式小銅鏃として銅鏃の祖形の可能性が考えられている東奈良遺跡出土例は、8.3cmを測り、銅鏃と小銅鏃の中間的な位置にある。舌単体で出土した佐賀県宇木汲田遺跡より出土した舌は銅鏃本体より出土した舌の分布に近く、高知県田村遺跡より出土した舌に関しては、小銅鏃より出土した舌の分布域に近い。

b. 石製 石製舌及び舌状石製品として報告された資料に関しては、青銅製舌とは異なり、その形状はバラエティーである。図1のように大きく3つのタイプに分類することができる。

1 棒状の石材の頭部に穿孔を施したもので、穿孔を施す頭部の状況の違いにより、さらに2つのタイプに分類することができる

1 a 頭部に加工を加えず、穿孔を施すもの...川原遺跡、雁屋遺跡、平方遺跡出土例が該当し、概ね出土した遺構・包含層等より弥生中期に比定することができる。

1 b 頭部の表裏を平坦にカットし、穿孔を施すタイプであり、断面が三角形状となるもの...角江遺跡、下之庄東方遺跡、白浜遺跡、贅遺跡、青谷上寺地遺跡、タテチョウ遺跡出土例が該当する。このタイプについては、青谷上寺地遺跡出土例のなかに弥生中期中葉～後葉にまで遡る可能性のある資料や、時期の特定の難しい資料も存在するが、概ね弥生時代後期に比定することができる。

2 棒状の石材の頭部に、紐掛け用の細い溝を作り出すもの...八王子遺跡、野尻遺跡、青谷上寺地遺跡出土例が該当する。平方遺跡出土例に関しては、紐掛けのために溝を作り出したのち穿孔を加えており、2及び1 aタイプ両者の特徴を組み合わせた形状となっている。また、長瀬高浜遺跡出土例に関しては、他の舌及び舌状石製品が全て棒状を呈するのに対し、板状で断面が凸レンズ状となっており、大きくその形状を異にするが、頭部に紐掛け用の抉りを両サイドから入れており、一応2タイプの範疇として分類した。2タイプの時期については、八王子遺跡出土例は弥生時代中期、その他は弥生時代後期と考えられる。

3 棒状の自然石に穿孔等の加工を加えず、自然石をそのまま使用したと考えられるもの...

青銅製

石製

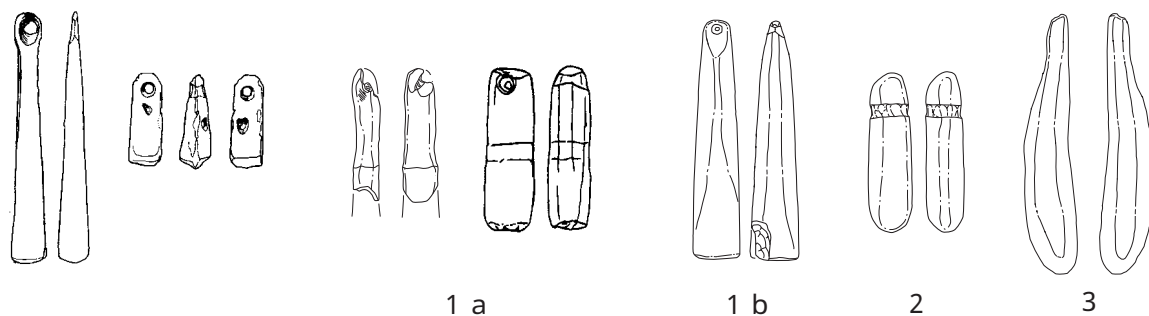


図1 舌・舌状石製品の分類図

表1 舌出土遺跡一覧

番号	遺跡名	出土地	出土銅鐸	舌の材質	長さ(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考
1	川原遺跡	愛知	-	石製(杣ノ丸石)	5.5(6.5)	1.4	(11)	期
2	八王子遺跡	愛知	外縁付鈕	石製(安山岩)	6.5	1.8	25.9	~ 期周溝墓周溝
3	角江遺跡	静岡	-	石製(凝灰質珪質粘板岩)	5.3	1.6	13.3	弥生後期包含層
4	阿津里貝塚	三重	-	石製	8.4	1.8	-	-
5	白浜遺跡	三重	小銅鐸	石製(珪質泥岩)	11.7	2.2	70	弥生後期後半の包含層
6	賢遺跡	三重	-	石製(黒色粘板岩)	8.7	2.2	50	弥生後期後半の包含層
7	下之庄東方遺跡	三重	-	石製(粘板岩)	9.6	1.9	-	弥生後期後半の包含層
8	野尻遺跡	滋賀	-	石製(安山岩系?)	9.6	3.8	150	弥生後期の環濠
9	雁屋遺跡	大阪	扁平紐	石製(塩基性凝灰質点紋片岩)	6.8	2.1	48.8	弥生中期後半
10	雁屋遺跡	大阪	扁平紐	石製(花崗岩質砂岩)	10.5	2.1	78.5	弥生中期後半
11	太田黒田遺跡	和歌山	外縁付鈕	石製(緑色片岩)	11.4	2.2	-	外縁付鈕 式銅鐸内出土
12	上ノ段遺跡(山地)	和歌山	福田型銅鐸?	青銅製	-	-	-	所在不明
13	慶野中ノ御堂遺跡	兵庫	外縁付鈕	青銅製	11.8	1.5	-	外縁付鈕 式銅鐸内出土
14	平方遺跡	兵庫	小銅鐸鑄型	石製(片岩)	6.7	2	-	様式遺物と共伴
15	池ノ谷遺跡(泊)	鳥取	外縁付鈕	青銅製	14	2	-	外縁付鈕 式銅鐸内出土
16	池ノ谷遺跡(泊)	鳥取	外縁付鈕	青銅製	9(10?)	1.8	-	外縁付鈕 式銅鐸内出土
17	青谷上寺地遺跡	鳥取	扁平紐	石製(杣ノ丸石?)	7.1	1.9	-	弥生中期から後期
18	青谷上寺地遺跡	鳥取	扁平紐	石製(杣ノ丸石?)	8	1.9	-	-
19	青谷上寺地遺跡	鳥取	扁平紐	石製(杣ノ丸石?)	7.1	2.1	-	弥生中期中葉から後葉
20	青谷上寺地遺跡	鳥取	扁平紐	石製(杣ノ丸石?)	7.6	1.9	-	弥生中期から古墳前期初頭
21	青谷上寺地遺跡	鳥取	突線紐	石製(杣ノ丸石?)	9.5	2	-	-
22	青谷上寺地遺跡	鳥取	突線紐	石製(杣ノ丸石?)	8.5	2.1	-	弥生後期初頭から後葉
23	青谷上寺地遺跡	鳥取	突線紐	石製(杣ノ丸石?)	9	2.5	-	弥生中期から奈良
24	青谷上寺地遺跡	鳥取	突線紐	石製(杣ノ丸石?)	8.1	2.4	-	紐ずれの痕跡
25	青谷上寺地遺跡	鳥取	突線紐	石製(杣ノ丸石?)	6.7	1.9	-	紐ずれの痕跡
26	長瀬高浜遺跡	鳥取	小銅鐸	石製(碧玉)	5.5	1.3	-	弥生前期遺物と共伴
27	タテテウ遺跡	鳥根	-	石製(硬質頁岩)	9	1.3	21.16	包含層出土
28	前立山遺跡	鳥根	-	石製	14.6	2.2	-	弥生後期後半の竪穴住居
29	田村(西見当)遺跡	高知	-	青銅製	3.8	1.3	-	弥生中期から後期の包含層
30	宇木汲田遺跡	佐賀	-	青銅製	10.5	1.45	62.2	期汲田式~ 期前半
31	愛野向山遺跡	静岡	小銅鐸	銅鍍転用	3.5	1	-	弥生後期後半の木棺墓付近
32	草山遺跡	三重	小銅鐸	銅鍍転用	4.1	1	-	奈良の溝(弥生後期?)
33	松原内湖遺跡	滋賀	小銅鐸	銅鍍転用	3.5	1.1	-	弥生後期の包含層
34	東奈良遺跡	大阪	小銅鐸	青銅製	8.3	1.6	50	弥生中期後半の溝
35	原田遺跡	福岡	小銅鐸	青銅製	3.1(4.3?)	0.6	-	弥生中期前半の木棺墓
36	板付遺跡	福岡	小銅鐸	青銅製	5.3	0.8	-	弥生後期前半の住居内土坑
37	浦志遺跡	佐賀	小銅鐸	青銅製	5.4	0.85	-	弥生後期後葉の溝

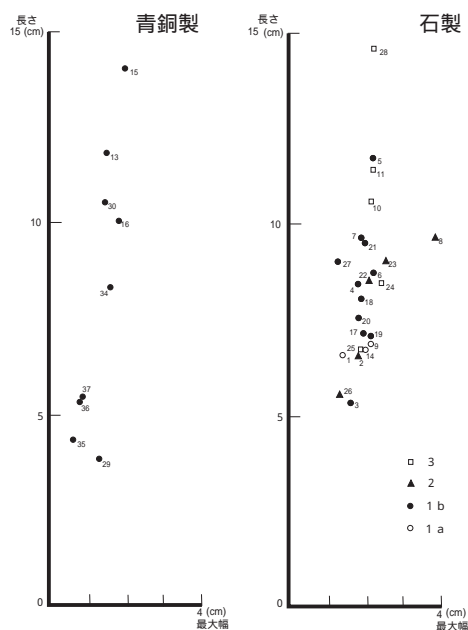


図2 舌の長さとは最大幅

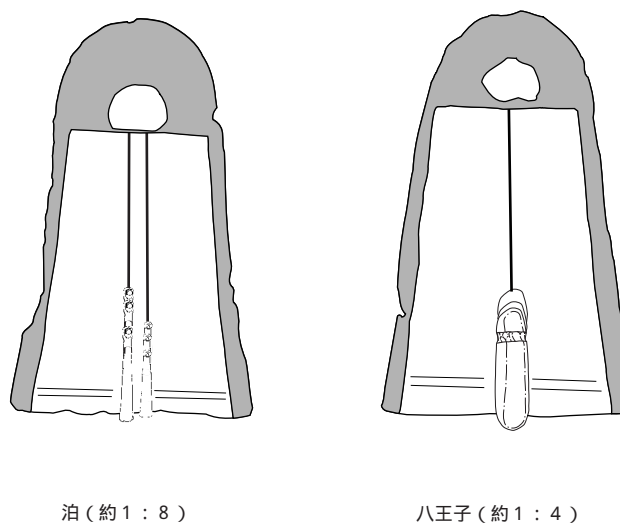


図3 銅鐸につるした舌

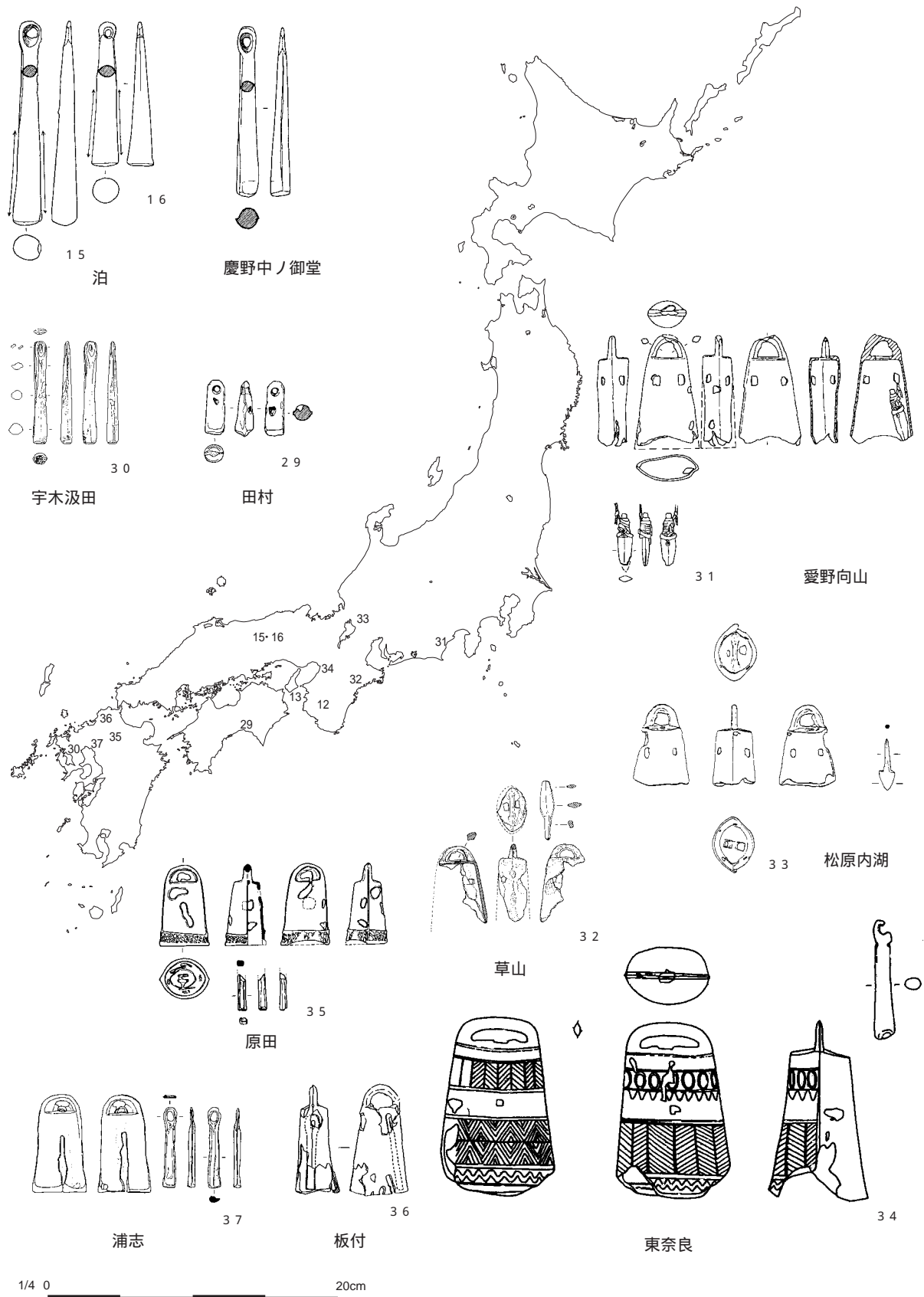


図4 青銅製舌出土遺跡

太田黒田遺跡、雁屋遺跡、青谷上寺地遺跡、前立山遺跡出土例等が相当する。太田黒田遺跡出土例は、外縁付紐式に比定される銅鐸内部より出土したもので、頭部に紐を縛りつけた際に生じたと考えられる紐ずれの痕跡が確認できる。雁屋遺跡出土例は弥生時代中期の竪穴住居より出土し、舌の上部に紐ずれの痕跡、下部には銅鐸と接触した際に生じた使用痕が観察できる。その他は弥生時代後期に比定することができる。

石製舌及び舌状石製品の大きさについては、第2図に示した通りだが、長さに注目すると、1・2タイプは、白浜遺跡出土例を除き、概ね5～10cmの範囲に収まる。対して3タイプは、6～15cmまでの範囲に集中することなく散在的に分布している。また、弥生中期段階に属する川原遺跡・八王子遺跡・雁屋遺跡・平方遺跡出土の1a・2タイプに限ってみれば、概ね6～7cm程度の範囲に集中する。

2 舌に関する若干の問題

1において各地より出土した舌および舌状石製品について概観したが、これらより考えられる若干の問題について検討してみたい。

(1)青銅製の舌について

青銅製舌については、先に述べたように、大きく銅鐸本体より出土したものと小銅鐸内部より出土した資料とがある。

小銅鐸は、その形状よりみればベルとして金属音を発する用途を持った「聞く銅鐸」である。これらより出土した舌の長さと銅鐸の身の長さに注目し、その比率を求めると、東奈良遺跡(身1:舌0.84)、板付遺跡(身1:舌0.93)、浦志遺跡(身1:舌1.12)になり、ほぼ身の長さと舌の長さが等しいことがわかる。これは、小銅鐸の鑄造時に、その大きさに合わせて舌も鑄造されていたことを示し、また機能的にも手に持って振り鳴らす銅鐸であったと考えられる。

一方、銅鐸本体より出土した青銅製舌は、泊銅鐸、慶野中ノ御堂銅鐸の2例があるが、ともに外縁付紐式段階に比定される銅鐸からの出土であり、単体で出土した宇木汲田遺跡出土舌も、汲田～式の包含層中からの出土で、これも福田型銅鐸等古式の銅鐸に伴っていた可能性が高

いと考えられる。これら青銅製の舌を伴う銅鐸は、典型的な「聞く銅鐸」に分類され、古式の銅鐸に位置づけられる銅鐸ばかりである。銅鐸が誕生し、「聞く銅鐸」としての機能を有していた外縁付紐式段階までの銅鐸の多くは小銅鐸と同様に、銅鐸の鑄造時に舌も併せて鑄造されていた可能性が高いと考えられる。しかし、小銅鐸との大きな違いは、銅鐸の身の長さに対する舌の長さの比率であり、図2に示したように泊銅鐸に伴う舌は、銅鐸の身の長さの2分の1から3分の1程度の長さであり、当然内面突帯と舌が触れあうためには、舞から紐を長く垂らさなければならない。また、舌が銅鐸内で振幅する幅も小銅鐸に比べ広くなる。これは、音の反響を考えた場合、より音が響き渡る効果が大きい構造になっていると想定され、同じ金属音を発する祭器でありながらも、その出現段階から小銅鐸とは使用目的を違えて銅鐸は製作されたと考えられよう。

(2)石製舌について

石製の舌に関しては、先に述べたように、外縁付紐式段階の銅鐸内部より確認された太田黒田遺跡出土例をはじめ、24点の舌及び舌状石製品が確認されている。前節でこれらの形状分類を行ったが、概ね1～3タイプのそれぞれが弥生時代中期から後期にかけて出土している。しかし、弥生時代中期出土の舌と後期から出土した舌の間には大きな違いがみられる。それは、銅鐸の内面突帯と接触することによって生ずる使用痕の有無である。

弥生時代中期の遺構・包含層より出土した資料には、1aタイプ3点、1bタイプ1点、2タイプ1点、3タイプ1点の6点の資料がみられるが、1bタイプの青谷上寺地遺跡出土例を除き、その他の資料では、少なからず銅鐸と触れあうことによって生じたと考えられる使用痕が残されている。特に1aタイプに属する川原遺跡出土例は、ホルンフェルスという硬質の石材の両側面に抉りが入るほどの激しい接触を示す使用痕が残されており、石製舌とよぶにふさわしい形状を呈していた。これら使用痕を残す資料は、どの段階の銅鐸に使用されたのか、あるいは小銅鐸に使用されたのかの問題にはなるが、いずれにしる舌と考えると差し支えないであろう。

それに対して、弥生時代後期より出土した資料に共通するのは、使用痕を全く確認することができない点にある。また、弥生時代遺跡の少ない地域とされる三重県志摩地方に3遺跡も集中してみられることや日本海側の鳥取県青谷上寺地遺跡のみで8点もの出土数を誇っていたりと、全ての資料を舌と考えて良いのか躊躇する部分もあり、石錘等の別の用途も想定する必要があるのかもしれない。この点については今後十分に検討していかなければならないと考えられる。しかし、それらが出土した遺跡は、概ね各地域の中核的な遺跡であり、出土遺物自体もその大半が、全面を丁寧に研磨し、実用品とは思えないほどの美しいつくりのものである。使用痕の残る石製舌とは、明確に区別する必要はあろうが、とりあえず舌の可能性のある遺物「舌状石製品」としてここではまとめておきたい。

以下、これらの舌状石製品を舌であると仮定し、大胆な推測を述べてみたい。

これら舌状石製品の所属時期は、概ね弥生時代後期であり、該期に相当する銅鐸は、大型化した突線紐式段階のいわゆる「見る銅鐸」とされるものである。銅鐸を見るという点に重点が置かれれば、音を鳴らす必要はない。事実、突線紐式段階の銅鐸の内面突帯は、舌と触れ合って摩滅した痕跡をほとんど確認する事はできないし、徳島県阿南市の畑田銅鐸のように、音響効果を高める役割を果たす内面突帯を欠損する銅鐸まで出現している。

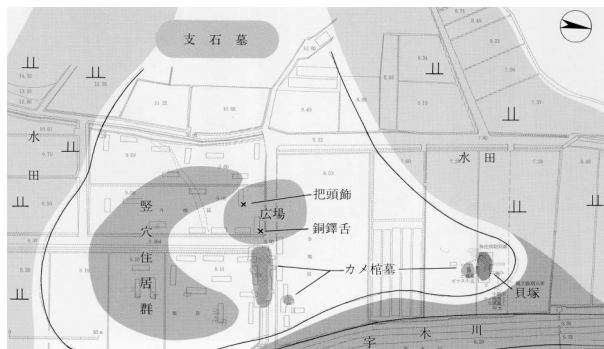


図6 宇木汲田遺跡遺構配置図(唐津市1992)

しかしながら、多くの突線紐式銅鐸に内面突帯が残り、舌状石製品が少なからず存在しているということは、「見る銅鐸」の段階に至っても、なお銅鐸は音を鳴らすものであるという意識を少なからず弥生人が有していたことを示しているといえよう。つまり、弥生時代後期になって、ほとんど音を鳴らさなくなったとしても、銅鐸には舌の存在が必要であったのである。このように考えるならば、「見る銅鐸」は、1mを超えるような超大型の銅鐸は別としても、初期の銅鐸のように実際に吊して、当時の弥生人に、その崇高な姿を披露したものと想定され、舌状石製品のほとんどが実用品とは思えないほどに丁寧に研磨されていた事実も納得がいく。

(3)「舌」の出土状況と廃棄された時期

銅鐸と舌がセットで確認された例(可能性のある例)としては、鳥取県泊銅鐸(銅鐸内面のほぼ中位より2本の青銅製舌が出土)、兵庫県慶野中ノ御堂銅鐸(青銅製舌)、和歌山県太田黒田銅鐸(銅鐸内面のほぼ中位より石製舌が出土)の僅か3例しか確認されておらず、このように銅鐸と舌をセットで埋納することは異例なことであったと考えられる。一般に銅鐸の出土は、弥生ムラから遠く離れた地点で、特徴的な埋納坑から検出される場合が多いが、それらから出土する銅鐸は、舌がはずされ、銅鐸本体のみで埋納されているのである。金属音を発する祭器として、欠くことのできない舌をはずして埋納することは、仮に定期的に掘り起こした、あるいは永久に埋納したとしても、一旦は、銅鐸本来の機能を消滅させて、土に帰すことになり、そこには銅鐸に対する弥生人の本質的な思いが込められていると考えられる。

次に、舌単体で出土したものに関して、弥生中期段階の舌に限って、その出土地点をみていくと、図6に示したように、宇木汲田遺跡においては、竪穴住居群や甕棺墓群、支石墓に囲まれた広場的な空間より出土しており、銅鐸祭祀の場を考えると示唆的である。川原遺跡・八王子遺跡

近畿式銅鐸である高知県田村銅鐸(48cm)の内面突帯には、摩耗痕が存在し、実際に鳴らされていたことが判明している。三木弘 2000 「振る・叩く楽器 - 銅鐸 - 」『卑弥呼の音楽会』大阪府立弥生文化博物館

この点について、平成13年10月14日愛知県一宮市で開催されたシンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」の中で、金関忍は、突線紐式銅鐸の中に、紐部分の紐づれの痕跡が残っているものが確認されていると発言した。

和歌山県山地より出土した銅鐸内にも青銅製舌があったとされるが、銅鐸本体・舌とも所在不明となっている。

では中期末頃の墓域、雁屋遺跡では、中期末頃の居住域から、平方遺跡では、やはり中期末頃の土坑より検出されている。銅鐸本体の出土状況との大きな違いは、いずれの資料も、集落内からの出土であり、銅鐸本体のように特別に埋納されたというよりは、廃棄された状態で出土している。集落内で廃棄されているということは、銅鐸祭祀を実際に行った地点からそう遠くない場所に廃棄されたと考えられ、今後資料が増加すれば銅鐸がどのような場所でどのように使用されたかを直接検討する良コナ判断材料になると思われる。

これらの舌及び舌状石製品が廃棄される時期についてであるが所属時期が特定できる資料よりみれば、宇木汲田遺跡例のように、中期前半と考えられる資料もあるが、概ね弥生中期末頃と弥生後期後半頃の2つの時期に集約される。この時期は、弥生社会が大きな変貌を遂げる時期であり、かつ銅鐸が大量に埋納される時期にも相当し、興味深い。

まとめ

以上、全国から出土した舌・舌状石製品を集成し、若干の検討を加えてきた。それらを簡単にまとめてみると以下ようになる。

- (1)現状で確認できる舌には青銅製と石製があり、それらは、概ね銅鐸分布圏と重なる。
- (2)青銅製の舌に関しては、外縁付紐 式段階以前の初期の銅鐸に限られ、それらは、銅鐸鑄造時にあわせて作られていた可能性が高い。
- (3)石製の舌に関しては、使用痕の有無によって石製舌と舌状石製品に分け、前者は弥生中期に後者は弥生後期に時期が、ほぼ特定できる。
- (4)舌の出土は、概ね集落内からの出土であり、今後その出土地点を検討することによって、銅鐸祭祀の在り方を探る手掛かりになる。
- (5)舌が廃棄された時期は、概ね銅鐸が大量に埋納される、弥生中期末と弥生後期後半に集中する。

最後になりましたが、新田剛氏には阿津里貝塚をはじめ三重県出土の舌状石製品について助言頂いた。記して感謝します。

参考文献

- | | |
|---------------|---|
| 服部信博ほか編 | 2001 『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター |
| 樋上 昇ほか編 | 2002 『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター |
| 春成秀爾 | 1989 「九州の銅鐸」『考古学雑誌』75-2 |
| 和歌山市教育委員会 | 1983 『太田黒田遺跡』図版編 |
| 鳥取県教育文化財団 | 1983 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告』 |
| 兵庫県教育委員会 | 1993 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』 |
| 三重県教育委員会 | 1987 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要 下之庄東方遺跡(高畑地区)』 |
| 本浦遺跡群調査委員会 | 1990 『白浜遺跡発掘調査報告』 |
| 四条畷市教育委員会 | 1994 『府立四条畷保健所改築工事に伴う雁屋遺跡発掘調査概要』 |
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1996 『角江遺跡』遺物編3(石器・金属製品他) |
| 島根県教育委員会 | 1979 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告』 |
| 鳥取県教育文化財団 | 2001 『青谷上寺地遺跡』3 |
| 島根県教育委員会 | 1980 「前立山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 立教大学博物館学講座 | 1966 「三重県志摩町における考古・民俗の調査」『MOUSEION』12 |
| 鳥羽市教育委員会 | 1975 『鳥羽 鬘遺跡』 |
| 常松幹雄 | 1984 「浦志遺跡A地点」『前原町文化財調査報告書』第15集 |
| 奥井哲秀 | 1999 「東奈良遺跡の環濠集落とその周辺」『大阪府埋蔵文化財研究会(第39回)資料』 |
| 松阪市教育委員会 | 1985 『草山遺跡発掘調査月報』No10 |
| 栗東町文化財センター | 1999 「野尻遺跡」『年報』1999 |
| 中島直幸 | 1985 「佐賀県唐津市宇木汲田遺跡出土の銅鐸の舌について」『考古学雑誌』70-3 |
| 福島日出海 | 1988 「福岡県嘉穂郡嘉穂町原田遺跡出土の小銅鐸について」『考古学雑誌』73-4 |
| 松井一明 | 1989 「静岡県袋井市愛野向山・遺跡出土の小銅鐸について」『考古学雑誌』75-2 |
| 唐津市末廬館 | 1992 『弥生の秘宝里帰り展 宇木汲田遺跡出土品』 |
| 浜崎悟司 | 1986 「松原内湖遺跡」『弥生時代の青銅器とその同伴関係』 |

尾張低地部における 小規模古墳の様相

● 宮腰健司

朝日遺跡は弥生時代の環濠集落として著名であるが、その後の古墳時代中期～後期にも墳墓が存在する。本文では、この朝日遺跡の古墳と須恵器・土師器の分布を検討し、遺構が検出された中央部以外にも西部に古墳が存在する可能性があること、またそれらの造営に際しては、前時代の埋没しきらない方形周溝墓群の痕跡を意識して造られていること、数基単位で構成され群集しないことを指摘した。さらに、このような様相を見せる小規模古墳が尾張低地部では一般的であることを述べ、墳墓への埋葬以外に墳丘やその痕跡である高まりへの祭祀が行われていた可能性を示唆している。

はじめに

愛知県西春日井郡清洲町に所在する朝日遺跡は、東海地方屈指の弥生時代集落として著名である。遺跡は弥生時代前期より古墳時代前期まで連続して続くことは知られているが、その後の古墳時代中葉以降の様相についてはこれまであまり述べられてこなかった。発掘調査や採集遺物の中に須恵器が混じることはかねてより認識されていたし、調査の成果として、円墳の痕跡や愛知県指定史跡である検見塚の周溝が見つかっている。

この文では検出遺構や須恵器・土師器の分布から、古墳時代中期から後期、およそ5世紀から6世紀にわたる時期の朝日遺跡の景観を復元し、尾張低地部の前方後円墳や前方後方墳などの大型首長墓とは異なる、小規模な古墳との比較を試みたいと思う。

1 朝日遺跡の様相

(1) 須恵器・土師器の分布状況

朝日遺跡において須恵器・土師器が出土する地点としては、中央部とさらに500m程西にある西部に分かれる。

A 中央部(図1)

谷Aが南に湾曲して北東側に走り、谷Bと分

岐するあたりを中心とした地域で、弥生時代の遺構でいえば、南居住域の北半、北居住域の南東、東墓域の西端になる。この地域では、愛知県教育委員会調査分の土師器の選別が行えなかったため、須恵器・埴輪の分布についてのみ確認している。また1破片が1ドットで、口縁部は全周の1/12を白抜きドット1つで示している。

この地域にはもとより、中世から江戸時代に行われた検見に使用されたと伝えられる、高さ2m程、直径15m程の高まり検見塚(検見塚貝塚)が所在しており、昭和63年度の調査で、二重の周溝が巡ることが確認され、古墳であることが判明した。ただ、封土中には貝などが多量に混入する場所があり、後世の攪乱をうけている可能性が高いものと思われる。この古墳SZ1002は、弧状に平行して走る2本の周溝が検出されており、外側の溝(SD02)が幅約3m、内側の溝(SD01)が幅約4m、溝間は約2mで、両溝とも残りが悪く、約25cmの深さである。また墳丘も削平を受け残存していない。この弧状の溝の円周を正円として大きさを割り出すと、検見塚を中心として、内側の溝の内周が約36m、外側の溝外周が約53mになると推定される。西側と北側で円筒埴輪片が出土している。

その西北西約20mのところ、周溝を含めた直径約14mで1重の周溝が巡る円墳(SZ1001)が検出されている。周溝の幅は約2.5m、深さ20cmで、南部から正立で置かれていたと思われる

甕が1個体出土している。また墳丘部分も削平されており、確認されていない。

中央部における、この2基の古墳以外の須恵器分布をみると、1645の把手付椀や杯身、1635の杯蓋が弥生時代中期の方形周溝墓があった地点から出土しているのに注目したい。前者は愛知県教育委員会の調査で台状遺構とされたSZ142～145(台状遺構1～4号)部分、後者が墳丘において2棟の掘立柱建物が確認されている長径約24m、短径約19mの大型方形周溝墓SZ254(SX057)の南溝から出土している。また1634・1636・1637・1647についても、基本的には東方形周溝墓群部分に属すると考えられるが、1647・1637は谷に接続する大規模な溝(SD)およびその肩付近。1634・1636は谷B埋土より出土している。谷は中世におけるまで窪地状を呈しており、この時期も溝状になっていたと考えると、これらの遺物群はそこに流れ込んだものである可能性も指摘できる。(七原恵史・加藤安信他1982・石黒立人・宮腰健司他1991・石黒立人・宮腰健司他1994)

B 西部(図2・3・4)

国指定史跡である貝殻山貝塚を中心とした地域で、周辺では幾度かにわたる発掘調査が行われている。今回は、報告書が刊行されており、出土位置等のデータが揃っている昭和46年に県教育委員会によって実施された土地改良事業に伴うトレンチ調査と、平成7・8年度に愛知県埋蔵文化財センターが行った新資料館建設に伴う調査の資料をもとに、須恵器・土師器の分布を作成した。愛知県教育委員会調査分は、トレンチ名しか判明しないものとトレンチのどの部分か判るものの2種があり、愛知県埋蔵文化財センター調査分については大半が5m四方のグリッド内からの出土として取り上げられている。また貝殻山貝塚で確認できた採集資料のうち、位置が確認できる二反地貝塚周辺および中焼野貝塚周辺出土のものと、『朝日遺跡～』(愛知県教育委員会1982)に掲載されている貝殻山北側出土の一群については推定される位置を示している。

須恵器については、5cm以上の破片1片がドット1つ、3cm以上の破片1片が網ドット1つ、そのうち口縁部全周の1/12が白抜きドット1つとした。さらに、甕は破片5片を1つの大きなドッ

トで表記している。土師器については、甕口縁部と台部、高杯脚端部をカウントし、各々全周の1/12を1ドットとした。また図4で図示した土器は、ドットで表した個体となる。

分布状況を見ると、まず目に付くのは貝殻山貝塚周辺の遺物の少なさである。北および西では須恵器・土師器が出土しているトレンチは若干あるが、東側になるとほとんど見当たらない。

次に集中地帯をあげると、A～Cの3つのブロックがある。Aブロックは貝殻山貝塚の北西部にあたり、弥生時代前期と言われる人骨2体が出土した地点になる。このブロックについては杯・椀・高杯などがやや少ないようであるが、須恵器・土師器ともまとまって出土していると言えよう。

Bブロックは中焼野貝塚とその南にあたる地点で、愛知県埋蔵文化財センターの95・96調査区では貝廃棄を埋土とする弥生時代前期の環濠が検出されている。ここでは須恵器が目立つが、その中でも甕片が非常に多く出土している。がしかし、これは甕の個体数が多いというわけではなく、原形が大型のため、割れた場合に破片数が増えという理由のため、口縁部片で見た場合決して多数なわけではなく、むしろA地域の方が多いくらいである。また95・96調査区の所見では、調査区北側にあたる中焼野貝塚は、弥生時代前期～中期前葉の環濠に廃棄された貝層が、後世の削平によって高まり状残っていた痕跡ではないかとされている。Bブロック出土遺物は、この高まりに伴うものか、もしくは削り残された貝層にさらに土盛りをしたことにより、周囲より須恵器・土師器がかき集められた状態になった可能性が考えられる。

Cブロックは前記の95・96調査区内の弥生時代後期の方形周溝墓周辺にあたり、他のブロックに比べ土師器が多いことが特徴である。また2022・2023・2030の甕については、ほぼ1個体が正位または横位でそのまま潰れた状態で出土している。(伊藤稔・柴垣勇夫1972・宮腰健司他2000)

(2) 95・96調査区の景観について

平成7・8年度に愛知県埋蔵文化財センターによって調査された95・96調査区は、前記の須恵器・土師器が集中するBとCブロックを含んで

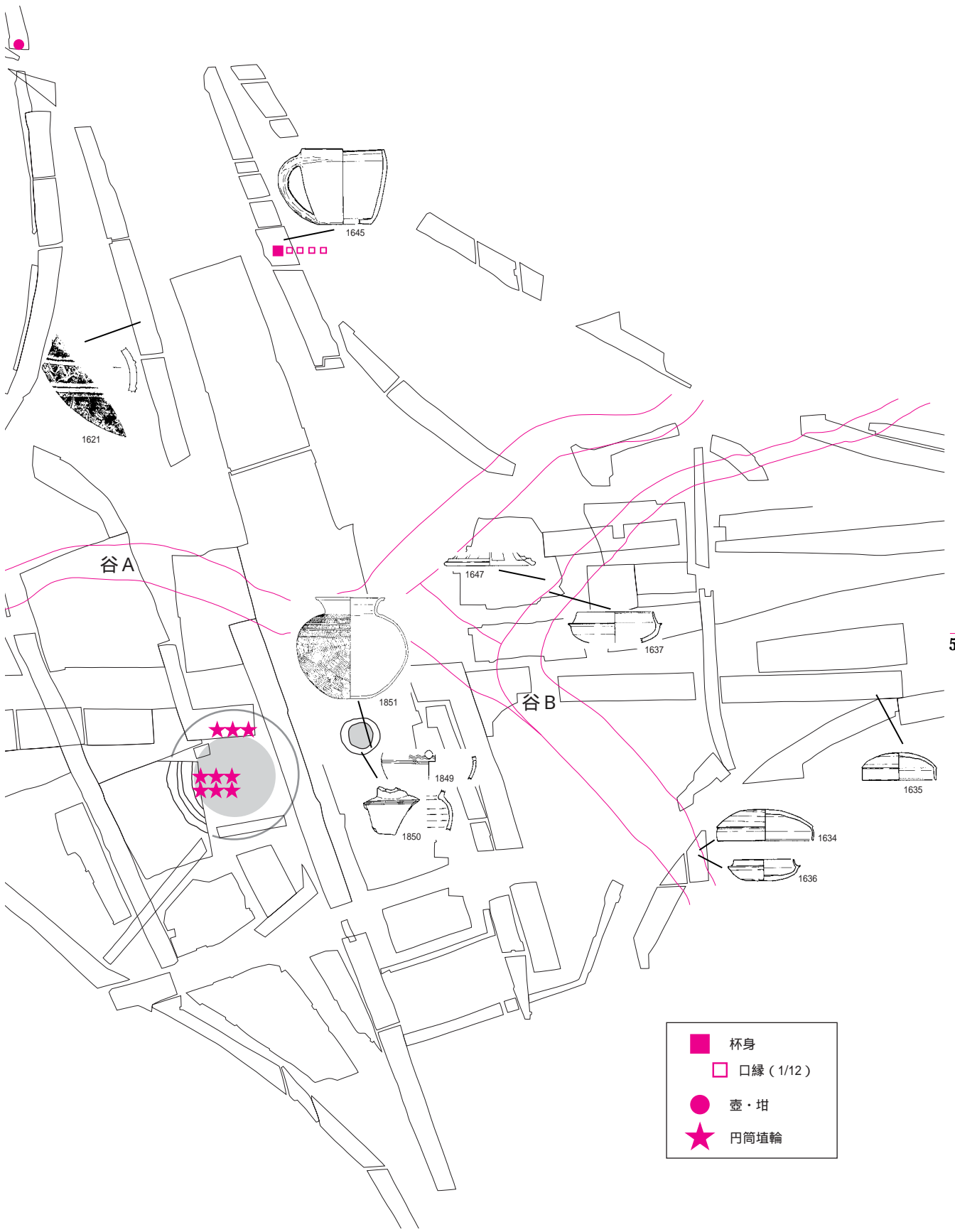


図1 朝日遺跡中央部 須恵器分布 1:2,000
 七原恵史・加藤安信他 1982・石黒立人・宮腰健司他 1991・石黒立人・宮腰健司他 1994 より作成

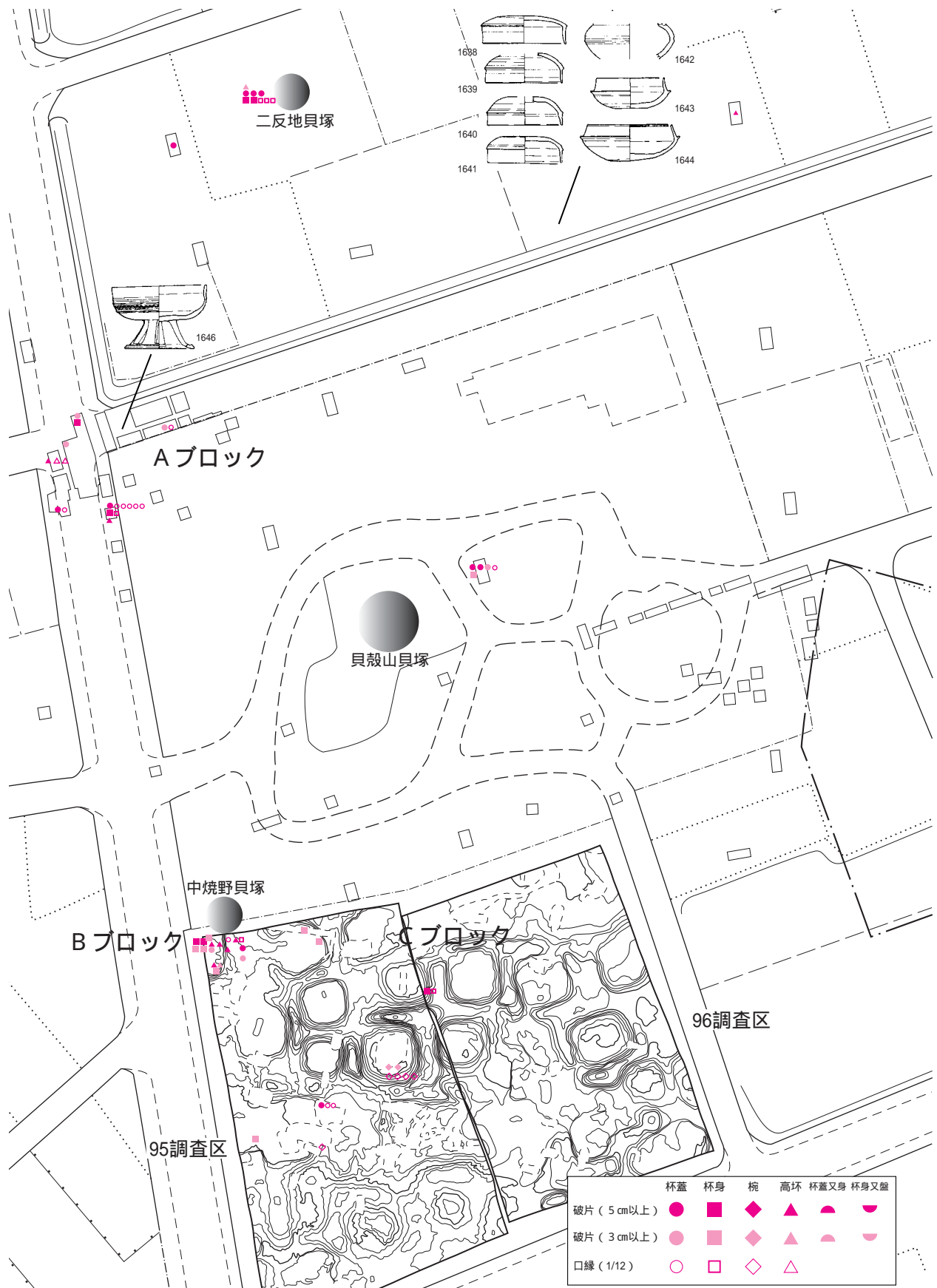


図2 朝日遺跡西部 須恵器分布 1 1:1,000

伊藤稔・柴垣勇夫 1972・宮腰健司他 2000 より作成

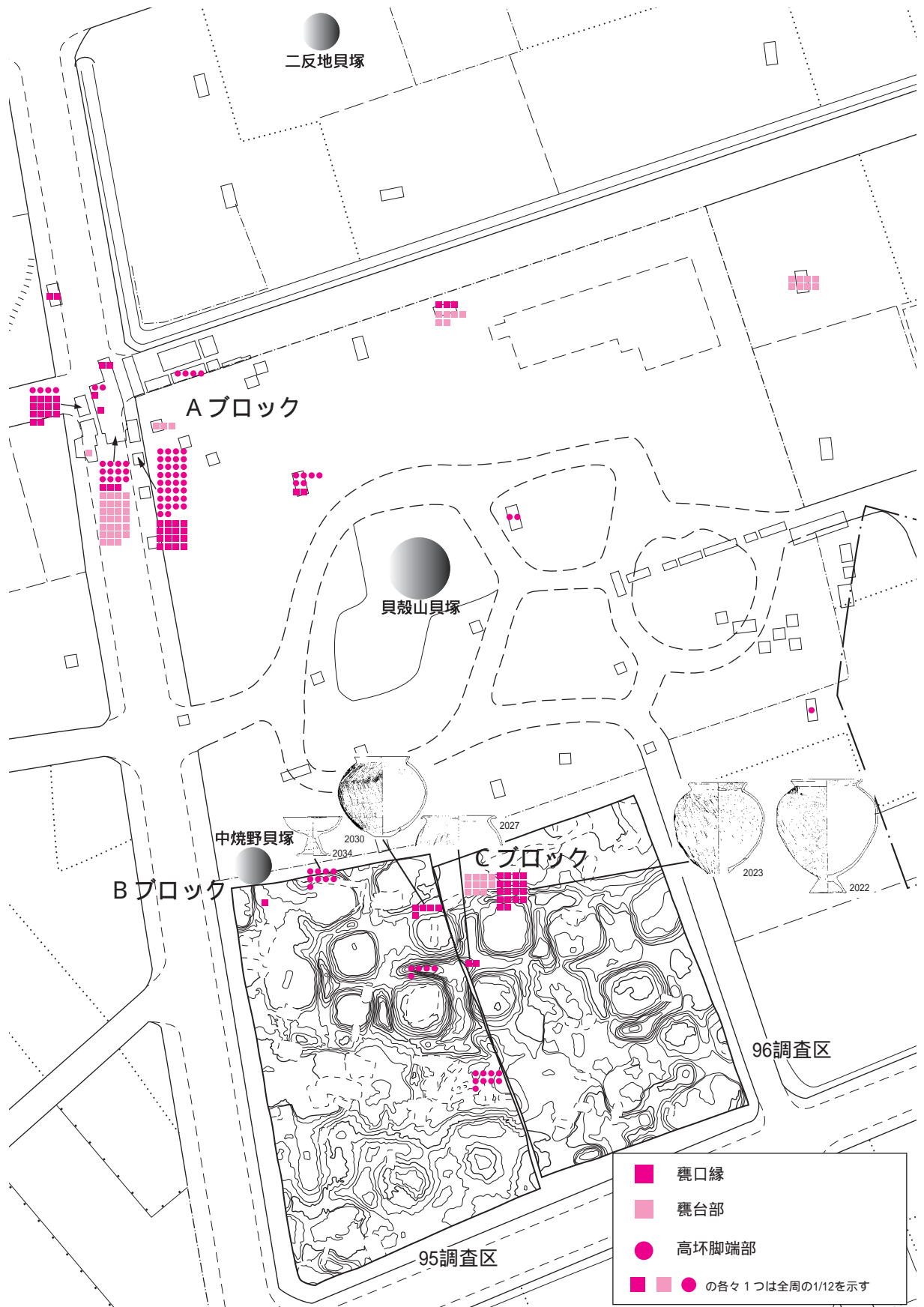
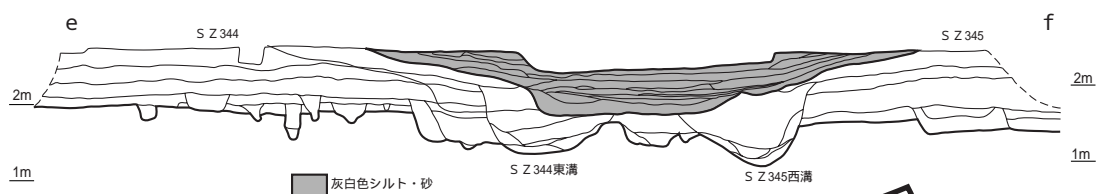
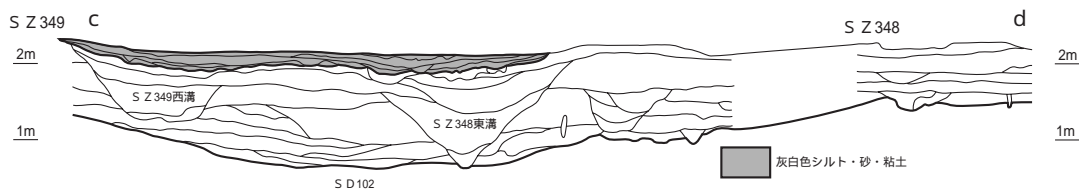
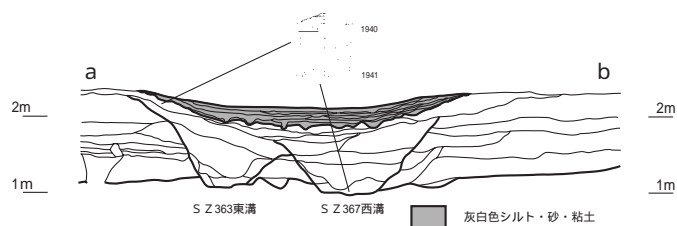


図4 朝日遺跡西部地区 土師器甕・高坏 1:1,000

伊藤稔・柴垣勇夫 1972・宮腰健司他 2000 より作成



セクション 1/100、平面図 1/600

図5 古墳時代中期の95・96調査区とセクション

いる。以降発掘調査所見をもとに、これら遺物を出土した遺構について考えてみたいと思う。

95・96調査区では、表土下の中世遺物を包含する灰色粘土層を除去すると、灰白色シルト・砂・粘土層および溝最下層にはケヤキやスギの流木を含む灰色がかった黒色砂があり、その層より古墳時代中期～後期の遺物が出土している。Cブロックでそのまま潰れた状態で見つかった甕2022・2030などは、灰白色シルト・砂・粘土層の最下層、下層の弥生時代包含層である黒色砂との境あたりで出土しており、これらの層が当該期中に堆積したものと考えてよいであろう。つまり、灰白色シルト・砂・粘土層を除去した状態が少なくとも古墳時代中期の地表の様相を示していると思われるのである。これら古墳時代の包含層を除いた後の状況という、明確な遺構は確認できないが、10m程の隅丸方形の高まりの連続と、その間の切れ目のない浅い溝が調査区北半で、不明瞭な低い高まりとその間の浅い溝が南半で検出されている。これらは後ほどの調査で、北半が弥生時代後期の、南半が中期の方形周溝墓の痕跡をほぼ忠実に浮かび上がらせていることが確認できている。つまり、高さは上方が削平を受けて平らになっているため不明であるが、廃絶された弥生時代の遺構である方形周溝墓の配置そのままの景観が、古墳時代中期まで残存していたものと考えられるのである。また溝部分の状況であるが、図5のセクション図のa - b、c - dを見ると、現況で20～30cmときわめて浅くなっている。ただ95・96調査区の中央部分e - f周辺では、古墳時代中期～後期の堆積層が最大で80cm程の厚さになっており、この一帯に関しては、当時改めて掘削がなされている可能性も指摘できるかと思う。

まとめると、貝殻山貝塚の南側には、弥生時代中期～後期の方形周溝墓の配置そのままの状態(時期の違いであろうか、北半の後期の遺構は比較的是っきりと、南半の中期のものは不明瞭な状況で)で、切れ目のない浅い溝とある程度の高さをもった隅丸方形または円形(楕円)の高まりが連続している景観が復元できる。またさらに想像を膨らませると、それらの高まり群の北端には、土師器甕2022・2030などが据え置かれたのではないかと想定できるのである。

2 尾張低地部の様相

(1) 門間沼遺跡(図6)

葉栗郡木曾川町にある、弥生時代から中世にかけての遺跡である。遺跡は幾つかの小河川に挟まれた標高7m前後の微高地上に立地し、遺構はその形状の沿って細長く展開していく。古墳は、遺跡の西部で4基検出されている。94C区のSZ01・SZ02は二重の周溝をもつもので、両者の間隔は約1mとほぼ接するように築かれている。SZ01・SZ02ともほぼ同規模で、外周が約12m、内周が約7m、周溝はやや不定形であるが外溝が2～4m、内溝が0.9m～1.6mを測り、二段築成の模倣ではないかとされている。遺物は周溝内より須恵器・土師器とともに木製品が出土しており、時期は5世紀後半～6世紀前半に比定される。その70m程東の94A区には、径約16m、溝幅約1.2mのSZ01、とその南東15m程に径約9m、溝幅約0.9mのSZ02がある。これ以外の注目されることとして、遺構を区画するように走り、琴を出土した溝群や、古墳に隣接する井戸群・掘立柱建物群・竪穴式住居などがあり、5世紀後葉から7世紀前葉までと長い期間となるが、墳墓を含めた土地利用を知ることができる資料となっている(石黒立人他1999)。

(2) 山中遺跡(図7)

一宮市に所在し、標高5m前後の自然堤防上に遺跡が立地する。溝幅1～3mのやや不定形な円墳の周溝の一部が検出されており、復元径は14mとされている。なお墳丘部分より金環が出土しており、時期は6世紀代に比定されている(石黒立人他1993)。

(3) 大塚古墳

稲沢市に所在し、三宅川の左岸の標高4mの自然堤防上に立地する。トレンチ調査が行われているのみで、まだ墳形については不明な点が多く、後世の削平や改変も行われているようであるが、おおむね直径40～50m、周溝幅7m、墳丘の高さ4～5mの古墳と考えられる。周溝内より、須恵器・土師器、円筒・蓋形・朝顔形埴輪が出土しており、時期は、5世紀後半から6世紀前半に比定される(北條献示・日野幸治他1983・1984)。

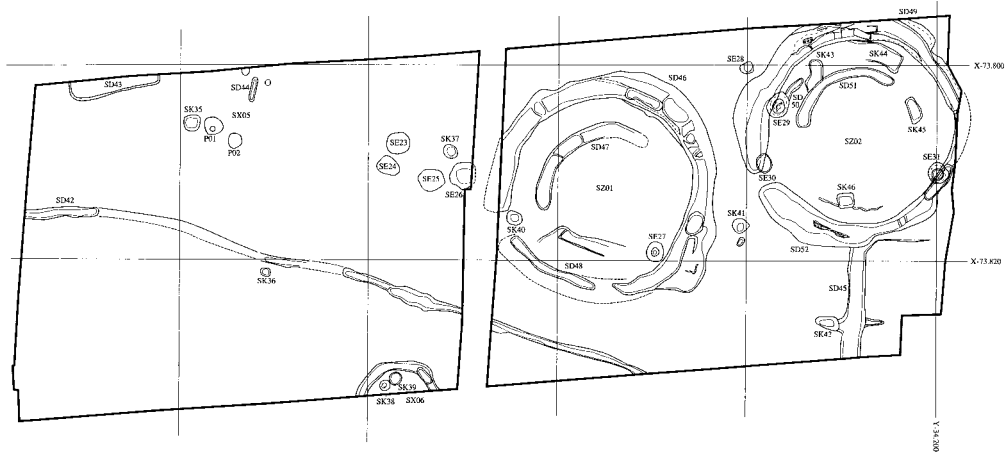


図6 門間沼遺跡94C区 1:800 (石黒立人他 1999より転載)

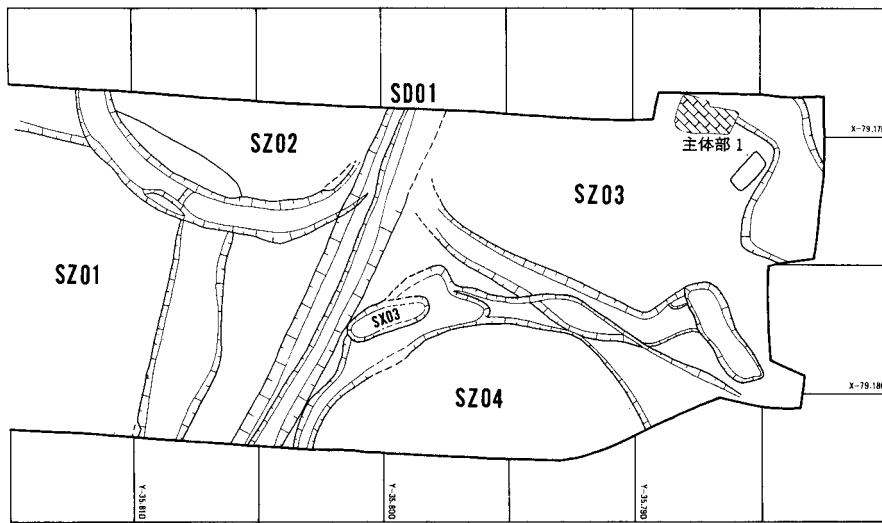


図7 山中遺跡 1:300 (石黒立人他 1993より転載)
SZ01 ~ 03が弥生時代後期~古墳時代初頭。SZ04が古墳時代中期~後期

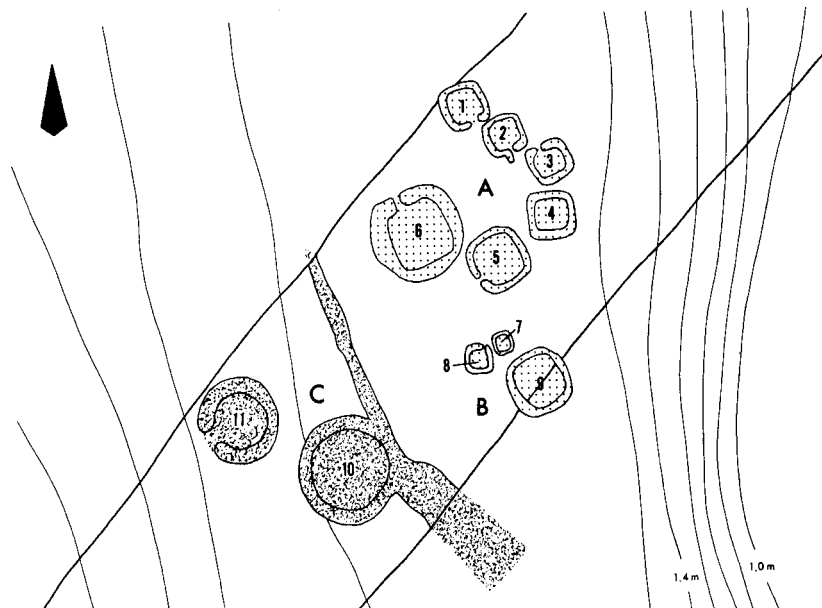


図8 土田遺跡 1:1,800 (赤塚次郎他 1987より転載)
1~9が古墳時代初頭、10・11が古墳時代中期~後期

(4) 岩倉城遺跡

岩倉市に所在し、南に流れる五条川沿いの標高8～10mの自然堤防上に立地する。古墳は五条川を挟んだ両岸にみられる。右岸では、一辺26m、周溝幅4m程の方墳SZ1301の南部分が検出され、5世紀後葉の須恵器・円筒埴輪・金環が出土している。また左岸で幅6mの周溝のみが検出された、6世紀前葉に比定されるSZ1302については、報告書中で一辺17m程度の方墳とされており、埋没した周溝上に棺を設置するための集石遺構が8基検出されている。さらに、SZ1302の周溝をコーナー部でわずかに切るように造られた一辺13m程度、溝幅1.2～2mを測る方墳SZ1303と、その周溝と同方向を向いて、周溝の一部がブリッジ状に掘り残されている溝幅約5.5mの方墳SZ1304が検出されている。時期は5世紀中葉（松原隆治・服部信博他1992）。

(5) 土田遺跡（図8）

西春日井郡清洲町に所在し、標高3～4mの五条川右岸の微高地に立地する。2基の円墳が7m程しか離れず、近接して確認されている。6世紀中葉に比定されるSZ10は径18.5m、溝幅1.5～1.8m、6世紀前葉に比定されるSZ11は径18m、溝幅2.5～3mを測り、西側に開口部が存在する。また、SZ10の周溝と重なるように古墳時代後期と考えられる幅3mの溝SD30が走り、その北東側には古墳時代初頭の方形周溝墓が展開している（赤塚次郎他1987）。

(6) 高塚古墳

西春日井郡西春町に所在し、標高4～5mの五条川左岸の自然堤防上に立地する。墳形は長径約15m、短径約2mの「造出し」部をもつ、径約40mの円墳である。周溝幅は約10mを測り、



図9 地籍図からみた能田旭古墳と能田旭西古墳

円筒・形象埴輪や葺石である可能性のある円礫が出土している。時期は5世紀前葉があてられる（伊藤秋男・澤村雄一郎他1994）。

(7) 能田旭古墳（図9）

西春日井郡師勝町に所在し、五条川やその支流が作り出した標高5mの自然堤防上に立地する。墳形は、突出部が付くいわゆる「帆立貝式古墳」となり、推定全長が約43m、墳丘径が約37m、突出部長径約22m、短径約8m、溝幅2～6mを測る。墳丘は残存していなかったが、周溝より円筒・朝顔形・形象埴輪、笠形・しゃもじ形木製品を含めた多量の木製品、須恵器・土師器が出土しており、時期は5世紀後葉～6世紀初頭に比定される。また地籍図や航空写真の調査によると、40m程西に、周溝を伴った全長約54mの古墳（能田旭西古墳）が存在したようである（伊藤秋男・市橋芳則他1986・伊藤秋男・森崇史・市橋芳則1989）。

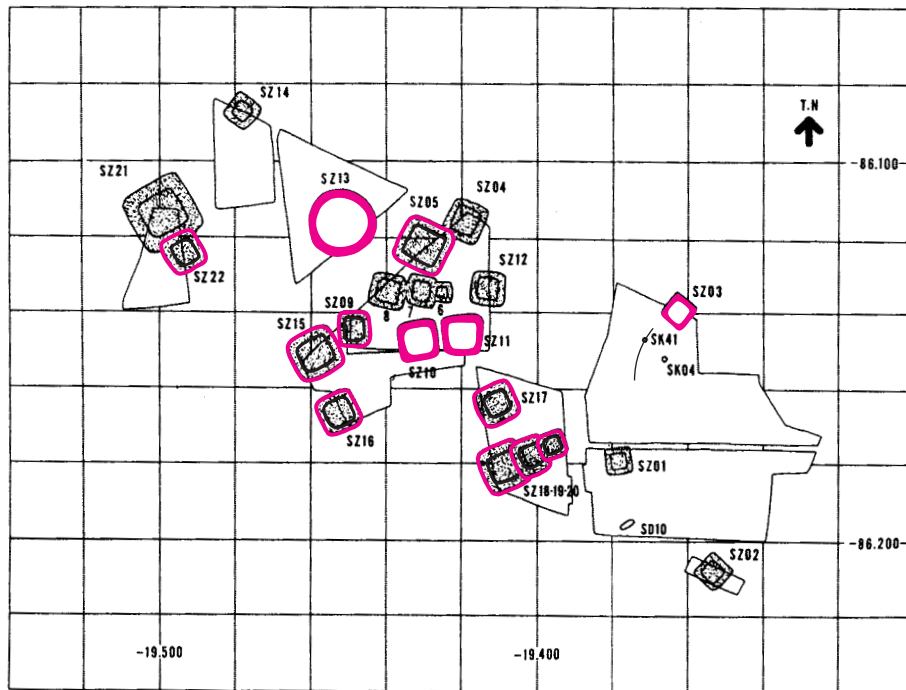
まとめ

以上朝日遺跡を中心に古墳時代中期～後期にかけての尾張低地部の小規模古墳の様相をみてきた。これらのことをまとめると、下記の2つのポイントになる。

尾張低地部においては、一定の地区に連続して墳墓が造営されることはなく、2～4基程度の円（帆立貝式）または方墳が散漫に築かれるということが一般的と見られる。さらに言えば、朝日遺跡中央部や門間沼遺跡、土田遺跡の事例のように、2基がひとつの単位で、かつ近接して造られる傾向が見られる。

次に朝日遺跡で示したように、この時期にはまだ弥生時代以降の既存の墳墓の痕跡が残存していた可能性が高いということである。この例として、低地部の遺跡ではないが春日井市にある勝川遺跡を取り上げてみたい（図10）。

勝川遺跡は標高13mの洪積台地上と標高11mの洪積台地下に立地する。墓域は洪積台地上の上屋敷地区から検出され、弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代中期～後期に大きく2時期に分かれる。弥生時代後期～古墳時代初頭の墳墓は周溝を共有しながら築造されていくことが多く、SZ18・19・20が典型的なもので、SZ05・



12の図版を改変

□ 弥生時代後期～古墳時代初頭
 ○ 古墳時代中期～後期

図10 勝川遺跡 1:2,000

04、SZ22・21、SZ06・07・08などもこの時期かと考えられる。それ以外ではSZ09・15・16のように単独なものも見受けられる。5世紀後半～6世紀前半にわたる、古墳時代中期～後期の墳墓はSZ03・10・11のように単独で造られており、径16mを測る円墳SZ13もその中に存在する。

この勝川遺跡で注目すべきは、上屋敷地区では方形周溝墓や古墳が方向・築造方法を変えながら弥生時代後期から古墳時代後期、時間的には300年～400年の間、既存の墳丘を削平・改変することなく造墓活動が行われていくことにある。つまり、相当期間経ても、過去の遺構が何らかの構造物または高まりと認識されていたことを示していると思われるのである。

このような認識で改めて今回取り上げた遺跡を見ていくと、土田遺跡では溝SD30を境にして古墳時代初頭の墓域と中期～後期の墓域が対峙するような位置にあり、山中遺跡の場合も弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓の隙間に造られているように見える。また朝日遺跡中央部においても、2基の古墳は東にある墓域と谷を

隔てた対岸に位置している。これらの事例は、当時墳墓と意識されていたか否かはわからないが、新たな墓の造営によって破壊すべきものではないという認識があった結果であると考えたい。つまり古墳時代中期には、朝日遺跡95・96調査区のみならず尾張北部各地において、前代の構築物の残存である墳丘の高まりと周溝の窪みが、それとわかるぐらいに看取できていたと思われるのである。

さらにこれらのことを前提に、改めて朝日遺跡の古墳時代中期～後期の景観ということに立ち戻ってみると、中央部では50mクラスと10mクラスの2基の円墳が立ち並び、谷地形の向こうには径30mを超える大型方形周溝墓を有する弥生時代における朝日遺跡最大の墓域であった東墓域の名残が広がる風景が想定できる。また、西部にも同様の方形周溝墓の痕跡があって、その高まりと窪みがある場所に土師器甕などの供献がなされていたと想定できるであろう。さらに想像を逞しくするならば、西部の貝殻山貝塚の周辺では須恵器・土師器などがまとまって一定

量出土するが、現在もはっきりと高まりとわかる貝塚近辺では遺物がほとんど出土しない。当時墳丘裾部や周溝内で供献遺物が出土する事が一般的であることを考えると、貝殻山貝塚部分に古墳またはそれに類する高まりが存在したと推定でき、ここでも中央部と同じように、古墳と方形周溝墓の痕跡という組み合わせがあると考えられるのである。

また、植田文雄は古墳時代前期に、定型化した前方後円(方)墳以外とは別の高塚墳が成立し、それらは葬送のみで終了する低塚とは異なり、祭祀が繰り返し行われたと述べられおり、前記した既存の構築物の高まり・窪地に対する取り扱われ方や、古墳の数の少なさなど、古墳時代中期に造られる尾張平野の小規模古墳についても、埋葬の場という以外にも再考の余地があるように思われる(植田文雄 2002)。

これまで取り上げた墳墓については、当然のことながら大地域の首長墓となる大型前方後円(方)墳、大型円(方)墳、小型円(方)墳といった関係の中で考察されねばならず、本文の事例の中でも、供献遺物を多量に出土する比較的大型な墳墓、能田旭古墳や高塚古墳については、別のランクを考えなければいけないかもしれない。また、中期～後期という大雑把な括りのみで、細かい時期についてはまったく触れなかった。このことは、埋葬が終わった高塚に対して、その後幾度かの祭祀が行われた可能性が高いということ を考慮すると、遺物の出土状況を含め今後検討しなければいけない課題であろう。

この文・図版を作成するにあたり、野口哲也、原田幹、河合明美、田口雄一の各氏には多大な協力をいただいた。記して感謝するしだいである。

参考文献

- 七原恵史・加藤安信他 1982 『朝日遺跡 ～』愛知県教育委員会
 石黒立人・宮腰健司他 1991 『朝日遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人・宮腰健司他 1994 『朝日遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 伊藤稔・柴垣勇夫 1972 『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会
 宮腰健司他 2000 『朝日遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人他 1999 『門間沼遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第89集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 石黒立人他 1993 『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 北條献示・日野幸治他 1983 『大塚古墳範囲確認調査報告書()』稲沢市教育委員会
 北條献示・日野幸治他 1984 『大塚古墳範囲確認調査報告書()』稲沢市教育委員会
 松原隆治・服部信博他 1992 『岩倉城遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎他 1987 『土田遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集)(財)愛知県埋蔵文化財センター
 伊藤秋男・澤村雄一郎他 1994 『高塚古墳発掘調査報告書』(南山大学大学院考古学研究報告第2冊)南山大学高塚古墳発掘調査会
 伊藤秋男・市橋芳則他 1986 『能田旭古墳一第一次発掘調査報告一』師勝町教育委員会
 伊藤秋男・森崇史・市橋芳則 1989 『能田旭古墳一第二次発掘調査報告一』師勝町教育委員会
 赤塚次郎他 1984 『勝川』(愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集)(財)愛知県教育サービスセンター
 植田文雄 2002 『墳丘墓と古墳一墳丘築造の飛躍と史的背景一』『古代学研究』156

